

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 45 —

## 下 卷

志波岡本遺跡 ・ 江栗遺跡

朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— 45 —

下 卷

志波岡本遺跡・江栗遺跡

朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査



a 志波岡本遺跡全景



b 1～3号掘立柱建物跡



a 江栗道跡全景（西から）



b 江栗道跡Ⅰ区全景（上空から）

## 序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和61年度に実施した九州横断自動車道建設に伴う、朝倉郡杷木町所在志波桑ノ本遺跡、志波岡本遺跡と、江栗遺跡についての埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和63年度に完了し、平成2年3月10日には朝倉日田間が開通し、現在では全線開通していますが、出土文化財資料の整理は継続実施して、報告書も順次刊行する予定です。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを望みます。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

## 例 言

1. 本書は、昭和61年度に福岡県教育委員会が日本道路公園から委託を受けて実施した、九州横断自動車道建設によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告の45冊目にあたる。
2. 紙数の関係で上下2巻に分冊し、上巻に志波桑ノ本遺跡、下巻に志波岡本遺跡・江栗遺跡の調査成果を取録する。
3. 出土遺物は、県文化課甘木事務所・太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・豊福弥生・塩足里美らの協力を得た。
4. 掲載写真のうち、遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸二の協力を得た。また空中写真撮影では、空中写真稲富とフォト大塚にそれぞれ撮影を委託した。なお、航空写真は国土地理院提供の写真を使用した。
5. 挿図のうち、遺構図は各調査担当者と武田光正・日高正幸・高田一弘が実測し、遺物図は中間研志・小池史哲と、岡由美子・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美・大野愛里・辻啓子が実測した。また図面の浄書には、豊福弥生・塩足里美・甲斐孝司・秋吉邦子・江口佳子の助力を得た。
6. 挿図で使用する方位は新平面直角座標系Ⅱの座標北を使用した。
7. 本書の執筆は、Ⅲ-2と-3のうちの地輪について岸本圭、Ⅴを中間研志が分担し、他は小池史哲が執筆した。編集は上巻を小池、下巻を小池と中間が担当した。

# 本文目次

## 下 卷

IV 志波岡本遺跡の調査	1
1 はじめに	1
2 遺構と遺物	3
1. 掘立柱建物跡	3
2. 土 塼	7
3. 土 坑	7
4. 溝状遺構	8
5. 遺物包含層	10
3 おわりに	25
V 江栗遺跡の調査	27
1 はじめに	27
2 江栗Ⅰ区の調査	27
1) 工房跡	27
2) 土 塼	39
3) 溝状遺構	44
4) 下段建物面	48
5) 下段段落部	50
6) 包含層出土遺物	56
3 江栗Ⅱ区の調査	62
1) 礎石建物跡	65
2) 掘立柱建物跡	71
3) Ⅱ区火葬墓	71
4) Ⅱ区土塼	76

5) II区包含層出土遺物	78
4 おわりに	79
1) C14年代測定について	79
2) 江栗遺跡の変遷	80

(上 巻)

I 調査の経過	1
II 位置と環境	8
III 志波桑ノ本遺跡の調査	11
1 はじめに	11
2 遺構と遺物	13
1. 住居跡	14
2. 掘立柱建物跡	37
3. 井戸状遺構	39
4. 竪穴・土坑	40
5. 古 墳	50
6. 土壇墓	84
7. 通路状遺構	111
8. 溝状遺構	144
9. 落ち込み	160
10. その他の遺構と遺物	176
3 おわりに	197

## 図 版 目 次

- 巻頭図版 1 a 志波岡本遺跡全景  
 b 1～3号独立柱建物跡  
 2 a 江栗遺跡全景（西から）  
 b 江栗遺跡Ⅰ区全景（上空から）

### 志波岡本遺跡

本文参照頁

図版 1-1	志波岡本遺跡遠景	1
-2	志波岡本遺跡全景空中写真	1
2-1	独立柱建物跡群	3
-2	1号独立柱建物跡	3
3	1号独立柱建物跡柱穴内堆積状況 1	3
4-1	1号独立柱建物跡柱穴内堆積状況 2	3
-2	2・3号独立柱建物跡	5
5-1	土 壌	7
-2	土壌出土動物遺体	7
-3	調査風景	1
6-1	調査区南西部	10
-2	調査区西端部	10
-3	包含層遺物出土状況（J15区）	10
7	出土土器 1（弥生時代以降の土器）	10
8	出土土器 2（縄文土器）	14
9	出土石器 1	18
10	出土石器 2・土製品・金属製品	18

### 江栗遺跡

図版 1-1	江栗遺跡全景（Ⅱ区礎石建物検出時）（西上空から）	27
--------	--------------------------	----

- 2	江栗遺跡全景 (完掘後) (西上空から) .....	27
2-1	江栗遺跡Ⅰ区全景 (上空から) .....	27
- 2	Ⅰ区1号工房跡 (東から) .....	27
3-1	Ⅰ区1号工房跡 (北から) .....	27
- 2	Ⅰ区2号工房跡 (向こうは1号工房跡) (南東から) .....	39
4-1	Ⅰ区2号工房跡 (北東から) .....	39
- 2	Ⅰ区1号土塙 (北から) .....	39
5-1	発掘調査風景 (Ⅰ区1号工房跡付近) .....	27
- 2	発掘調査風景 (Ⅰ区1号工房跡内) .....	27
6-1	江栗遺跡Ⅱ区全景 (礎石建物検出時) (上空から) .....	62
- 2	Ⅱ区礎石建物 (上空から) .....	65
7-1	江栗遺跡Ⅱ区全景 (獨立柱建物検出時) (上空から) .....	62
- 2	Ⅱ区礎石建物 (東から) .....	65
8-1	Ⅱ区礎石建物 (北から) .....	65
- 2	Ⅱ区獨立柱建物 (東から) .....	71
9-1	Ⅱ区1号火葬墓 (南から) .....	71
- 2	Ⅱ区1号火葬墓 (集石除去後) (東から) .....	71
10-1	Ⅱ区2号火葬墓 (左手前は3号火葬墓) (北から) .....	73
- 2	Ⅱ区2号火葬墓 (集石除去後) (西から) .....	73
11-1	Ⅱ区3号火葬墓 (北東から) .....	73
- 2	Ⅱ区3号火葬墓 (集石除去後) (北東から) .....	73
12-1	Ⅱ区4号火葬墓 (南から) .....	76
- 2	Ⅱ区5号火葬墓 (北から) .....	76
13-1	Ⅱ区5号火葬墓 (南から) .....	76
- 2	Ⅱ区1号土塙 (南から) .....	76
14-1	Ⅱ区2号土塙 (東から) .....	77
- 2	Ⅱ区発掘調査風景 (獨立柱建物周辺) .....	71
15	Ⅰ区1号工房跡出土土器 .....	39
16-1	Ⅰ区1号工房跡及びその周辺出土遺物 .....	39
- 2	Ⅰ区1号土塙出土土器 .....	41
17-1	Ⅰ区1号土塙出土土器 .....	41
- 2	Ⅰ区各ビット出土土器 .....	49
18	Ⅰ区下段1号溝出土土器 .....	44

19-1	I 区下段1号溝及び溝上面出土土器	44
- 2	I 区下段段落最下層出土土器	53
20	I 区下段段落最下層出土土器	53
21-1	I 区下段黑褐色包含層出土土器	54
- 2	I 区下段包含層等出土土器	56
- 3	I 区出土埴・砾石・滑石製石鍋	61
22-1	I 区出土滑石製石鍋・鉄器・石器	61
- 2	II 区礎石建物関連出土遺物	65
23-1	II 区据立柱建物出土土器	71
- 2	II 区火葬墓出土「崇寧通寶」・土器	76
- 3	II 区2号土坑出土土器	77
- 4	II 区包含層等出土土器・銅銭	78
- 5	II 区段落斜面出土須恵器	78

## 挿 図 目 次

第1図	志波岡本遺跡地形図 (1/2000)	2
第2図	志波岡本遺跡1号建物跡実測図 (1/80)	折込み
第3図	2号建物跡実測図 (1/80)	4
第4図	3号建物跡実測図 (1/80)	6
第5図	土坑実測図 (1/30)	7
第6図	1・2号土坑実測図 (1/80)	8
第7図	弥生土器実測図 (1/4)	11
第8図	土師器・須恵器・陶磁器等実測図 (1/3)	12
第9図	縄文土器実測図1 (1/3)	15
第10図	縄文土器実測図2 (1/3)	16
第11図	縄文土器実測図3 (1/3)	18
第12図	石器実測図1 (1/3)	19
第13図	石器実測図2 (1/3)	20
第14図	石器実測図3 (1/3)	22
第15図	石器実測図4 (3/4)	23
第16図	石器実測図5 (1/2)	24

第17図	土製品実測図 1 (1/2)	.....	24
第18図	土製品実測図 2 (3/4)	.....	24
第19図	石製玉類実測図 (3/4)	.....	25
第20図	金属製品実測図 (1/2)	.....	25
第21図	江栗遺跡周辺地形図 (1/2,000)	.....	28
第22図	江栗Ⅰ区発掘区全体図 (遺構面) (1/500)	.....	29
第23図	江栗Ⅰ区遺構全体図 (1/200)	.....	30
第24図	Ⅰ区下段トレンチ西壁土層 (1/80)	.....	31
第25図	Ⅰ区1号工房跡実測図 (その1) (1/60)	.....	32
第26図	Ⅰ区1号工房跡実測図 (その2) (下半は遺物出土状態) (1/60)	.....	33
第27図	Ⅰ区1号工房跡出土遺物実測図 (その1) (1/3, 41のみ1/2)	.....	34
第28図	Ⅰ区1号工房跡出土遺物実測図 (その2) (1/3)	.....	36
第29図	Ⅰ区1号土壇・1号工房跡上面出土土器実測図 (1/3)	.....	38
第30図	Ⅰ区2号工房跡実測図 (その1) (1/60)	.....	40
第31図	Ⅰ区2号工房跡実測図 (その2) (1/60)	.....	41
第32図	Ⅰ区1号土壇実測図 (1/40)	.....	42
第33図	Ⅰ区1号土壇出土土器実測図 (その1) (1/3)	.....	43
第34図	Ⅰ区1号土壇出土土器実測図 (その2) (1/3)	.....	44
第35図	Ⅰ区1号溝出土土器実測図 (その1) (1/3)	.....	45
第36図	Ⅰ区1号溝出土土器実測図 (その2) (1/3)	.....	46
第37図	Ⅰ区1号溝上面出土土器実測図 (1/3)	.....	47
第38図	Ⅰ区各Pit出土遺物実測図 (その1) (1/3)	.....	50
第39図	Ⅰ区各Pit出土遺物実測図 (その2) (1/3)	.....	51
第40図	Ⅰ区下段段落最下層出土土器実測図 (その1) (1/3)	.....	52
第41図	Ⅰ区下段段落最下層出土土器実測図 (その2) (1/3, 42のみ1/2)	.....	54
第42図	Ⅰ区下段段落下層黒褐色包含層出土土器実測図 (1/3)	.....	55
第43図	Ⅰ区下段暗褐色包含層出土土器実測図 (1/3)	.....	57
第44図	Ⅰ区下段包含層出土遺物実測図 (その1) (1/3)	.....	58
第45図	Ⅰ区下段包含層出土遺物実測図 (その2) (1/4, 18のみ1/3)	.....	59
第46図	Ⅰ区出土石器・石製品実測図 (1/2, 1のみ実大)	.....	60
第47図	Ⅰ区出土鉄器・土鈴・玉実測図 (1/2, 4のみ実大)	.....	62
第48図	江栗Ⅱ区遺構全体図 (遺構面、建物部分は上層面) (1/300)	.....	63
第49図	Ⅱ区礎石建物面 (上層) 周辺実測図 (1/100)	.....	64

第50図	Ⅱ区礎石建物実測図 (1/60)	66
第51図	Ⅱ区礎石建物面及び南北トレンチ断面実測図 (1/80)	67
第52図	Ⅱ区礎石建物整地層出土遺物実測図 (1/3)	67
第53図	Ⅱ区出土鉄釘実測図 (1/2)	68
第54図	Ⅱ区掘立柱建物面(下層)周辺実測図 (1/100)	68
第55図	Ⅱ区掘立柱建物実測図(その1) (1/60)	69
第56図	Ⅱ区掘立柱建物実測図(その2) (1/60)	70
第57図	Ⅱ区掘立柱建物面Pit出土土器実測図 (1/3)	71
第58図	Ⅱ区1号火葬墓実測図 (1/40)	72
第59図	Ⅱ区1(1~3)・4(4~6)・5(7~9)号火葬墓出土土器実測図 (1/3)	73
第60図	Ⅱ区2・3号火葬墓実測図 (1/40)	74
第61図	Ⅱ区4・5号火葬墓実測図 (1/40)	75
第62図	Ⅱ区1・2号土坑実測図 (1/40)	77
第63図	Ⅱ区2号土坑出土土器実測図 (1/3)	78
第64図	Ⅱ区段落包含層出土土器実測図 (1/3)	78
第65図	Ⅱ区出土打製石斧実測図 (1/2)	79

## 付 図 目 次

付図	志波岡本遺跡遺構配置図 (1/300)	80
----	---------------------	----

## 表 目 次

表1	志波岡本遺跡出土土器計測表	21
表2	江栗1区出土鍛冶関連遺物一覧	38

#### IV 志波岡本遺跡の調査

## IV 志波岡本遺跡の調査

### 1. はじめに

志波岡本遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字志波字岡本と字梅迫の一部にあり、699-2・700~705・764-1・765-1・768番地に互る横断道路建設用地内を発掘調査した。遺跡名は大字と小字名を続けて用いたが、字岡本分が面積の過半数を占めるため「志波岡本遺跡」と呼称することにした。

STA.246.0~STA.248.2の間が調査区域であり、用地内の道路は生活道路であるために保全して調査区域から除外した。用地取得が未解決の部分も少し残っていて、調査区南東隅部には祠の残る境内地もあり調査区域から除外した。また、斜面下部の用地外に民家、堂宇や水田があり、土砂流入を防ぐために調査区域は用地範囲から控えをとり、用地幅一杯に発掘調査していない部分が多い。実質調査面積は9400㎡である。

調査は昭和61年4月22日~6月20日と、昭和62年3月9日~3月24日の期間に実施した。

中央部に突出した尾根の鞍部には、大形の掘立柱建物跡が発見され、南西側の斜面に縄文土器片などを含む遺物包含層が広がっていた。

5月13日から東側尾根部分の調査を開始する。5月下旬には、谷部分の暗茶褐色ないし黒褐色を呈する部分に試し掘りのトレンチを設定して掘り下げたが、遺構・遺物はみられなかった。トレンチの西側について面を広げて黒褐色土を除去した。しかし柱穴状ピット以外の遺構はみられず、遺物も殆ど出土しない。

5月29日には、文化財調査安全パトロールが実施されたが、降雨が激しく発掘作業は中止した。しかし夜半に東側尾根の斜面下にある堂宇の裏側で土砂崩壊が起こり、土砂が道路を覆っていた。このため、30日は災害復旧作業と、発掘区の周囲を草刈りして、1日が過ぎた。

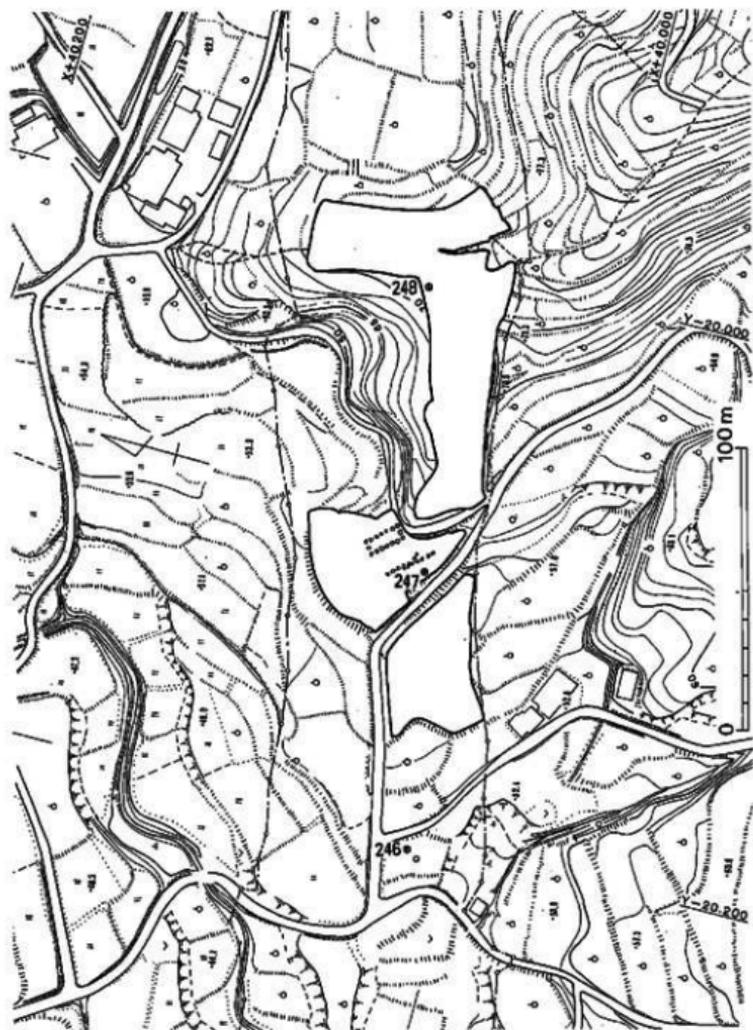
6月5日に清掃して、6日に気球を使用した全景写真撮影を実施した。

12日からは掘立柱建物跡の柱穴を断ち割り、柱痕の確認と柱穴の全掘を行った。

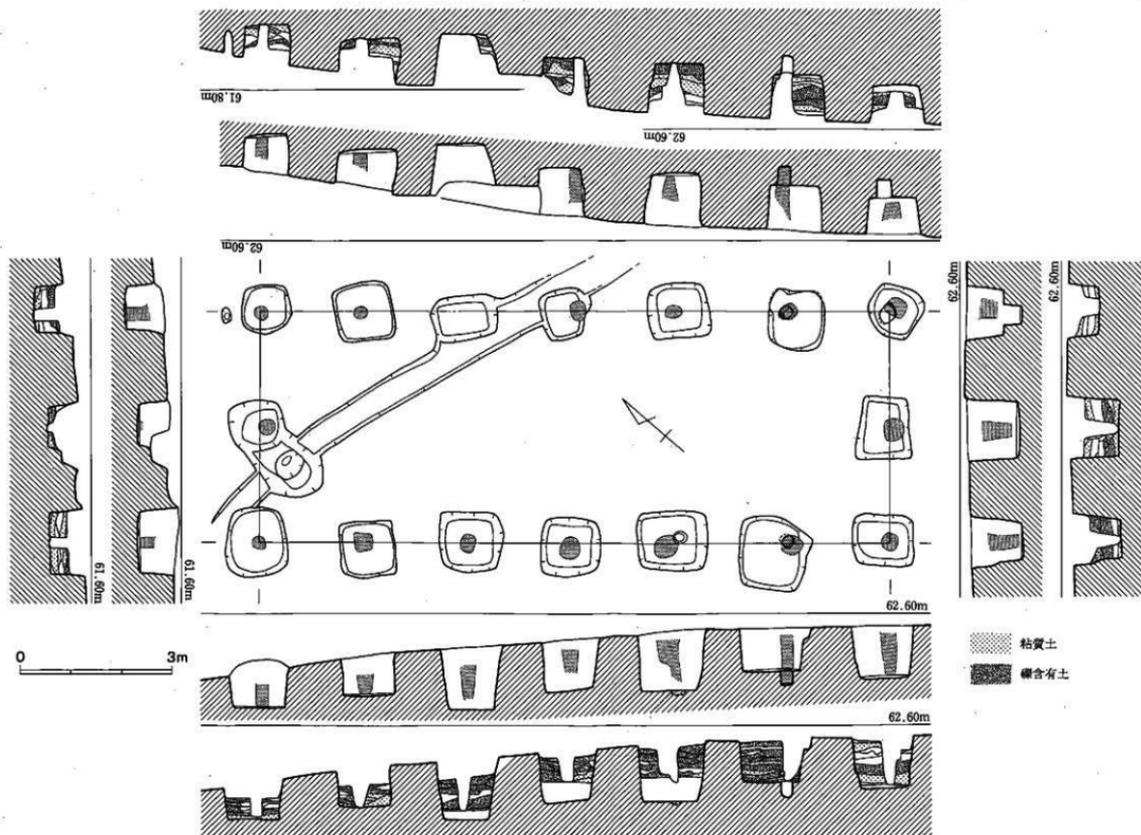
#### 志波岡本遺跡の位置表示

志波岡本遺跡の位置は、新平面直角座標系ⅡのX=40030、Y=-19980地点から西方向に広がり、X=40000、Y=-20200地点付近の間に位置する。路線幅内の約220m区間でもある。

また、経緯度では、東経130°47'02"、北緯33°21'40"付近に相当する。



第1圖 志波岡本遺跡地形図 (1/2000)



第2图 志波岡本遺跡1号建物跡実測图 (1/80)

### 地区割の設定

志波岡本遺跡では、掘立柱建物跡以外の遺構は疎らな状況であったが、縄文土器などを含む遺物包含層があり、遺物の分布状況を把握する目的もあり、表土剥ぎ実施後に、公共座標に合わせた実測基準点の設置と地区割をすることにした。

地区割は、遺跡南西部の $X=40000$ 、 $Y=-20200$ を起点として、5m刻みに、東へ $1 \cdot 2 \cdot 3 \sim 45$ と数で、北へ $A \cdot B \cdot C \sim U$ とアルファベットで区分して、A1区・B2区のように呼ぶことにした。たとえば1号建物跡東隣の区画は $X=40040$ 、 $Y=-20085$ の北東側の5m四方でJ22区に相当する。

## 2. 遺構と遺物

志波岡本遺跡は、標高51~78m位にあって、尾根や麓の斜面などの地形で高低差がある。この遺跡で発見された遺構は次のとおりであるが、主に傾斜が緩やかな部分に集中する。

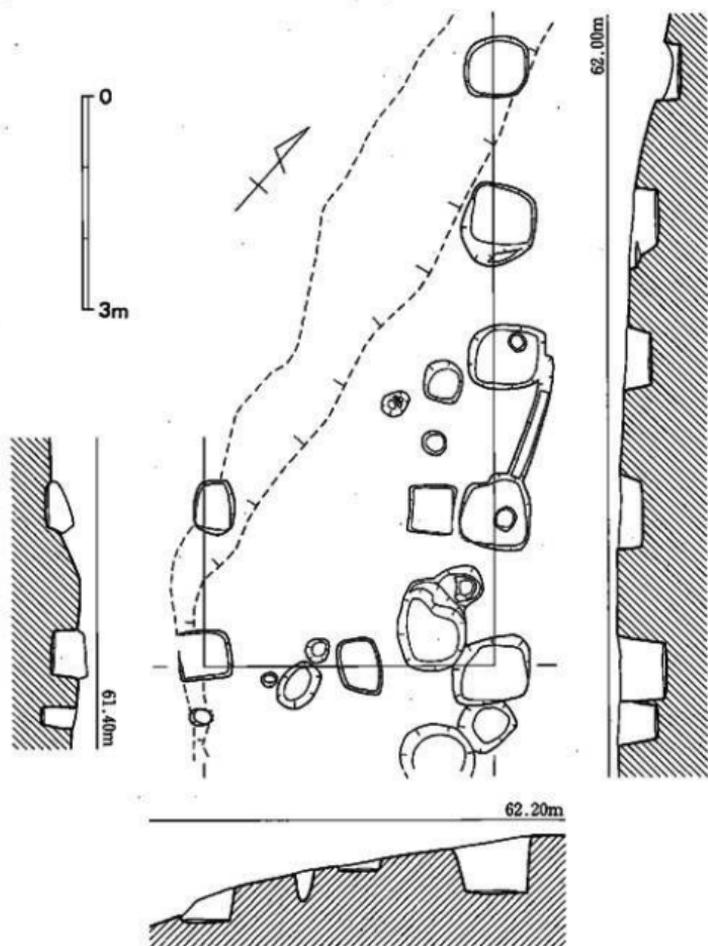
掘立柱建物跡	3棟(古代?)
土 壇	1基(近代)
土 坑	2基(縄文)
溝状遺構	4条(近世?)
柱穴状ピット	多数
遺物包含層	(縄文~中世)

### 1 掘立柱建物跡

調査区域内には、多くの柱穴状ピットが発見された。直径20cm程度から直径100cmに近い例もあるが、大半は直径30cm前後のものである。しかし、大半の例はそれぞれの柱穴状ピットがどのような関係なのかは現地で確認し難かった。このため図上で建物を想定できる例も無いとは言えないが、取立てを試みてはいない。ここでは、現地で確実に確認できた1号~3号建物の3棟のみを取り扱うことにする。

#### 1号建物跡(図版2-2・3・4-1、第2図)

調査区中央部の標高61.3~62.2m位で発見された。2×6間の建物である。主軸方向はN42°Wを向き、柱穴掘方内の柱痕の位置から桁行6間で12.5m、梁行2間で4.6mを測る。一部の柱穴は東西方向に走る近世の溝に因って壊されているが、殆どの柱穴は検出面での上縁が一辺90



第3图 2号建物跡実測図 (1/80)

cm～120cm規模の隅丸方形で、深さは40cm～100cm前後残る。柱痕は直径30cm前後を測る。柱穴内では、黄褐色粘土と茶褐色土・暗茶褐色土などが交互に堆積する版築で埋められている。柱穴の床面は平坦で、特に敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

#### 出土遺物

柱穴掘方からは、縄文土器小片、弥生後期の大形歪らしい小破片、支脚片、土師器細片、黒曜石剥片などが出土したものの、図示しえるような土師器片はない。周辺の包含層も縄文土器片と土師器片が混在して出土する。

支脚（第8図16） 裾部の破片で、復原裾径12.0cmの大きさ。内外面ともに板ナデ調整とナデで器面調整されるが、凹凸が目立つ。胎土に砂粒・褐色粒を含み、暗茶褐色に焼成される。北隅の柱穴掘方から出土した。

### 2号建物跡（図版4-2、第3図）

調査区中央部で、1号建物跡の南西側に約8mの距離を挟んで平行した位置にある。西側は崖で削られ、柱穴1基が3号建物跡の柱穴1基と一部重なり3号より先行する。2×4間（若しくは4間以上）の建物である。主軸方向はN42°Wを向き1号建物跡と平行する。柱穴掘方内の柱痕が、西側で剛平を受けていることもありさほど明確でないものの、建物の規模は桁行4間で8.4m、梁行2間で4.2m前後を測る。

北東隅桁行の柱穴は、検出面での上縁が一辺90cm～110cm規模の隅丸方形で、深さは30cm～70cm前後に残る。柱痕は直径30cmを測る。柱穴内では、黄褐色粘土と茶褐色土・暗茶褐色土などが交互に堆積する版築で埋められている。柱穴の床面は平坦で、敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

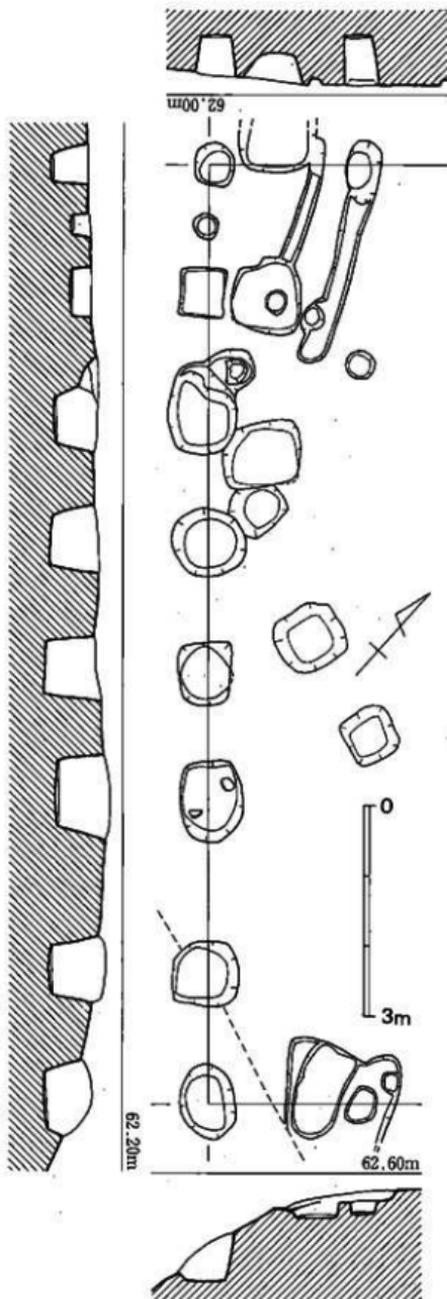
ちなみに、1号建物跡との配置をみると、柱の太さを考慮しての建物間は8.8mを距ていて、南東側の妻辺が1間分ずれて、2号建物跡の妻辺の延長線が1号建物跡の妻から1間北西側の梁の位置に相当する。また、柱穴規模や柱穴内の版築状況の酷似などからみても共通性がみられる。従って、1・2号建物は同時期に構築された建物の可能性が極めて高いといえよう。

#### 出土遺物

柱穴掘方からは、縄文土器細片、土師器細片などが出土したものの、図示しえるような土師器片はない。周辺の包含層も縄文土器片と土師器片が混在した状況である。

### 3号建物跡（図版4-2、第4図）

2号建物跡の柱穴と一部重複および近接して発見された柱穴列で、北西側が崖で削られるため、規模など不明な部分が多いが、桁行7間若しくは7間以上も想定しうる。実測図では北東側に直交する位置にある柱穴状ピットを図示したが、むしろ崖で削られた側の南西側に対応す



る桁行辺を想定する方が自然であろう。柱穴列の主軸方向はN42°Wを向く。柱穴掘方内の柱底は明瞭でなく、堆積土も顕著な版築構造ではない。仮に桁行7間として13.3mを測るが、柱穴間はやや不均等な間隔である。柱穴は検出面での上縁が一辺70cm～110cm規模の隅丸方形あるいは不整形・楕円形だが北西側の柱穴は直径60cm規模である。深さは30cm～80cm程に残り、柱穴の床面は平坦だが、敷石施設や突き固めなどの強度補強の痕跡はみられない。

#### 出土遺物

柱穴掘方からは、縄文土器細片、外面にハケ目のみられる器台か支脚らしい小破片、土師器細片などが出土したものの、図示しえるような資料はない。

#### 櫛列?

調査区西部のF8～F10区で見られた柱穴列で、直径30cm前後の柱穴12基が1.30m間隔に並ぶが、主軸方向をN88°30'Eのはは東西に向ける。柱穴は、深さ10～20cmで、黒色土・暗灰色土が堆積していて、柱の痕跡は明確でない。西側端部では浅い穴が多く、その先が段落ちのため延長は分からない。東側端では1.8m先で軸線にのるビットがあるものの、直交し

て対応するピットが存在しないため、建物跡ではなく、柵列の可能性のあるものの、柱穴列の両脇や南側の包含層で特に変化は認められず、北側は調査区域外であるため、性格を知る手だては得られなかった。

各柱穴からの遺物出土はみられなかった。

## 2 土 壙 (図版5-1, 第5図)

L18・L19区に跨って発見された。主軸方向をN56°Wにとる、不整形プランの土壙で、上縁で長軸1.35m、短軸1.10mの広さを有する。深さは0.50m前後に残り、底面は長軸1.00m、短軸0.90m程度の広さで中央部がやや窪む。壙内には暗灰茶褐色の幾分か軟らかな

堆積土が堆積していて、床面に接した状態で動物遺骸が出土した。遺骸は中央部が既に残らないが、東側隅と西側隅に前肢と後肢に分かれて発見された。左下顎骨が先端を南側に向けた状態で東壁に接していて、背を北側に向けた状態で埋葬されていた。

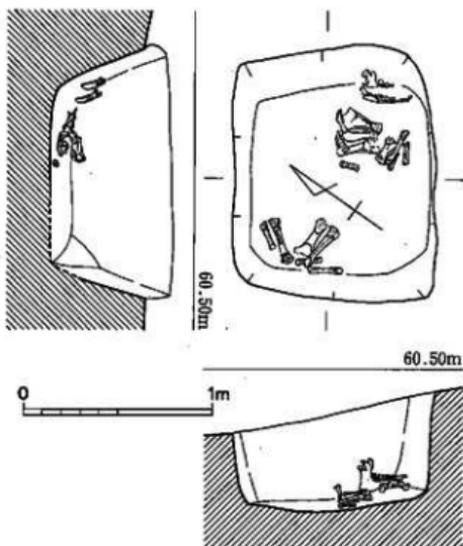
動物遺体 (図版5-2) 骨自体は既に脆弱化して残らない部分もあるが、左右の下顎骨などは比較的残りが良い。図版に示す左下顎は先端を欠損するが、残存長25.5cmの大きさである。また脛骨らしい長い骨は中央部の細い部分の径が2.50cm×2.85cmの大きさである。このほか上腕骨らしい破片では最も細い部分の径が3.00cm×3.20cmであった。

これらの骨格資料では、下顎骨などに残る歯の形状などから牛と判断できたが、雄雌の判定、体長計測などを試みていない。出土状況からは肩から尻までの距離は1mを大きく越さないこと、歯の磨耗が少ないこと、骨の厚みが薄いことなどからみて、仔牛の可能性が高い。

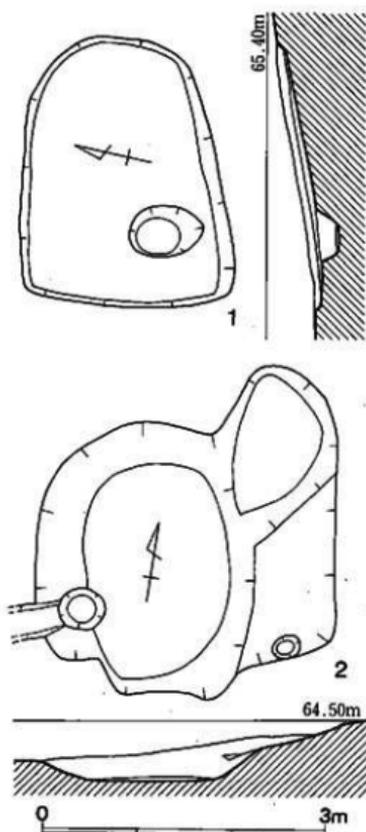
## 3 土 坑

### 1号土坑 (第6図)

GH24・25区に亘って発見された不整形長方形の土坑で、黒茶褐色土が堆積していた。東西3.8



第5図 土壙実測図 (1/30)



第6図 1・2号土坑実測図 (1/80)

#### 4 溝状遺構

##### 1号溝状遺構

北東端部の尾根線上にある溝状の落ち込みで、上面での幅は1.0~2.0m、最も深い部分での深さ0.3mを測る。斜面下から尾根の鞍部にかけて27.0mの長さを確認した。溝内には暗灰茶褐色土・暗灰褐色土が堆積し、下部には淡灰褐色砂が薄く交互に挟まる部分もみられた。床面に階段などの施設はみられないが、斜面下から尾根上への通路であろう。特に遺物の出土はみられ

m、南北3.0mの広さをもつが、上縁は標高64.7~65.4mの高低差があり、深さは全体に10cm前後と浅く、床面も傾斜する。

##### 出土土器

土器らしい小破片が3片出土した。しかし、図示出来るような特徴はみられない。

##### 2号土坑 (第6図)

H23区に見えられた不整形の土坑で、黒茶褐色土が堆積していた。東西4.2m、南北3.8mの広さをもつが、上縁は標高64.0~64.5mの高低差がある。床面は南北3.0m、東西2.0mの楕円形で標高63.7m位を測る。

##### 出土土器

縄文晩期の黒色磨研系の土器小片が僅かに出土しているが、図示しえるような資料ではない。

##### 石器 (図版9、第14図)

すり石 (22・25) 2点出土した。ともに掌に握り易い大きさの楕円形の扁平な安山岩を素材にして、平坦な両面をすり面に使用している。22では周縁に敲打痕がみられ、敲石にも用いている。すり面は両面ともかなり平らである。25では敲打痕はみられず、片面に膨らみを残して、22に比して使用頻度が少なかったと思われる。計測値は表に示す。

なかったが、堆積土が2号溝状遺構と同様であり、同じ時期に使用・埋没した堆積土であろう。

## 2号溝状遺構

東端部の尾根線上にある溝状の落ち込みで、上面での幅は1.0～3.5m、最も深い部分での深さ0.5mを測る。19.0mの長さを確認したが、南側尾根上に祠があり、祠に通じる道に相当すると判断できる。斜面下側の約1/3を掘りあげたが、残りは祠の処遇が片づいた後に調査する予定だったが、未実施に終わった。溝内には暗灰茶褐色土・暗灰褐色土が堆積し、下部には淡灰褐色砂が薄く交互に挟まる部分もみられた。床面に階段などの施設はみられなかった。

1号溝状遺構と約20mの距離を距てるが、延長線上にあることなどから、同一の遺構で、むしろ通路遺構とするのが適当かも知れない。

### 出土土器

縄文土器小片と、染付碗・染付皿破片が出土している。染付碗は外面に花卉文様の一部がみられる茶碗片である。また染付皿は見込み中央に五弁花らしいこんやく印判文様、外面に文様の一部がみれる皿の破片である。ともに18世紀後半頃の作であろう。

### 石器（図版9・10、第14・16図）

すり石（24） 1点出土した。掌に握り易い大きさの楕円形の扁平な安山岩を素材にして、平坦な両面をすり面に使用している。面は両面ともかなり平らだが、片面の中央部に敲打による痘痕状の凹みがある。また周縁には敲打痕がみられる。

尖頭器（44・45） 2点出土した。44はサヌカイトの片面に自然面を残す横長剃片を素材にしている。主要剃離面側から周縁に調整剃離を施して整形しているが、基部には殆ど調整剃離がみられない。主要剃離面側は打点と打痕部分に剃離を加えて厚みを減じているほかは剃離面のままである。長さ11.3cm、幅5.0cm、厚さ1.5cmの大きさ。風化はかなり進んでいる。旧石器時代後半～末頃の石槍に含めても不都合のない印象を受ける。

45は基部側を欠損するため、全体の形は不明だが、石槍の可能性がある。残存長7.8cm、幅4.6cm、厚さ2.1cmの大きさ。両面から調整剃離が施されているが、片面の一部に自然面が残る。44に比して風化の度合いは低い。

## 3号溝状遺構

1・2号溝状遺構の中間にあり、これらの軸線に直交する方向に11.0m確認した。幅0.3～1.0mで、最も深い部分で深さ0.3mを測る。溝内には灰黄褐色土と淡灰褐色砂が薄く互層状に堆積し、70×40×30cm程の大振りな石が1個溝内に横たわっていた以外に、特に遺物の出土はみられなかった。

#### 4号溝状遺構

G34区にあり、南東―北西方向に5.0m分を確認した。東端尾根から小さな谷を挟んで西側の尾根の鞍部に位置していて、尾根線の上方に続く。幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.3mの規模で、暗茶褐色土が堆積する。溝内からの遺物出土はみられなかった。

#### 5 遺物包含層

調査区全体に、表土から縄文土器片・土師器片・黒曜石片などが散在していて、遺跡全体が遺物散布地のような状態であるが、表土を除去した遺構検出面でもやはり同様の状態であった。調査区西部のA～Hの1～16区は、調査区のなかで最も傾斜の緩やかな地形であり、遺構検出面に縄文晩期～古墳時代初期の遺物が散らばっていて、現代の区画に伴う溝や柵列かと思われる柱穴列を含む柱穴状ピットなどの他には、特に遺構は検出されなかった。このため遺物包含層として掘り下げ作業を実施した。

表土は暗灰茶褐色土で、表土の下には暗褐色土が堆積するが、遺物が多くみられるのは更に下の茶褐色土である。遺物包含層として扱ったのは、この茶褐色土からで、上面を僅かに削ったところでは遺構検出面にしている。茶褐色土は更に下の黄褐色土との間に20～30cmの厚みがあり、上から下に向かって漸次的に色調が淡く変化している。遺物は茶褐色土の上位に比較的多くみられたため、便宜的に上下に区分して、下半分は茶褐色土下層とした。

しかし、遺物出土状況を精査すると、茶褐色層の遺物では縄文土器片が圧倒的に多いものの弥生土器・土師器片・須恵器片を含む。土器片は器面風化が進んでいて、破片の角が丸くなったものが多くみられた。茶褐色土下層の土器はそれよりやや状態が良いものの、やはり同様な状態であり、時期的に下降する土師器片も混在していて、縄文時代の単純層ではない。

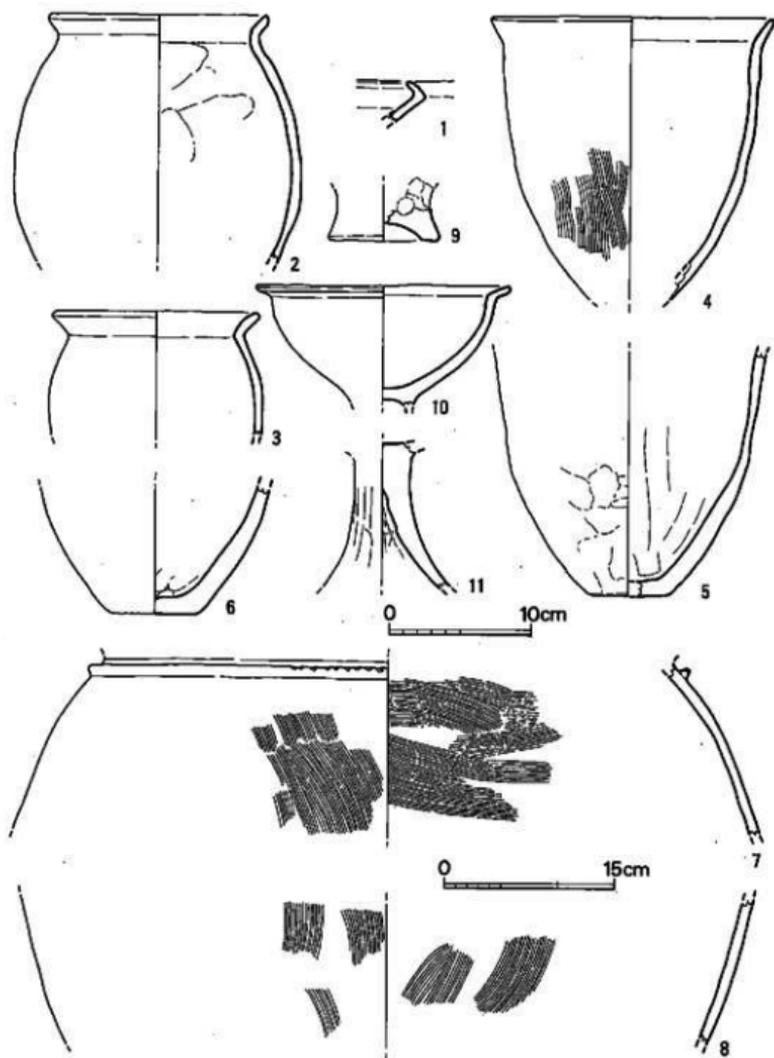
また黄褐色土層も掘りさげたが、遺物の出土はみられなかった。

弥生時代以降の土器（図版7、第7・8図）

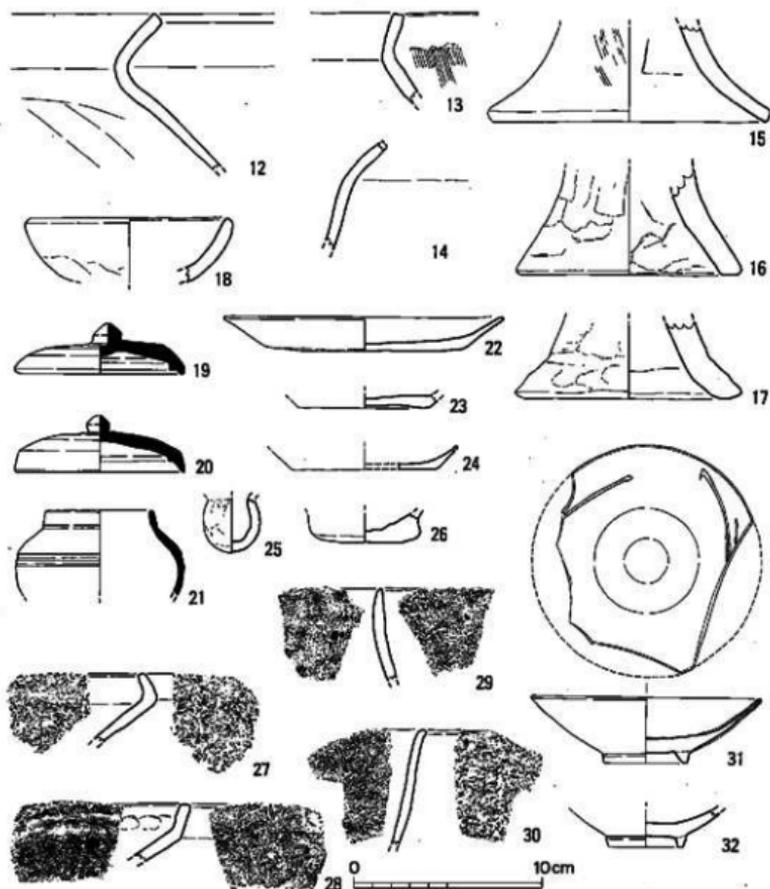
出土遺物量はバンコンテナで7箱程度であるが、主なものを紹介しておく。

壺（1・27） 1は屈折して内傾する口縁部破片で、壺の口縁部であろう。27も端部が内傾する口縁部破片で、1よりも屈曲は緩やかである。器面は風化磨滅する。

甕（2～9・12～14） 2・3は膨らんだ胴部から頸部が括れて口縁部が外反する甕である。2は復原口径15.6cm、残存器高17.5cm、胴最大径20.4cmの大きさで、内外面ともにナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。3は復原口径14.8cm、残存器高12.4cm、胴最大径15.2cmの大きさ。内面はナデ調整されるが、外面は風化して調整手法は不明。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、灰褐色に焼成されている。



第7图 弥生土器实测图 (1/4)



第8図 土師器・須恵器・陶磁器等実測図 (1/3)

4・14は胴部から頸部にかけて殆ど括れずに口縁部が外反する甕で、外反も緩やかである。  
 4は復原口径20.0cm、残存器高19.8cm、胴最大径18.0cmの大きさ。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整される。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。  
 5・6は胴下半部破片で、平底の底部から胴部へは緩やかに膨らむ。下半部は器壁が厚めで、底部付近に指頭痕の残るナデが目立ち、胴部は内外面ともにナデ調整される。14は内外面とも

に風化磨滅する。ともに細砂粒・角閃石・褐色粒を含む胎土で、橙褐色に焼成されている。

7・8は大形の甕で同一個体らしいが、接合しない。胴部が膨らみ、肩部に刻み目凸帯が巡るが、口縁部は残らない。内外面ともにハケ目調整される。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

9は高さの高い底部破片で、高台状に中央部が凹む。蓋のつまみの可能性も否定しえないが、外面はナデ調整される。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、種子らしい植物遺体の抜けた痕跡もみられる。下層から出土した。

12は胴部が膨らみ、外反する口縁部は端部でつまんだように上方に尖る。内外面ともに磨滅するが、胴部内面はへら削りらしい底跡がみられる。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

13は下層から出土した、直口縁の口縁部破片で、端部上面は僅かに凹む。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整される。胎土に最砂粒を含み、暗黄褐色に焼成され、口縁部外面にタール状の膠着物がみられる。

高杯 (10・11) 10は脚部を欠くが、鉢に近い杯部をもつ高杯で、口縁部が強く外反する。復原口径18.0cm、杯部高8.0cmの大きさ。器面は内外面ともに風化する。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。11は杯部との境目での直径が4.2cmの大きさの柱状部破片で、柱状部は長めで裾部に向かって緩やかに広がる。外面は風化するが、内面に紋じ痕とナデ調整痕がみられる。胎土に細砂粒・角閃石・雲母・褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

器台・支脚 (15-17) 15は器台の喇叭状に開く裾部破片であろう。下層出土。復原裾径14.8cmの大きさ。外面にハケ目、内面に板ナデ痕がみられる。胎土に砂粒・角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。16は1号建物柱穴から出土したが、支脚の裾部であろう。17は下層出土の裾部が跳ねるように開く支脚の裾部で内外面ともになで調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。

椀 (18) 復原口径11.0cmの大きさの内彎して開く椀で、器壁はやや厚い。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

鉢 (28) 体部が直線的に開き、口縁部が屈折して直立気味に立ち上がる口縁部破片である。内外面ともになで調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成される。下層から出土した。

鉢? (30) 直に立ち上がり気味に開く体部から、僅かに緩く外反する口縁部破片。外面がナデ、内面がへらミガキで調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成されている。

深鉢 (29) 下層から出土した、外反気味ながらも内傾する口縁部破片で、内外面ともにナデ調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、灰赤褐色に焼成されている。

須恵器杯蓋 (19・20) ともに遺構検出面で出土した、口縁部内面に身受けのかえりをもち、

外天井に小さな擬宝珠状のつまみが付く杯蓋。灰色に堅く焼成されている。19は外天井が回転ヘラ削りされ、口縁部へ緩やかに開く。口径9.0cm、器高2.7cmの大きさ。20は外天井が回転ナデ調整されて、口縁部が急傾斜に開く。口径9.0cm、器高3.0cmの大きさ。

須恵器無頸壺 (21) 底部を欠くが、復原口径5.8cm、残存器高4.5cm、胴最大径 9.0cmの大きさ。口縁部は直に立ち上がるが僅かに内傾し、胴部最大径の位置に平行沈線が巡る。内外面ともに回転ナデ調整される。砂粒は殆どみられず、灰色に堅く焼成されている。

土師器杯 (22) 底面は磨滅するが糸切り底らしい杯で、復原口径14.8cm、器高 1.8cm、底径10.2cmの大きさ。

土師器小皿 (23・24) ともに糸切り底らしい小皿片で、口縁部を欠く。復原底径が 7.0cmと 8.0cmの大きさと、胎土に褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

ミニチュア壺 (25) 口縁部を欠き、残存器高2.8cm、復原胴最大径3.0cmの大きさの壺であろう。球形の体部で、外反する口縁部が付いていたと思われる。内外面ともナデ調整される。胎土に砂粒・雲母・角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。

陶磁器 (31・32) 31は口径12.2cm、器高3.6cm、高台径4.5cmの大きさの、口縁部が緩やかに開く染付皿。文様の意匠は分からないが簡単な文様が内面の縁部に描かれる。高台部分を除いて透明な釉がかかるが、見込みの釉を蛇の目に掻き取っている。くらわんか手の類の皿であろう。32は底部破片で、高台径4.0cmの大きさ。高台以外に釉がかかるが、鉄釉の後に灰釉をかけた二度掛けらしい。また内底見込みに重ね焼きの痕跡がみられる。

弥生土器は、高杯などに後期前半前半らしい特徴をみるが、壺などは後期後半ないし末のものであり、12～17には古墳時代初期の可能性がある。

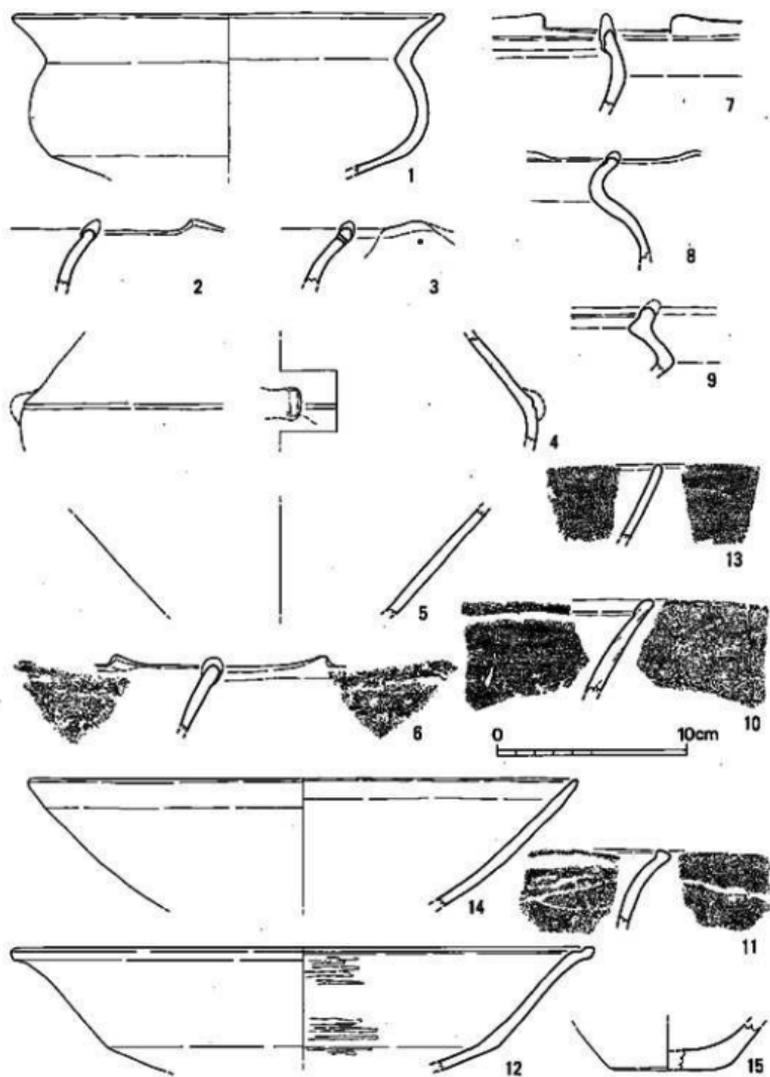
須恵器杯蓋など須恵器の特徴は7世紀後半～8世紀中頃に相当する。

土師器杯・小皿は12世紀後半以降であり、13世紀頃に中心がある。

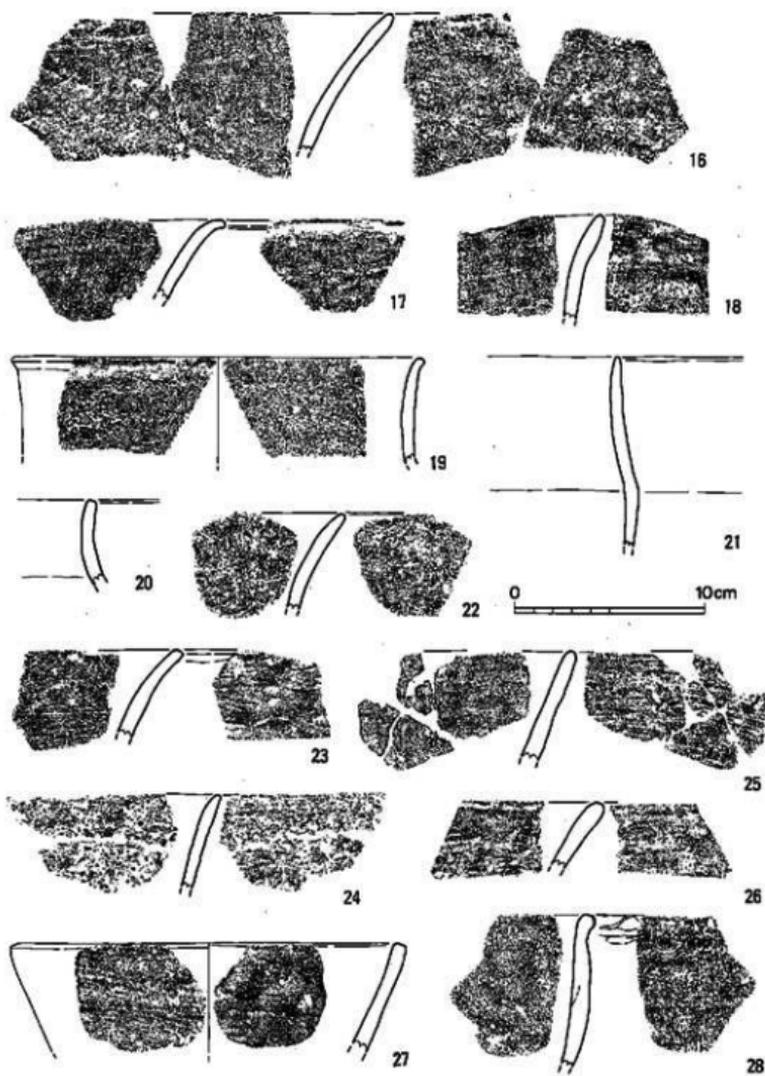
くらわんか手の染付皿は18世紀後半頃であろう。

縄文土器 (図版8、第9～11図)

精製浅鉢 (1～14) 7～11・13は下層から出土した。1～5は同一の柱穴状ビット (p8) から出土した。1は復原口径23.0cm、残存器高8.6cm、胴最大径21.2cmの大きさの、胴部が扁球形で緩やかに外反する口縁部が付き、口縁端部内面に沈線状の段が巡る。器面は風化が顕著に進む。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、茶褐色を呈している。胴下半部が凹み気味に復原できるが、接合面で剥落したままで風化して剥落面と判別できず、凹んだ面にみえるのかも知れない。2・3・8・11の口縁部破片は、1と同様な口縁端部を有する。2は口縁部上面に鰭状の突起が付く例、3・8は波状口縁の名残のような波頂部の例で、3の波頂下に小さな円孔が穿たれる。8の器形は1よりも口頸部が緩やかに屈曲し、浅鉢よりも壺に近いイメージを与える。



第9图 縄文土器実測图1 (1/3)



第10圖 縄文土器実測圖2 (1/3)

4・5は同一個体の可能性があるもので、4では胴部界線の浅い沈線が1条廻り、縞ネクタ  
イ状らしい貼付突起が付く。5と巧く接合しないが、図のように復原した場合には浅鉢とい  
うよりは、むしろ壺に近い器形の鉢とすべきであろうか。精良な胎土で、暗茶褐色ないし黒褐色  
に焼成されている。

7は内彎して立ち上がり、端部内面に沈線状の段を有する楕に近い器形。口縁部上面に鐮状  
もしくはリボン状の突起が付く。胎土に細砂粒・角閃石・褐色粒を含み、茶褐色に焼成されて  
いる。9は算盤玉のように胴部の膨らみに稜をもち、口縁部が短く外反して、端部内面に沈線  
状の浅い段を有する。胎土に細砂粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

10は長めに外反する口縁部破片で、端部内面に沈線状の段が廻るものの、段の位置が少し低  
めで、内面に幅広の帯を有する。胎土に細砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。

12は長めに外反して開く口縁部で、短く外反する端部内面に沈線状の段をもつが、膨らむ胴  
部ではなく、屈曲してそのまま底部に窄まる器形であり、高杯の杯部に似る。復原口径31.0cm、  
残存器高6.5cmの大きさ。内面には横方向のヘラミガキ痕が残る。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒  
を含み、暗黄褐色に焼成されている。

14は底部からそのまま口縁部に直線的に開く、楕形に近い浅鉢である。端部はそのまま丸み  
をもって薄くなる。復原口径29.2cm、残存器高6.8cmの大きさ。外面はナデ調整、内面はヘラミ  
ガキ調整らしい。胎土に砂粒・雲母を含み、暗黄褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。6は  
端部が薄くならず、内面に段などを有さずに、口縁部上面に鐮状の突起が付く。13は器壁が薄  
く、内彎気味に開く口縁部破片で、内外面ともにヘラミガキ調整されるようである。6・13と  
もに胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成されている。

精製鉢・深鉢(15~22・36~38) 15~17・19・21は下層から出土した。

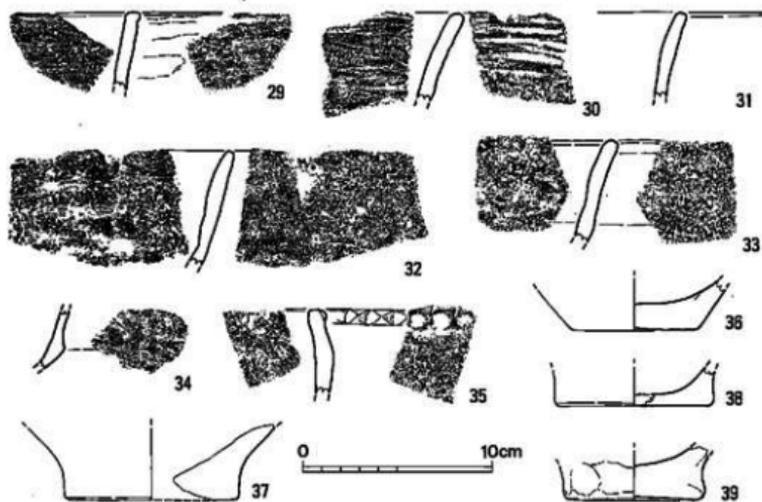
16・18・22は緩やかに外反する口縁部破片で、端部は丸みをもつ。内外面ともにナデ調整さ  
れるが、内面側がやや丁寧に調整されている。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒などを含み、淡茶  
褐色などに焼成されている。

17は緩やかに外反し、端部で強く反る口縁部破片である。外面はナデ調整、内面はヘラミガ  
キで調整される。胎土に砂粒・角閃石を含み、淡褐色に焼成されている。

19は直立気味に立ち上がり、端部で短く外反する口縁部破片で、復原口径22.0cmの大きさ。  
胎土に砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成されている。21は胴部で屈曲して、口縁部が内傾気味  
ながらも直に立ち上がる深鉢であろう。胎土に砂粒・角閃石を含み、橙褐色に焼成されている。

20は直立気味に立ち上がる口縁部破片で、内外面ともにヘラミガキ調整される。胎土に砂粒・  
雲母を含み、茶褐色に焼成されている。

15・36は内外面ともにナデ調整される底部破片で、底面から胴部へそのまま開く。37・38は  
底面から少し上から胴部へ開く底部破片で、器面は風化する。



第11図 縄文土器実測図3 (1/3)

粗製深鉢 (23~35・39) 23・26・28~30・32・34・35は下層から出土した。

23は外反する口縁部破片で、外面はカキナデ調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、淡茶褐色に焼成されている。

24~27・29~33は僅かに外反するものもあるが、直線的に開いて立ち上がる口縁部破片で、外面をナデ調整されるもの他に板状原体によるナデやカキナデ、条痕で調整されるなどやや雑な調整なのに比して内面側の調整がやや丁寧で、25では内面をヘラミガキされる。27は復原口径21.0cmの大きさで、胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、暗茶褐色に焼成されている。

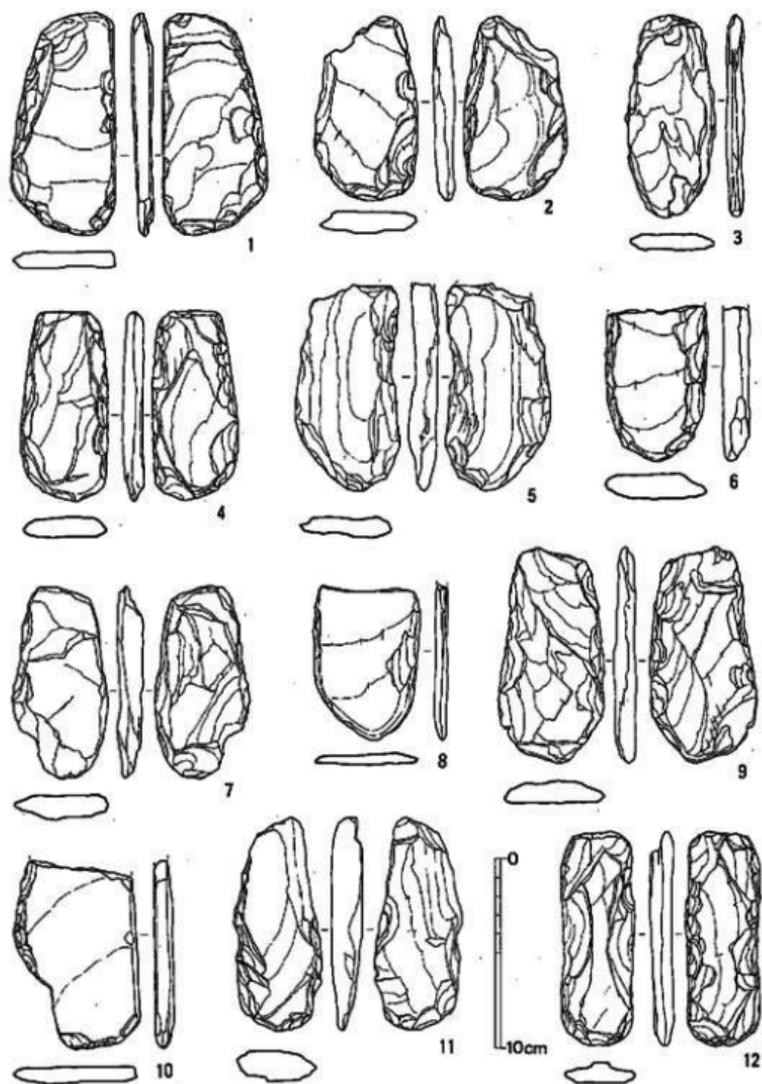
28は口縁端部外面が低い突帯状に肥厚して、指頭先による刻み目が付く。胎土に砂粒を含み暗茶褐色に焼成されている。また35は内傾する口縁部破片で、端部外面に指頭先による刻み目が付される。胎土に砂粒・雲母・褐色粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

39は内外面をナデ調整する底部破片で、胎土に砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成されている。

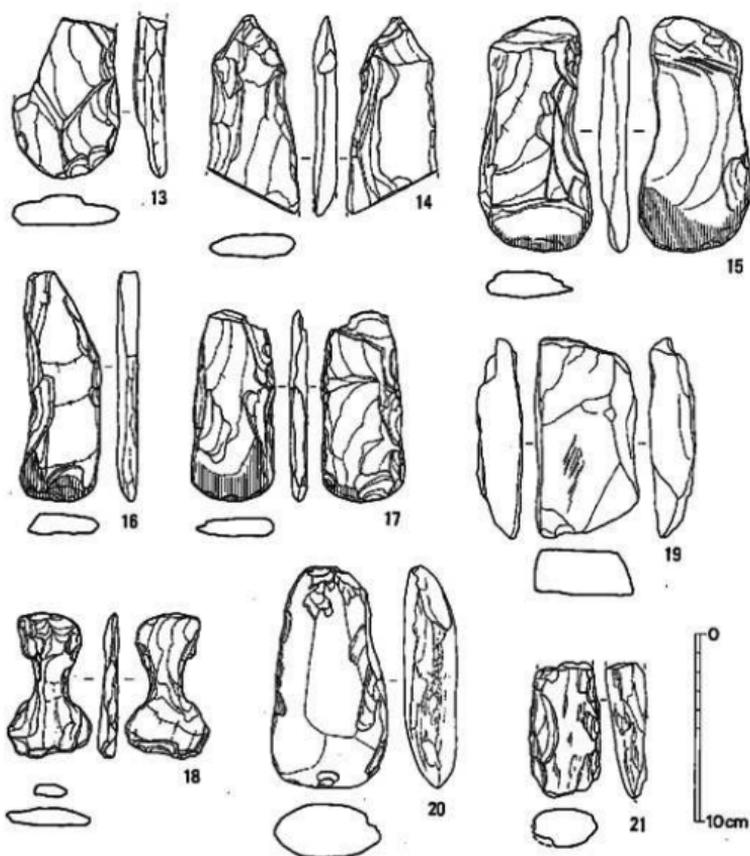
これらの縄文土器では、精製浅鉢の特徴や粗製深鉢の特徴からみて、晩期中頃以降の特徴を有していて、35の刻み目突帯をもつ深鉢などは晩期末にみられるものである。

石器 (図版9・10、第12~15図)

打製石斧 (1~18) 緑泥片岩・緑色片岩・安山岩製の扁平な打製石斧で、幅が5.0cm前後の撥形に近い短冊形を呈する例が多いものの、12・16・17のような幅4.0cm前後の短冊形打製石斧



第12圖 石器実測圖 1 (1/3)



第13図 石器実測図2 (1/3)

の一群がみられる。15-17は頻度の使用による磨耗で刃部が磨製石斧のように擦れている。また18は分銅形にも似るが、両側縁に挟りがあり、挟り部分が他の部分よりも磨耗する。

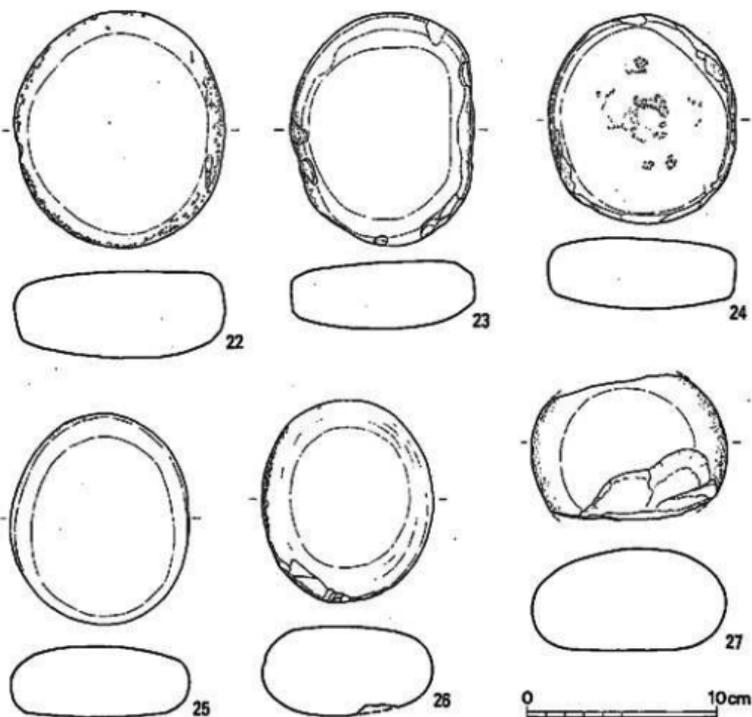
石斧素材 (19) 殆ど調整剝離を施さずに、薄くなった部分をそのまま刃部に使用しているが、本来は石斧素材として入手したものと思われる。

磨製石斧 (20・21) 20は体部断面形が楕円形で、刃部が両刃の磨製石斧で、側縁に製作時の敲打調整痕が残る。21は基部と先端の一部を欠損する、体部の断面が楕円形の磨製石斧である。

第1表 志波岡本遺跡出土石器計測表

単位: cm

No.	種類	材質	遺存状態	出土	層位	長さ	幅	厚さ	重量	登録No.
1	打製石斧	緑泥片岩	ほぼ完形	H11	茶褐色	12	5.5	1.1	100	24
2	打製石斧	緑泥片岩	一部欠損	G12	茶褐色	9.7	5.4	1.1	83.4	20
3	打製石斧	緑泥片岩	ほぼ完形	P50		11	5.8	1	57.3	25
4	打製石斧	緑泥片岩	半分欠損	G12	茶褐色	10	4.6	1.1	82	3
5	打製石斧	緑泥片岩	一部欠損	A10	茶褐色	11	5.5	1.5	118.5	10
6	打製石斧	緑泥片岩	刃部片	A10	茶褐色	8.1	5.3	1.4	109.6	11
7	打製石斧	緑泥片岩	ほぼ完形	G13	茶褐色	10	5.1	1.4	97.7	1
8	打製石斧	緑泥片岩	刃部片	H12	茶褐色	8.2	5.6	0.6	49.5	16
9	打製石斧	緑泥片岩	一部欠損	表採		11	5.6	1.2	107.3	31
10	打製石斧	緑泥片岩	刃部片	A9	茶褐色	10	6.5	1	120.5	15
11	打製石斧	緑泥片岩	一部欠損	B11	茶褐色	11	4.5	1.7	107.1	18
12	打製石斧	緑泥片岩	ほぼ完形	A10	茶褐色	11	3.9	1.2	83.4	9
13	打製石斧	緑泥片岩	刃部片	B11	茶褐色	8.5	5.6	1.6	100.2	27
14	打製石斧	緑泥片岩	半分欠損	G12	茶褐色	11	4.8	1.2	66	2
15	打製石斧	安山石	一部欠損	G9	茶褐色	12	6	1.4	132	23
16	打製石斧	緑泥片岩	完形	G13	茶褐色	12	4	1.1	89	26
17	打製石斧	緑泥片岩	一部欠損	H11	茶褐色	10	4.4	1	72.8	22
18	打製石斧	緑泥片岩	完形	H13	茶褐色	7.8	4.4	1	32.2	
19	石斧茎材	緑泥片岩	完形?	表採		11	5.4	2.4	214.7	36
20	磨製石斧	緑泥片岩	一部欠損	F12	茶褐色	12	6.2	2.8	319.2	33
21	磨製石斧	緑泥片岩	胴部片	P3		7.3	3.7	2.1	78.2	32
22	すり石	安山石	完形	P15		13	11	4.6	955.8	41
23	すり石	安山石	完形	G13	茶褐色	12	9.7	3.5	675.3	38
24	すり石	安山石	完形	K41	漆	11	10	3.7	611.1	37
25	すり石	安山石	完形	P15		11	9.5	3.7	643	42
26	すり石	砂岩質	完形	G13	茶褐色	11	9.2	4.8	694.3	39
27	すり石	安山石	破片	F13		10	7.6	5.4	634.4	44
28	打製石鏃	黒曜石	片脚欠損	F13	茶褐色	1.9	1.3	0.3	0.5	53
29	打製石鏃	黒曜石	先端欠損	G13		1.7	1.9	0.4	1.1	55
30	打製石鏃	黒曜石	完形	A10	茶褐色	1.7	1.5	0.2	0.4	56
31	打製石鏃	黒曜石	完形	H13	茶褐色	1.4	1.5	0.3	0.4	52
32	打製石鏃	黒曜石	完形	D13		2	1.2	0.4	0.9	57
33	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	H11	茶褐色	2.4	1.5	0.3	1.4	47
34	打製石鏃	サヌカイト	完形	A11	茶褐色	2.9	1.8	0.4	2.2	49
35	打製石鏃	サヌカイト	完形	H12	茶褐色	2.8	1.4	0.3	1.3	48
36	打製石鏃	サヌカイト	一部欠損	B11	茶褐色	3.9	1.8	0.6	3.8	69
37	刮器	黒曜石	一部欠損	B11	茶褐色	3.5	1.6	0.6	2.6	68
38	掻器	黒曜石	一部欠損	表採		3.3	1.8	0.6	3.7	70
39	刮器	黒曜石	完形	B11	茶褐色	4.7	1.9	0.8	5.4	66
40	使用刮片	黒曜石	完形	G13	茶褐色	3.6	3.6	0.5	7.4	63
41	石錐	黒曜石	完形	H11	茶褐色	3.4	2	0.4	2.2	76
42	使用刮片	黒曜石	一部欠損	H12	茶褐色	2.1	2.5	0.4	1.6	74
43	掻器	黒曜石	完形	A10	茶褐色	3.1	3	1	5.1	62
44	尖頭器	サヌカイト	完形	2号溝		11	5.2	1.5	88.1	45
45	尖頭器	サヌカイト	完形	K41		7.9	4.5	2	52.2	46
	管状土錐		一部欠損	F13	茶褐色	3.7	1.2	1.2		
	土製勾玉		一部欠損	G8	茶褐色	2.9	1.2	1.6		
	土製丸玉		完形	G8	茶褐色	1.8	1.6	1.6		
	硬玉製小玉		完形	B10	茶褐色	1.1	1.1	0.6		

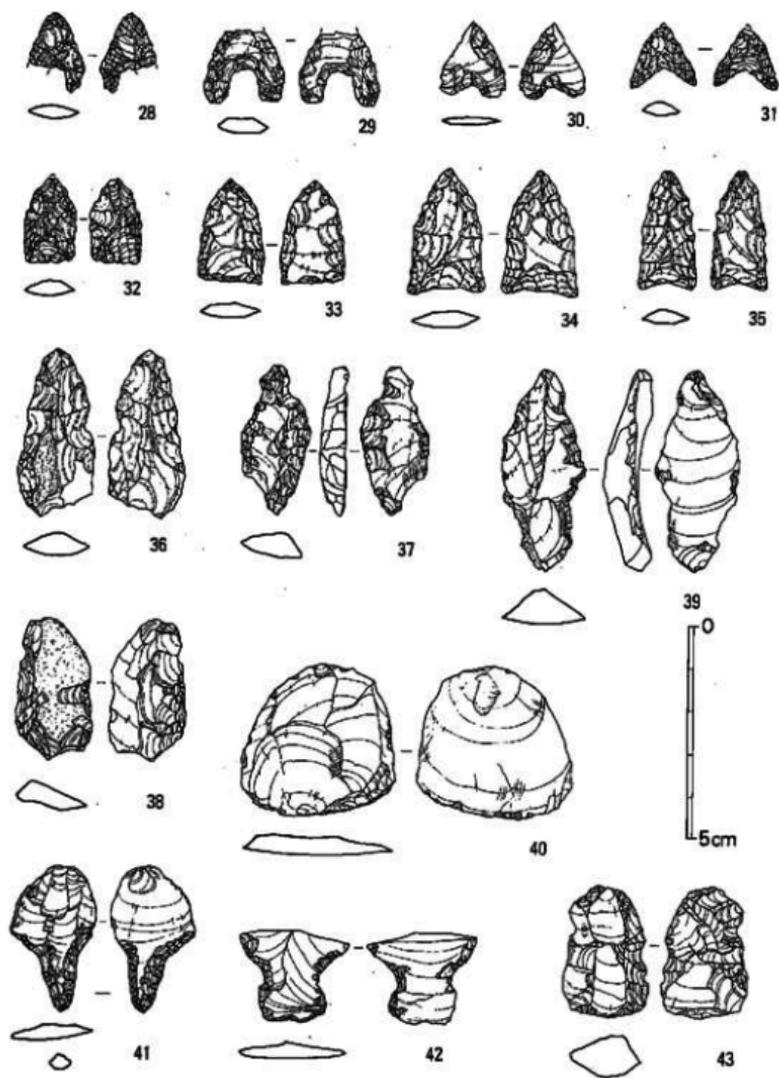


第14図 石器実測図3 (1/3)

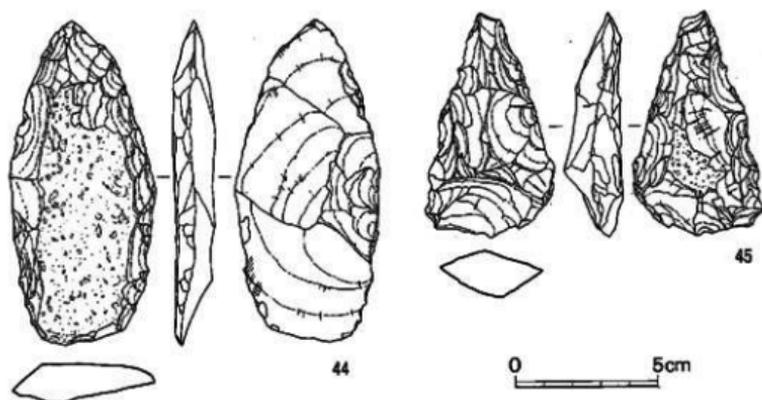
すり石 (22~27) 掌におさまり易い大きさの扁平な円礫を利用して、平坦な面をすり面に用いるもので、使用頻度の高い例は平坦な面が平滑になり、断面形が直線的になる。周縁に敲打痕を有するものもあり、敲石を兼ねたすり石であろう。

打製石鏃 (28~36) 伊万里湾産の透明度のある黒色黒曜石を用いたものと、サヌカイトを用いたものがある。基部が抉れる凹基のタイプは前者を用いる例が多く、基部が平基に近い例は後者の例が多い。黒曜石製では主要剥離面を一部あるいは大半に残す例があり、剥片の一部を調整剥離する、29・30のようないわゆる剥片鏃もみられる。サヌカイトを用いた例でも片面に主要剥離面を残す例がみられる。また36では長さが4.0cm近く、石鏃よりも尖頭器的である。

削器・搔器類 (37~40・42・43) 37・39は尖頭器的な形状の削器で、伊万里湾産の黒曜石の縦長剥片を用いている。38~40には自然面を一部に残して、使用痕を残す剥片の40では



第15图 石器实测图4 (3/4)



第16図 石器実測図5 (1/2)

打点・先端に自然面を残していて素材の原石の大きさが残られるが、長大な縦長刺片を用いた例でない。42は折断の位置がずれたと思われる、いわゆるつまみ形石器で、使用痕のある刺片であるが、僅かな調整を加えれば容易に打製石鏃に加工できるとと思われる。

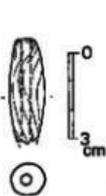
石鏃 (41) 伊万里湾産の黒曜石縦長刺片の先端側を調整剥離した石鏃である。

以上の石器類は、縄文時代後期後半以降に出現する種類の石器であり、晩期中頃～末まで用いられたものであろう。

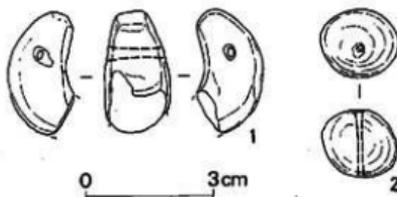
尖頭器 (44・45) 1号溝状遺構出土資料であり、溝状遺構の項で触れた。

土製品 (図版10、第17図)

管状土鏢 端部を僅かに欠損し、残存長3.7cm、外径1.2cm、孔径0.3cm、重量4.6gを測る。僅かに砂粒を含む胎土で、巻き付けするようにして、エンタシス状の中膨らみの筒に整形されて、淡茶褐色に焼成されている。

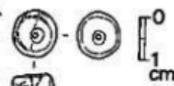


第17図 土製品実測図1 (1/2)



第18図 土製品実測図2 (3/4)

土製勾玉（第18図1）尾部先端を欠損するが、残存長2.9cm、幅1.2cm、厚さ1.6cmの大きさで、頭部に両側から穿孔された孔径0.2cmの孔が貫通する。砂粒の目立つ胎土で、ナデ調整で仕上げられ、茶褐色に焼成されている。下層から出土した。



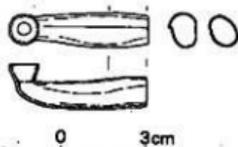
第19図 石製玉類  
実測図 (3/4)

土製丸玉（第18図2）直径1.6~1.8cmの歪んだ球形の玉で、孔径0.1cmの細い孔が貫通する。砂粒を含む胎土で、ナデ調整されて、暗茶褐色に焼成されている。下層から出土した。

土製品は弥生時代以降の所産であろう。

石製品（図版10、第19図）

硬玉製小玉 下層から出土した。直径1.05cm、厚さ0.60cmの臼形に研磨整形された玉。両面から穿孔された孔が貫通する。色調はライトブルーを呈する。縄文時代晩期の所産であろう。



第20図 金属製品実測図 (1/2)

金属製品（図版10、第20図）

煙管 銅製の扉首で、円筒に巻いて接合される。一部歪みを生じていて、長さ4.9cm、口径1.0cm、頸部の外径0.7cm、羅字側の外径1.0cmで、中央部の外径は1.1cmを僅かに越すであろう。近世の所産であろう。

### 3. 小 結

志波岡本遺跡では、規模の大きな独立柱建物跡群が発見された。しかし、建物跡に付随するような施設は明瞭でなく、建物跡の時期を明確にする材料にも欠ける。さらに建物跡以外の遺構はさほど顕著はなく、全体としては比較的疎らな遺跡という印象が残る。

志波岡本遺跡の大形建物については、既にその性格について触れられている（註1）。すなわち、志波地区に所在する遺跡で、上巻で報告する志波桑ノ本遺跡遺跡、杷木宮原遺跡（註2）などで同様の建物跡が発見されていて、斉明天皇の朝倉橋廣庭宮に関連する施設とみる意見であり、横断道関係の遺跡発掘調査を通じてみても、このような大形規模の建物が発見されたのは志波地区のみである。古くから朝倉橋廣庭宮推定地の候補である朝倉町宮野地区では横断道関係の調査は実施されていないが、宮野に最も近い長島遺跡（註3）でも廣庭宮を想起させる資料はみられない。宮野地区では道路拡幅工事などの開発に伴う発掘調査を実施しているが、それでも然りであり、いまのところ志波地区の建物が突出しているとも言えよう。また、長期間連続と古代の遺構遺物が発見されずに、むしろ忽然と消えるような印象は、斉明天皇崩御の記録と関連付け易い。

しかし、建物跡周辺に付随するような施設がみられず、柱穴出土遺物に時期を決定付ける資料がないために確証は得られない状況である。また、1号建物と2号建物は企画性をもって配置された同時期の建物であると思うが、3号建物はこれと同時期ではなく、建て替えが行われている。仮に廣庭宮関連の施設であれば、斉明天皇崩御以後に再興させた可能性は低く、それ以前の建て替えとみなければならぬ。短い期間の間に建て替えざるを得ない状況が起こっていたことになろう。

その他の遺構や遺物包含層などから出土した遺物では、旧石器時代末ないし縄文時代草創期頃から近世までの遺物がみられ、縄文晩期に属するとみられる遺物はある程度まとまっている。

東端尾根の1号溝状遺構から出土した尖頭器は、この遺跡で最も時期的に遡る資料である。片面に自然面を残して、周囲と打層部のみ加工を施したサヌカイト製の尖頭器は風化がかなり進んでいる。横割ぎの剥片を用いることにより厚みが薄いのも特徴の一つであろう。同じような特徴をもつ石器は佐賀県多久三年山遺跡(注4)でも出土している。

縄文時代晩期の遺物は、調査区南西部の包含層にやや集中するものの、明確な遺構は皆無に近い。包含層の茶褐色土下層に縄文土器片の占める割合が多く、相対的に下層が縄文晩期、茶褐色土層が弥生時代から古墳時代の包含層であるような傾向がみられるものの、下層にも後出する遺物が含まれるなど、確実ではない。緩傾斜地形の部分のあちこちで、黒曜石・サヌカイトの剥片や緑泥片岩の小破片、縄文土器小破片などが散在することなどを考え併せれば、激しい降雨などによる流出・堆積を繰り返しているものと想定せざるをえない。出土遺物を見ると、風化磨滅が進んでいるが、一部の晩期末頃の土器片を除けば、時期的には晩期中頃を前後する時期ないし後半のものに限られている。なお、遺存状態が良くないのが残念ではあるが、精製磨研土器で壺に近い器形の例や、高杯に近い例の存在することが注目されよう。

石器類では、扁平打製石斧がやや目立つ。石材が片岩であることと、使用頻度に起因するの、長さの短い例もある。また体部の幅では5.0cm前後と、4.0cm前後に分かれることも興味深い。すり石は、後期中頃以降に多くみられる、断面形が長方形に近いタイプのものがある。ともに使用されたはずの石皿や作業台は発見されなかったのは不思議であるが、製粉などの食物調理過程で使用される道具であり、生活の場が近くにあったことを物語る資料でもあり、晩期中頃のある期間に、生活拠点とされていた可能性は高いと言えよう。(小池史哲)

- 注1 小田 和利 1993 朝倉橋広庭宮の再検討—杷木町志波地区の大規模建物跡群とその歴史的位置づけ—九州歴史資料館研究論集18  
2 福岡県教育委員会 1991 杷木宮原遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告21  
3 福岡県教育委員会 1995 長島遺跡I 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告34  
4 杉原莊介・戸沢充則・安藤政雄 1983 佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡 明治大学文学部研究報告 考古学 第9号

# 圖 版



1



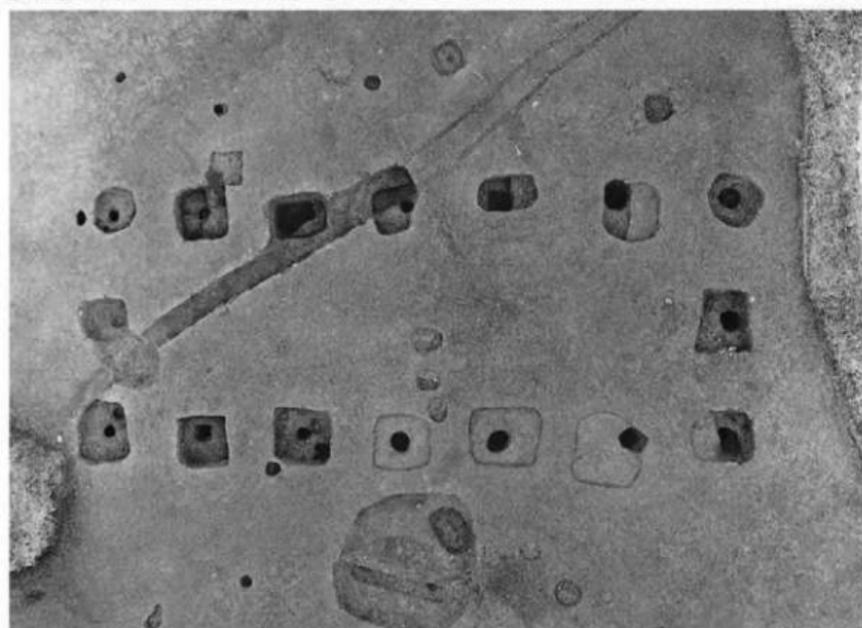
2

1 志波岡本遺跡遠景

2 志波岡本遺跡全景空中写真



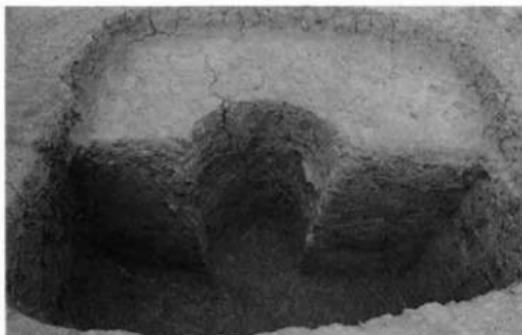
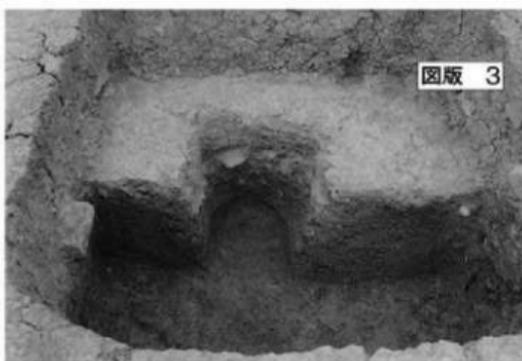
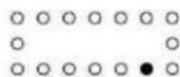
1



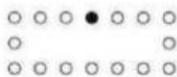
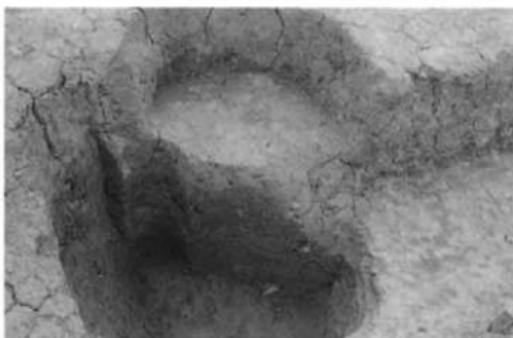
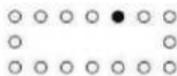
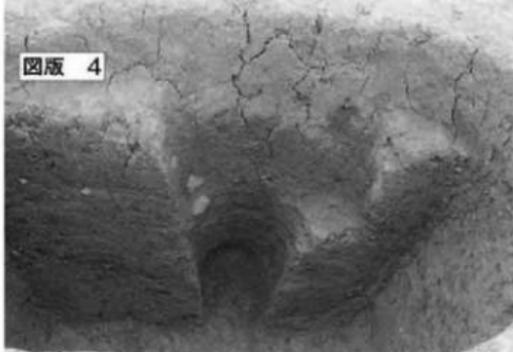
2

1 掘立柱建物跡群

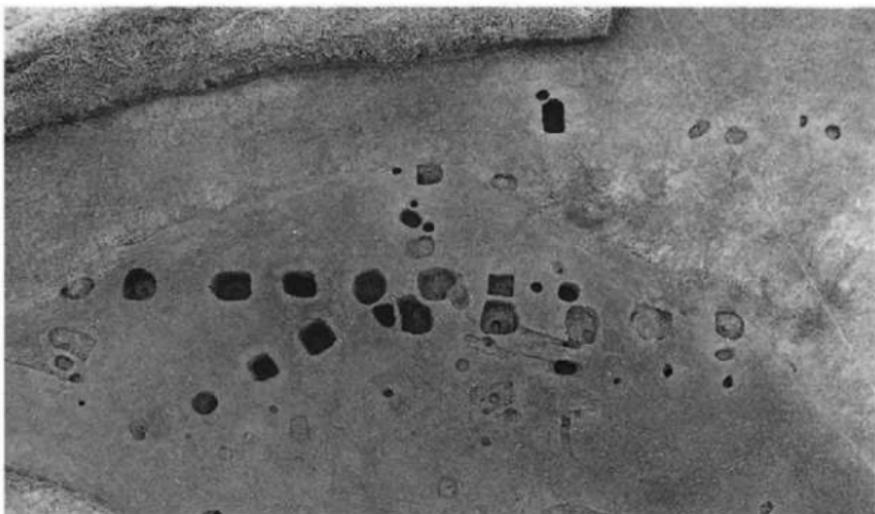
2 1号掘立柱建物跡



1号独立柱建物跡柱穴内堆積状況1



1 1号掘立柱建物圆柱穴内堆积状况 2

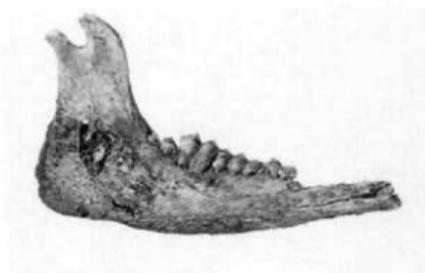


2 2・3号掘立柱建物跡



1

1 土 坑



2

2 土坑出土动物遗体



3

3 调查风景

图版 6

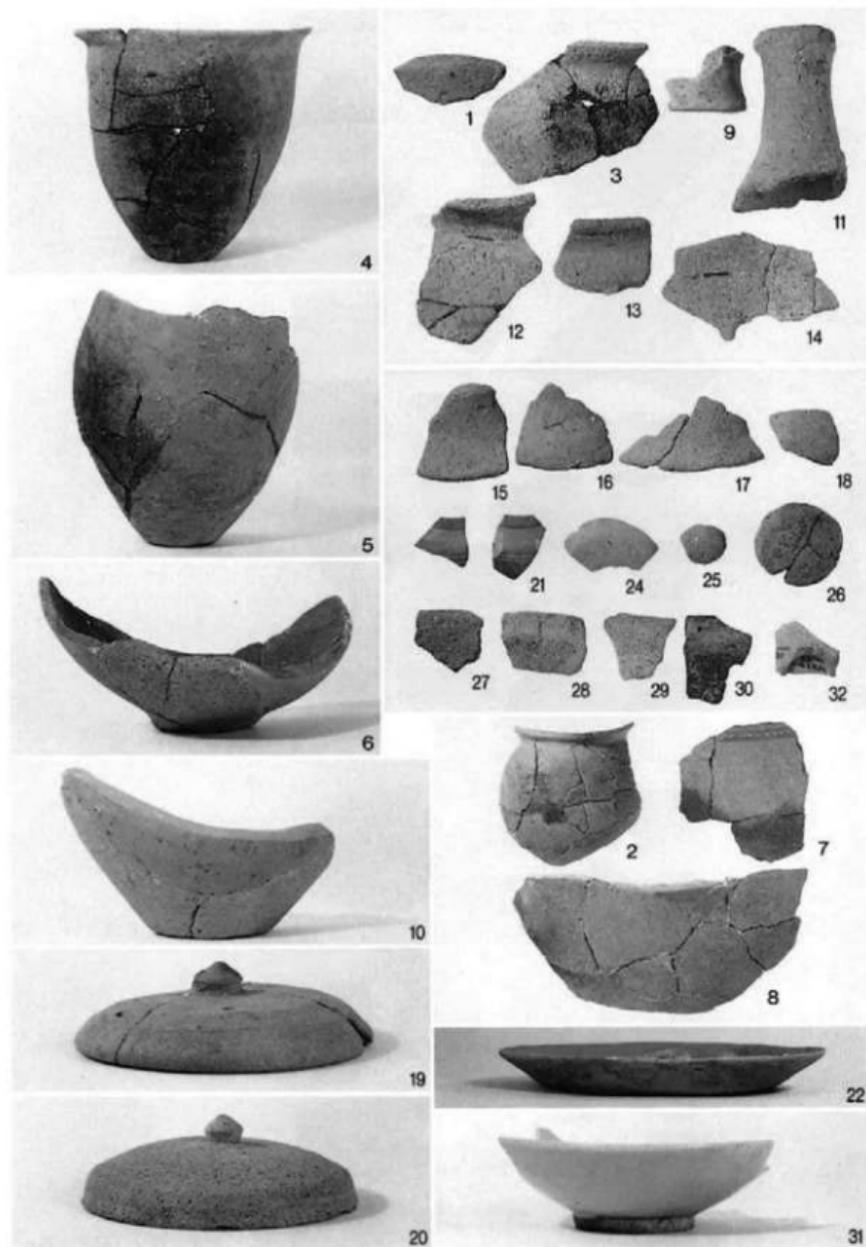


2

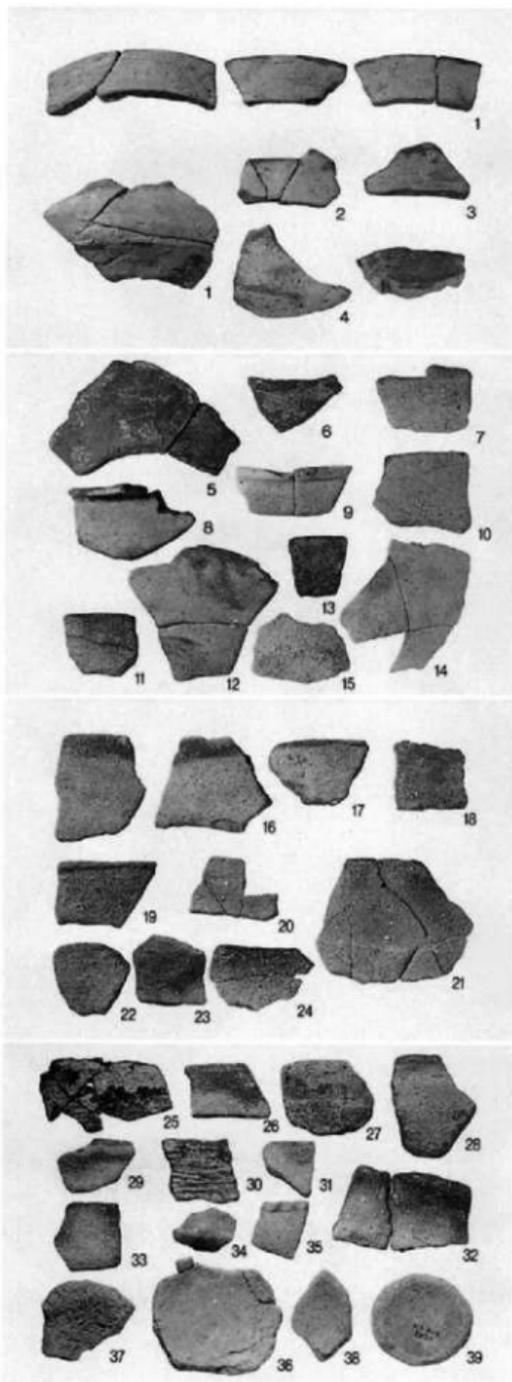


3

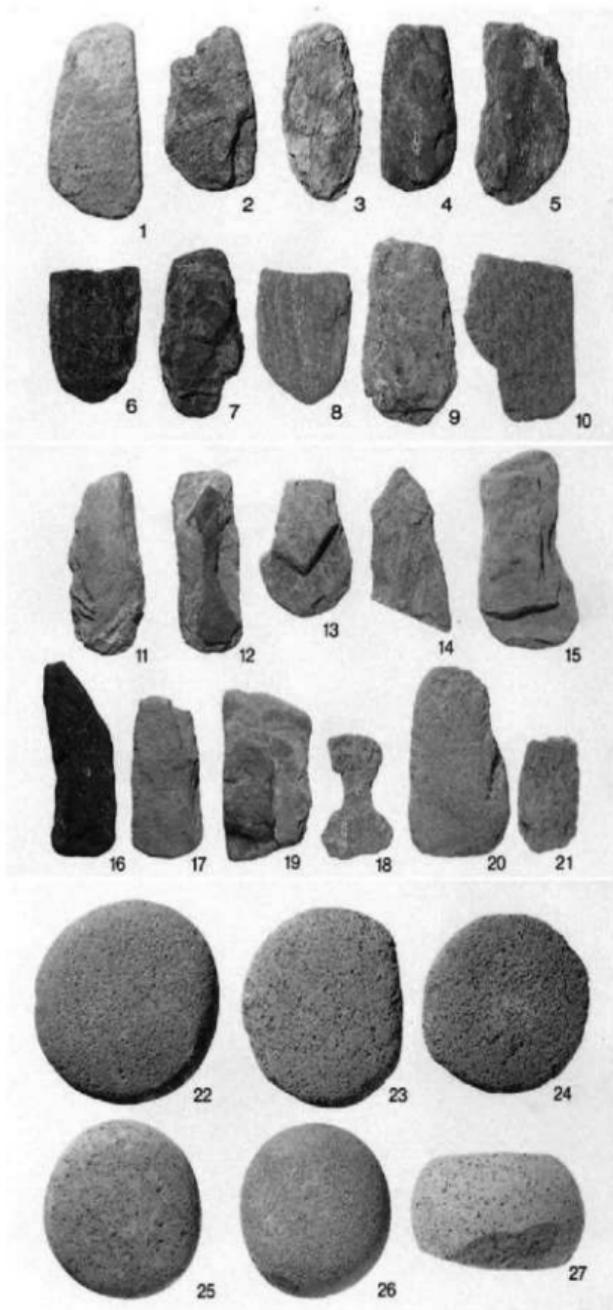
- 1 調查区南西部
- 2 調查区西端部
- 3 包含層遺物出土狀況 (J15区)



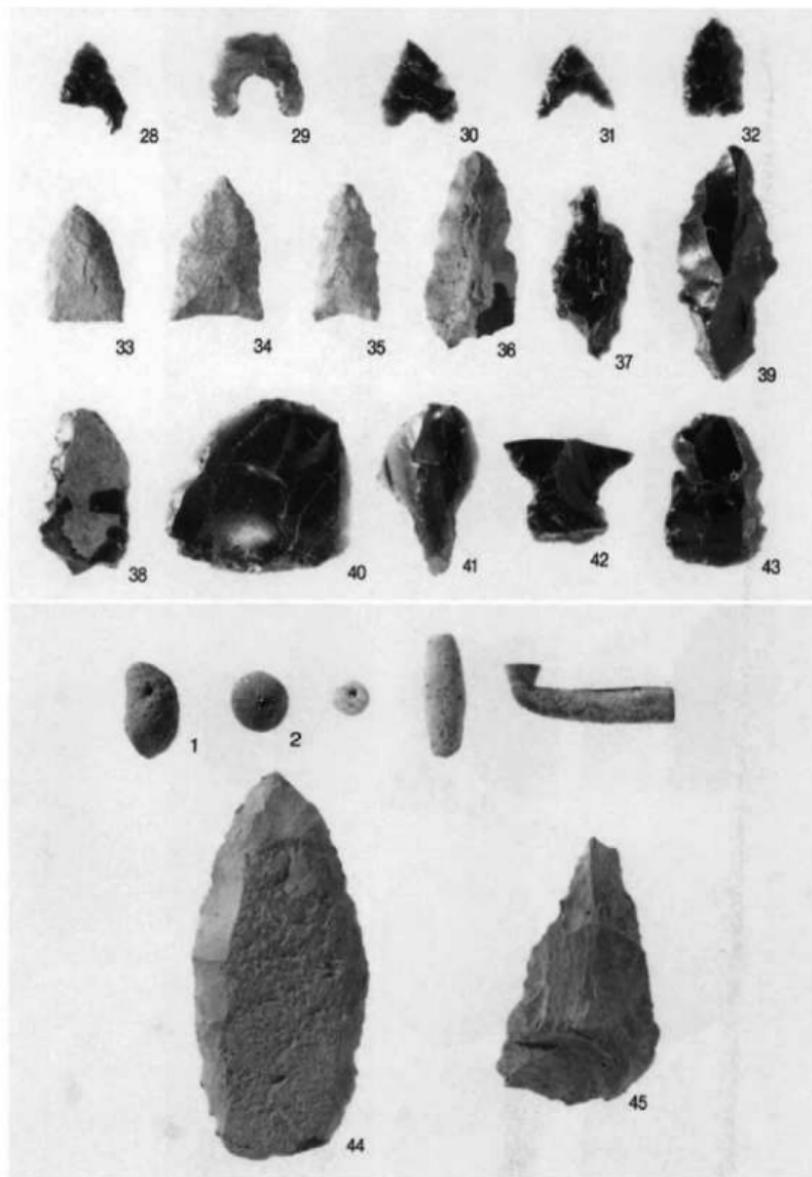
出土土器 1 (弥生時代以降の土器)



出土土器 2 (縄文土器)



出土石器 1



## V 江栗遺跡の調査

## V 江栗遺跡の調査

### 1. はじめに

江栗遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字志波に位置し、うちⅠ区が913・942-2・967・970・972番地で、Ⅱ区が918-1・919-4・920-1番地にあたる。この横断面調査地点番号では、第42地点となる。

朝倉山塊から派生して南に伸びる高山の尾根の西側にあたり、横断道がトンネルで抜ける西口部分である。つまり、谷の一番奥のどんづまり部分が当遺跡である。「福岡県遺跡等分布地図」(福岡県教育委員会 1978)では、No.580112として、一字一石経塚か?とされて登録されている。当初STA249+20~251+80までを対象としていたが、試掘調査の結果、最も谷奥の北半部の南斜面と、南半部北側斜面の一部とを本調査対象とすることとなり、都合3,650㎡を発掘した。

昭和61年5月22日~8月12日の間で現地発掘調査を行い、酷暑の中、多大な成果を得て無事終了することができた。

### 2. 江栗Ⅰ区の調査

Ⅰ区は、谷筋の北側で、南面する急斜面部分であり、3,142㎡を調査した。平安時代の遺構・遺物が大半を占め、鎌倉関連と思われる工房跡2軒、土壇1基、屋敷面と思われる下段建物面、その整地層下の段落部分等が検出された。(第23図) 現在までに、柿畑や段々畑により開削されていたため、各遺構・包含層間に時期差が見られるにも関わらず、各々に対応する明確な遺構が残らず、各小時期での遺跡の性格をおさえることができなかった。

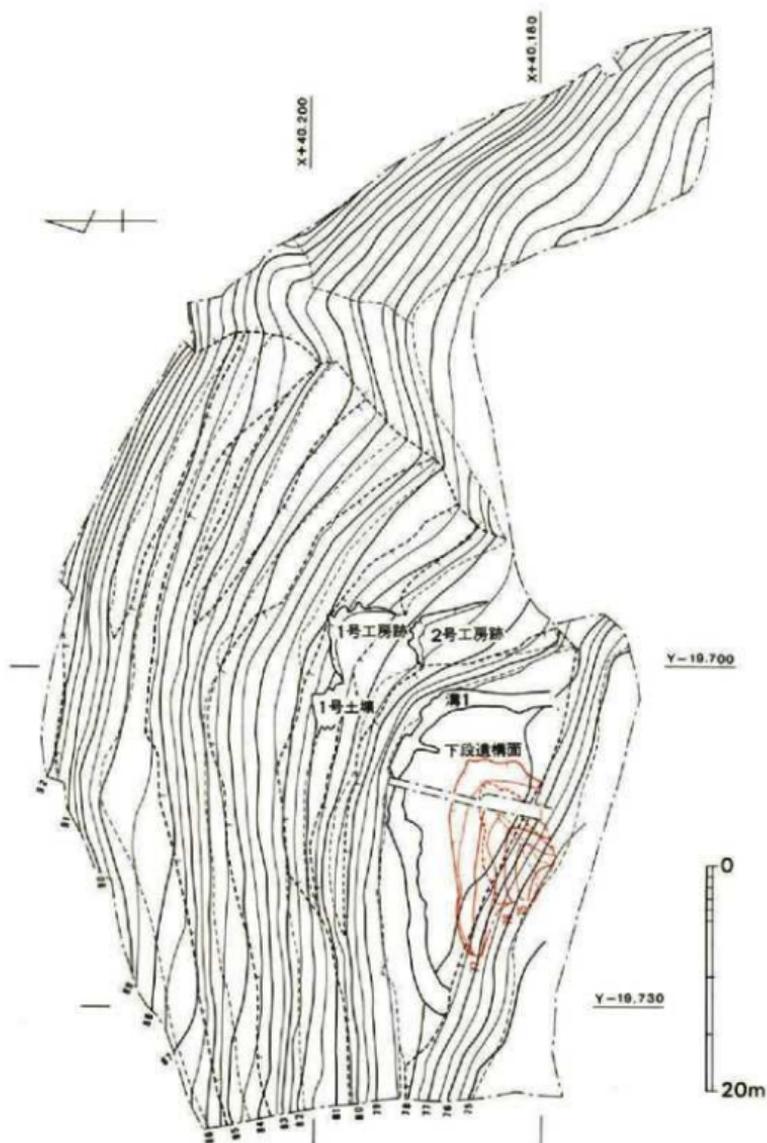
標高75~93mの斜面であるが、窯跡や古代~中世の小規模遺構(火葬墓等)の存在を考慮して精査したが、標高85m以上の急斜面と、東半分側からは遺構・遺物を検出することはできなかった。西南側の広いテラス状となった下段建物面とその上段までに遺構は集中する。

#### 1) 工房跡

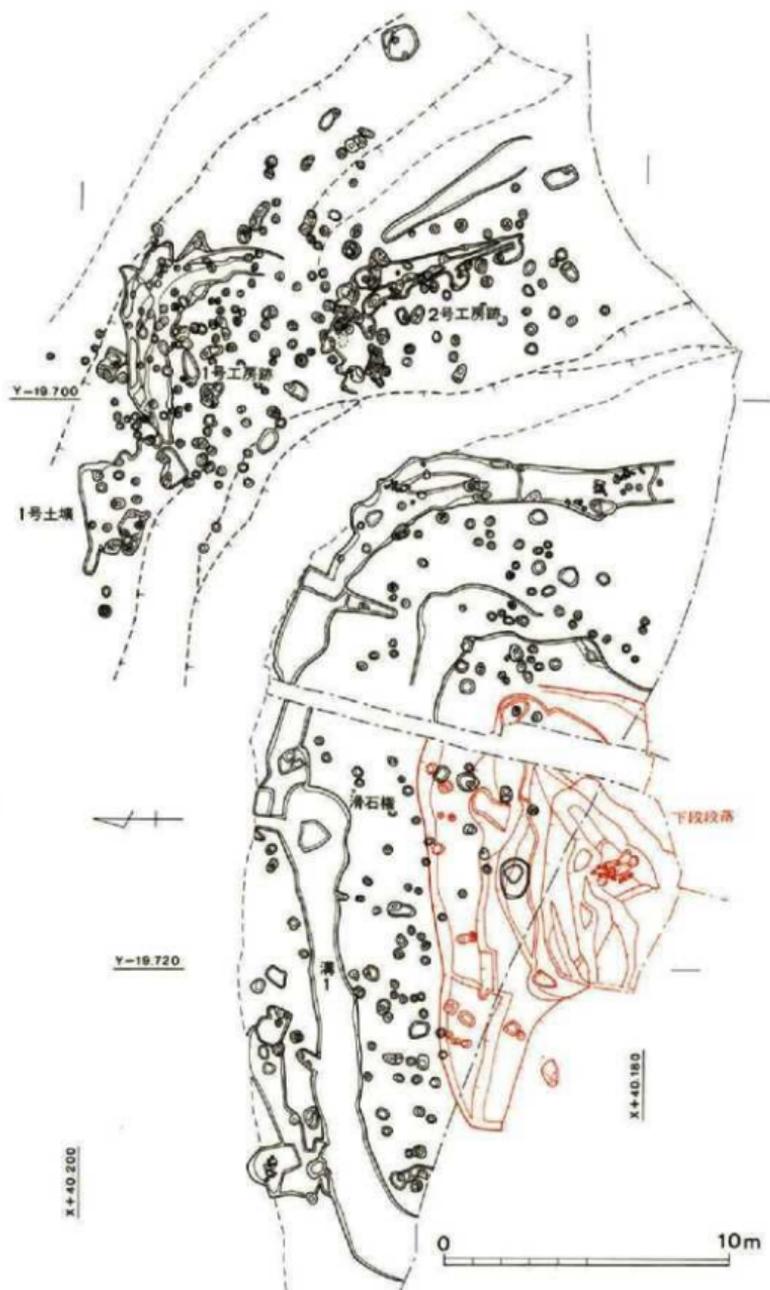
第1号工房跡(図版2・3、第25・26図)



第21圖 江蘇運河兩邊地形圖 (1/2,000)



第22图 江来1区免振区全体图(遺構面)(1/500)

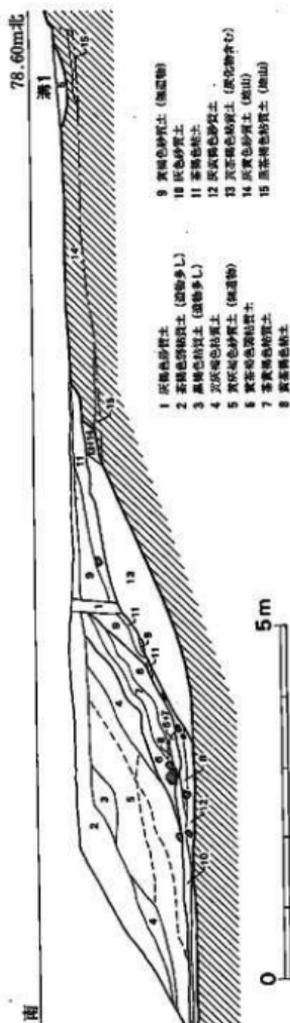


第23图 江莱I区遗址全体图 (1/200)

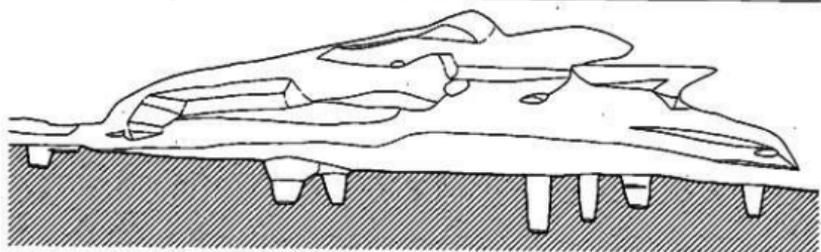
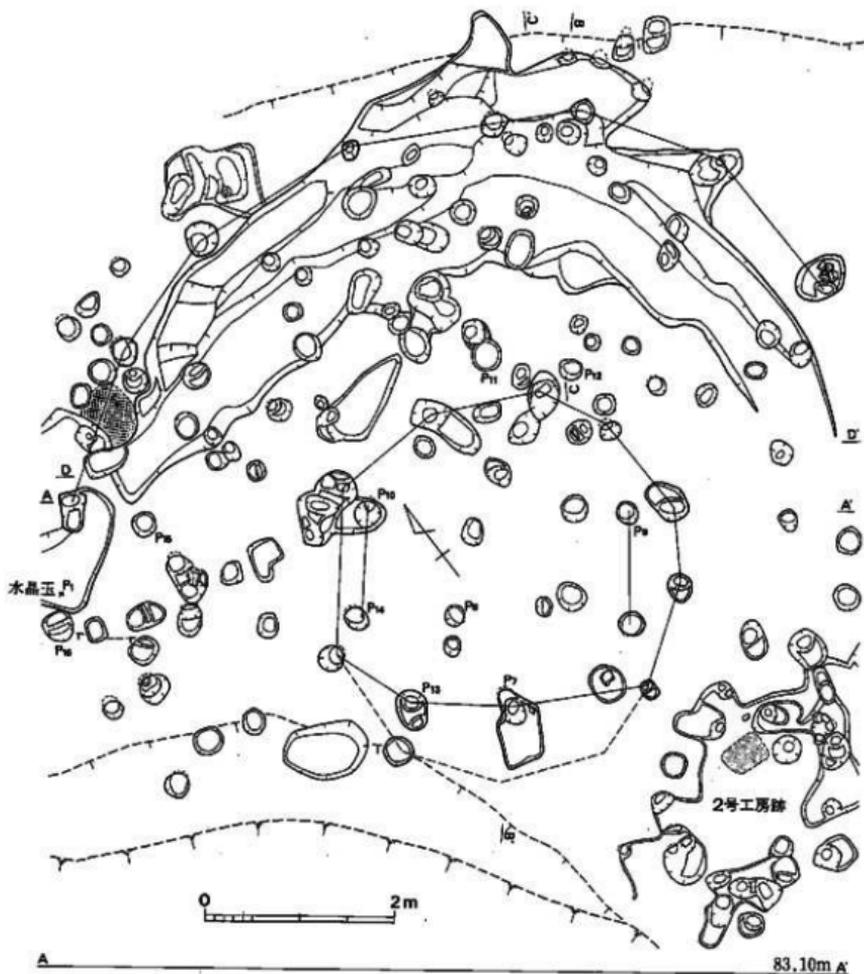
I区の中央付近、標高81~83mの中段に位置する。斜面上位側を半円形に掘り込んだ、あたかも弥生時代円形竪穴住居跡に酷似する特異な遺構である。直径7.5mの略正円形に斜面を掘り込み、その壁に沿って幅60~100cmの溝を掘り込んでいる。その溝の内側の床面は水平ではなく、斜面下方へ緩やかに傾斜している。溝自体は少なくとも1回は掘り直している。床面には小ピットが多数検出されたが、そのうち深くしっかりしたものを結ぶと、図に示したとおりやや歪つな10角形となる。これらは外壁ラインとうまく符合しており、上屋も円形の外観をなす建造物であったことが考えられる。更に、この10角形主柱穴ラインの内側に、東西に2本ずつの対となる柱穴（図中のP10とP14、P9とその南側のピット）がみられ、これらが棟持ちとなっていたと推定される。外壁の掘り込みラインに沿ったその外側には、150~180cm間隔に、小ピットが配置されており、この建物の外壁構造に関わる柱穴群と考えられる。

北西端の掘り込み外上面には焼土部分が認められるが、具体的にどのような性格のものか明らかにできない。また、この部分から西側は第1号土壇とした浅い掘り込みになっているが、両者の切り合いは認められなかった。時期的にも両者はほぼ似通っており、密接に関連する施設であったと考えられる。また、南東側では第2号工房跡が至近位置を占めており、当第1号工房跡の推定範囲と重複している。現地で両者の切り合い等確認することはできなかったが、第2号工房跡も同様に内側に溝を掘り込むこと、各平面形状が円形と方形という違いがあることなどから、両者の併存は無かったと考えられる。

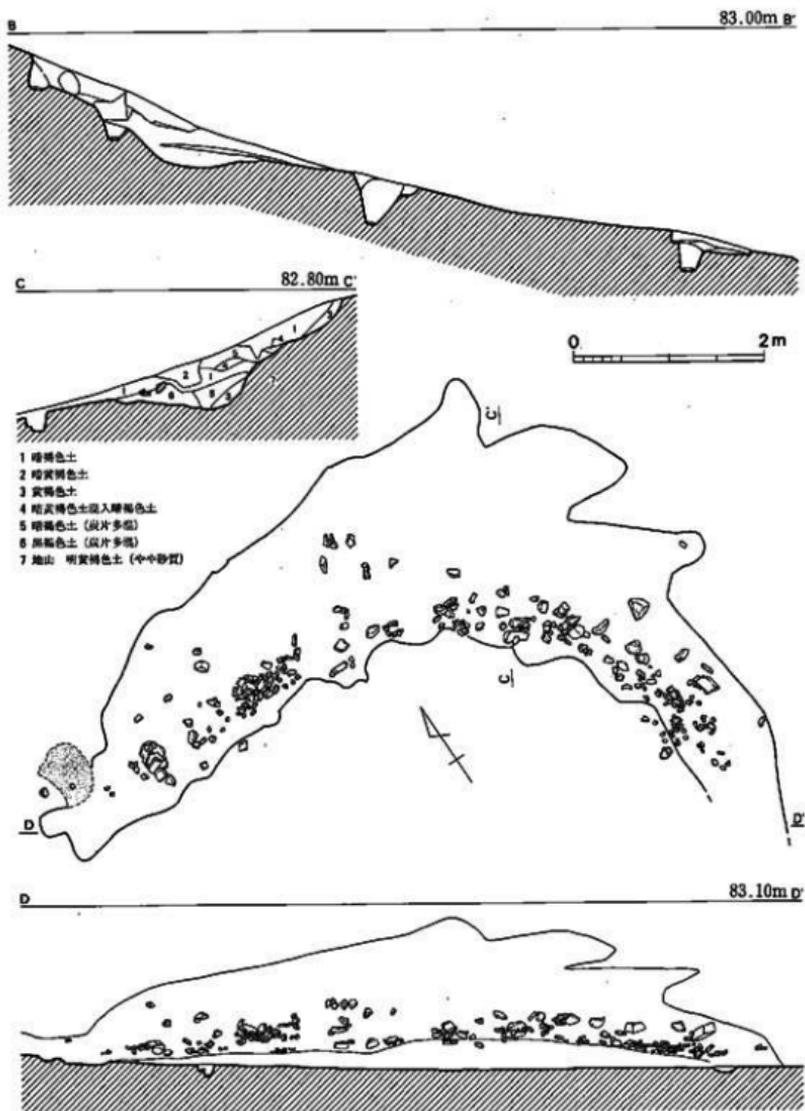
出土遺物の大半は溝状掘り込み部分に集中しており、多くの角礫とともに廃棄されていた。土器が多いが、後述する如く、鉄滓や櫛羽口片も出土しており、この



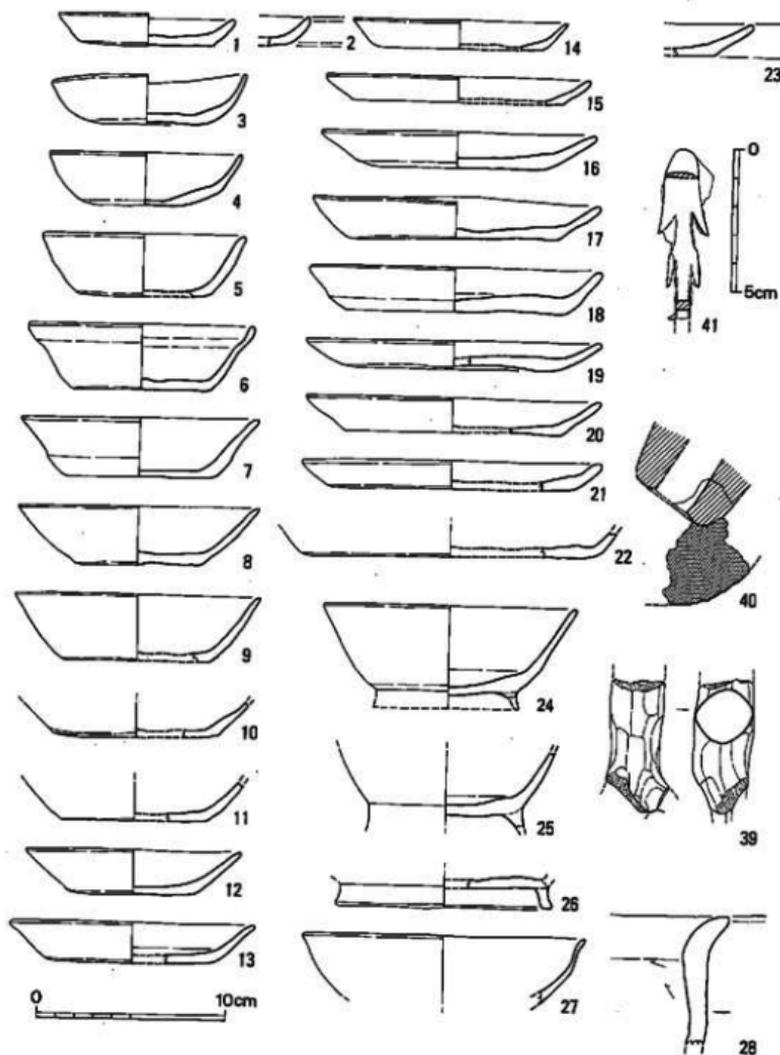
第24図 I区下段トレンチ西壁土層 (1/80)



第25図 I区1号工房跡実測図(その1) (1/60)



第26図 I区1号工房跡実測図(その2)(下半は遺物出土状態)(1/60)



第27図 I区1号工房跡出土遺物実測図(その1)(1/3, 41のみ1/2)

遺構の性格を推定させてくれる。ただこれらは量的には数点のみで、多くはない。また、北西隅のP1からは水晶玉1点が出土している。

出土遺物(図版15・16、第27・28図)

土師器小皿(第27図1・2)1は口径9.3cm、器高1.4~1.7cm、底径7cmとなる。器壁が厚めで、底部へら切類。胎土精良で焼成良好、内面は肌色、外面は明橙色。2は内外面磨滅しているが底部へら切であろう。細砂幾らか含む。

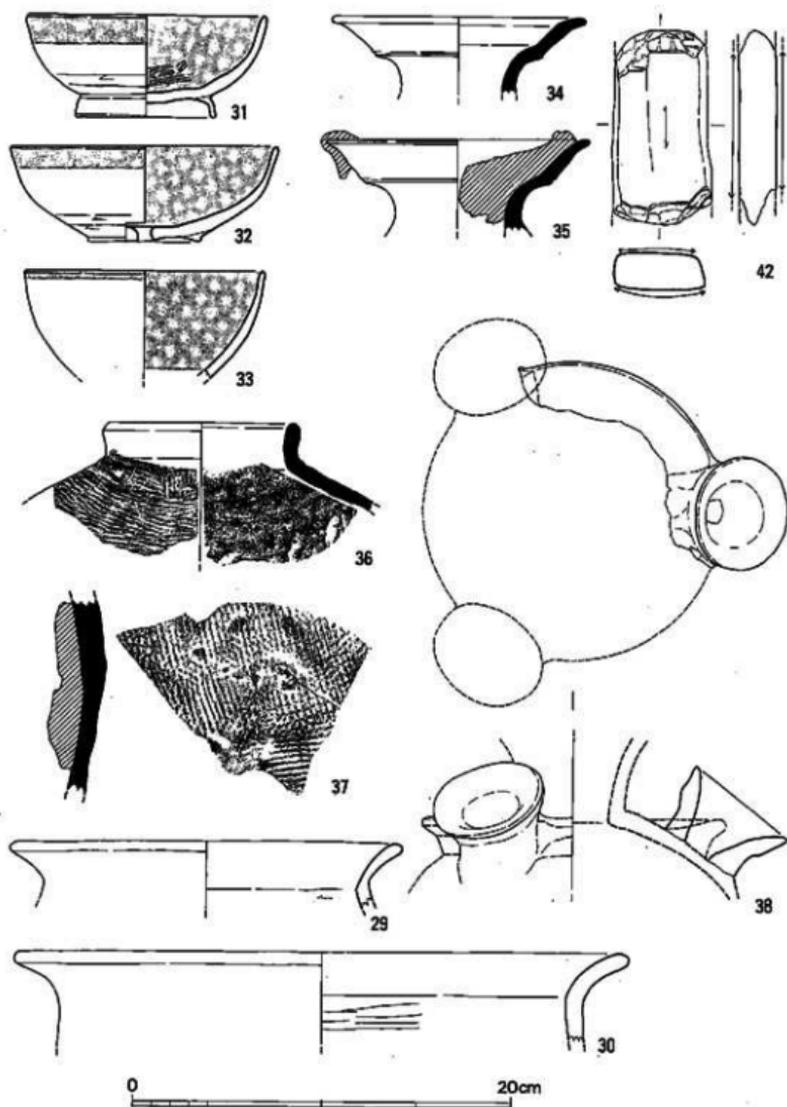
土師器杯(第27図3~12)3~5は口径10.2~10.8cmの小径類で、すべてへら切底。うち3・4は内湾気味に立ち上がる類で、胎土精良。5は細砂幾らか含む。6は口径12cm、器高3.4cm、底径7.4cmで、底部へら切。口縁が屈曲するくせがある。細砂幾らか含む、焼成やや不良で暗褐~淡褐色をなす。7~9は口径12.5~13cm、器高3.1~3.5cm、底径6.6~7.6cmのへら切底類。7は細砂かなり含む特徴的。8・9はいずれも胎土精良で焼成良好。10は底径8.8cmのへら切類。細砂僅かに含む、焼成やや良好。11は底径7.7cmのへら切類で、細砂幾らか含む。12は口径11.4cm、器高2.3cm、底径6.8cmのへら切類。胎土精良、焼成やや良好で淡褐色をなす。浅くて皿との中間的な異類。

土師器皿(第27図13~23)13・14は口径11.4~13cmの小型類。15~21は口径14~16cmの中型類。13は器高2.2cmで、杯との中間的なもの。細砂幾らか含む、へら切底で焼成良好、橙茶色をなす。14・15・19・21・22は胎土精良で、他は細砂幾らか含む。20は焼成やや不良で淡いこげ茶色をなすが、他はすべて焼成良好。16~20のように体部が大きく開いて長めに延びる類が主体となる。22は大型類で、体部も立ち上がり気味で、古相を残す類。

土師器高台碗(第27図24~27)24は口径13.3cm、器高5.4cm程となりそうで、胎土精良、焼成やや良好で橙茶褐色をなす。25は細砂僅かに含む、焼成良好。26は径11.5cmのしっかりした高台を付ける大ぶり品で胎土精良。27は復原口径15cmで、丸味を持った体部に丸く端反りとなる口縁を持つ。粗砂僅かに含む、焼成良好で内外面ともに淡茶~肌色をなす。

土師器甕(第27図28、第28図29・30)29は小甕で、口径20.8cm。内面はへら削り、暗黄茶褐色をなす。28はやや肥厚する口縁に張らない胴部となる。胴部内面はへら削り、外面はナア。30はこの工房跡前面のP17出土品で、口径32.6cmで胴部内面は横位へらナア状。粗砂少量含む、焼成良好で内面は煤が付着して黒色、外面はこげ茶色をなす。

内黒土器(第28図31~33)31は口径12.7cm、器高5.4cm、高台径7.4cm。内面は丁寧な磨き、体部外面はナアか。外面下端は削りを残す。外面の口縁下1.6cmまで黒色となる。32は口径14.2cm、器高5cm、高台径6cm。内面上半と体部外面は横ナア、外面下端には回転へら削りを残す。一見越磁を思わせる底部は低い高台を付ける。底部中央には焼成後の円形穿孔がみられ、内面には極細沈線が底部中心まで直線状に施されている。外面の口縁下1.2cmまで黒色となっている。33はこの工房跡前面のP18出土品で、復原口径12.7cm。内外面ともに磨滅。31~33ともに胎



第28図 I区1号工房跡出土遺物実測図(その2)(1/3)

土精良で焼成良好。外面は淡褐～淡橙褐色をなす。

須恵器壺（第28図34～37）34・35は同一個体かもしれない。口径14cmで内外面回転ナデ。粗砂かなり目立ち、焼成堅緻で淡青灰色をなす。35は鉋物が熔けて口から流れ出した状態で黒色異物が付いている。焼成時の窯内に起因するものかもしれない。36はこの工房跡前面のP16出土品で、口径10.4cmの直口壺。胴部外面は横位平行条線状皴き、内面は青海波のあて具痕がみられ、粗砂幾らか含み焼成堅緻で外面は灰かぶり。37は内面に35と同じ黒色熔融物が付着する。外面は右下がり斜位～横位の平行条線状皴き、内面は縦位の平行条線状あて具痕。胎土精良で焼成堅緻で外面は暗灰褐色をなす。

子持壺（第28図38）焼成土師質で粗石英粒を多量に含む。肩部に3個の子を付け、それらの間を鐮状の凸帯で連結させたもの。子部分は2個出土。淡黄茶褐色をなす。確実にこの工房跡下層から出土しており、器種としても異例で貴重な一品である。

土製品（第27図39）直径3.1×2.8cmの棒状の片端が平たく広げられ、二又に分かれたもの。粗砂多く含み、焼成良好で茶褐色をなす。鍛冶関連の道具のひとつとなるものか。

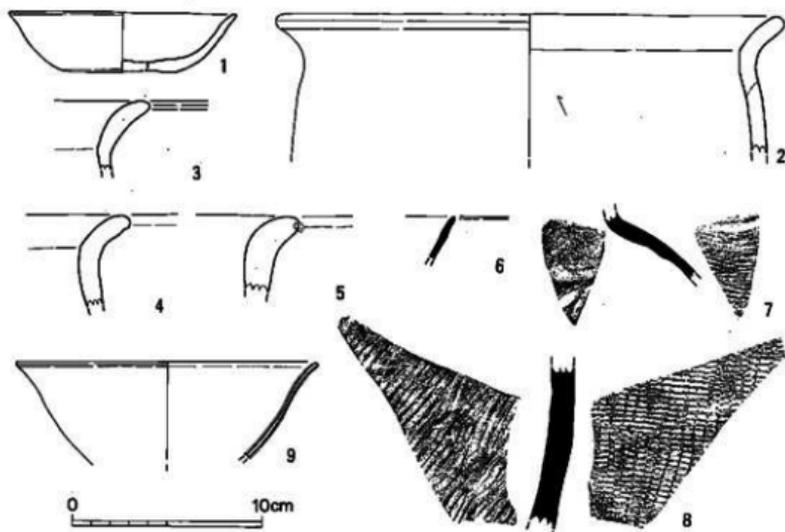
轆羽口（第27図40）椀型滓に羽口端が融着したもので、図の下端面は炉底面の曲面をみせている。羽口は孔径2cm前後となりそうである。

鉄 鏝（第27図41）片丸造円頭の二段腸袂類となる異類である。現存長6cm、最大幅1.7cm、頭部厚さ2mm、基部は断面長方形で5×3.5mm。

磁 石（第28図42）第1号工房跡前面P19出土品で、暗緑灰色の結晶片岩製粗砥。現存長10.2cm、幅5.3cm、厚さ1.9cmの板状品。裏面は凸面となり、重量211.5g。

鉄 滓（第2表）この第1号工房跡及びその前面の各ビットから出土した鉄滓は、5個で計428.9gとなる。下段包含層まで落ち込んだものを加えても1kgそこそこであり、決して多いとは言えない。椀形滓がいくつか出土していることから、小鍛冶工房であったと思われる。

以上の第1号工房跡出土遺物は、工房的な特殊遺物もあるが、日常容器も多く、生活臭もかなり感じられる。うち、小皿の1はこれのみ11C中頃前後のもので他と時期が異なる。土師器杯の6～9は大旨9C前半～後半の範囲に収まる類であるが、うち8・9は体部がやや内湾的に開く古い様相を示している。土師器皿は小径化してきており、体部が長く外傾して開く類が主体を占め、9C代の所産であることを示している。24の土師器高台椀は、体部外面下端と高台との間に段を残しており、9C前半代までのものである。27の端反りの椀は器形からみて9C後半乃至10C中頃の特徴を示している。内黒土師器の31・32は体部が丸く、内湾する高台の特徴は9C後半～10C前半代のもと思われる。土師器甕は28が口頸部が肥厚して古い様相を残すものの、29・30は9C代の特徴を示している。以上のように、全体としては9C前半代を中心とするものと、9C後半～10C前半代のものに分かれており、この第1号工房跡の存続が50～100年弱の間、つまり2～3世代の間認められることになる。



第29図 I区1号土壌・1号工房跡上面出土土器実測図(1/3)

第2表 江栗I区出土鍛冶関連遺物一覧

遺物名	出土遺構	個数	重量(g)	特徴・押図番号
鉄滓	第1号工房跡 No.8	1	139.6	楕型滓に鑢羽口が付着、第27図40
"	第1号工房跡 No.29	1	237.7	楕型滓
"	P.3 (第2号工房跡前面)	2	31.1	
"	P.18 (第1号工房跡前面)	1	20.5	他に木炭片 8g出土
"	第2号工房跡	1	238.9	楕型滓
"	P.53	1	76.4	楕型滓の破片
"	下段段落最下層	1	87.9	
"	下段段落下層(黒褐色包含層)	10	141.3	
"	下段暗褐色包含層	2	74.8	
"	下段包含層	1	16.9	
	鉄滓 計	21	1,065.1	
取瓶	下段段落下層(黒褐色包含層)	2		第42図21・22
"	下段暗褐色包含層	1		第43図13
炉壁片	第2号工房跡	8	54.8	他に、取瓶あるいは鑢羽口小片1点あり
"	P.20	8	89.8	
"	下段段落下層(黒褐色包含層)	2		

## 第1号工房跡・第1号土壙上面出土土器(第29図)

ここでは遺構検出時に、まだ第1号工房跡と西隣の第1号土壙が未分化の時に出土したものを報告しておく。両者の埋没途中で混入したものであろう。

土師器杯(1)口径12cm、器高3.1cm、底径6.4cmで、内外磨滅するがへら切底であろう。底部が小さめで体部が丸味を持ち古い様相を残す。9C前半を中心とする時期。細砂多く含む、焼成良好で内面は暗黄～茶色、外面は茶褐色をなす。

土師器壺(2～5)2は復原口径27cmで内外磨滅するが、胴部内面はへら削りが残る。細砂粒を多く含む、焼成良好で内外橙褐色をなす。外面には煤が付着する。3は粗・細砂多く含む小甕片で、胴部内面はへら削り。4は粗・細砂を多く含む中型甕片で、内外面磨滅。5は肥厚した口縁の中型甕で、粗・細砂粒を幾らか含む。

須恵器杯(6)胎土精良、焼成堅緻で灰色をなす。内外面回転ナデ。

須恵器壺(7)粗砂僅かに含む、焼成堅緻で内面は暗灰色、外面は茶灰色をなす。外面は極細の横位平行条線状敲き、内面は太目の青海波的あて具。第28図36と同一個体か。

須恵器甕(8)外面は長方形格子目敲き、内面は平行条線状あて具痕がみられる。粗砂僅かに含む、焼成堅緻で内面は灰青色、外面は暗灰色をなす。

白磁碗(9)口径16cmの口禿類で、胎土は密で乳灰白色をなす。釉はわずかに緑がかった乳灰色をなす。

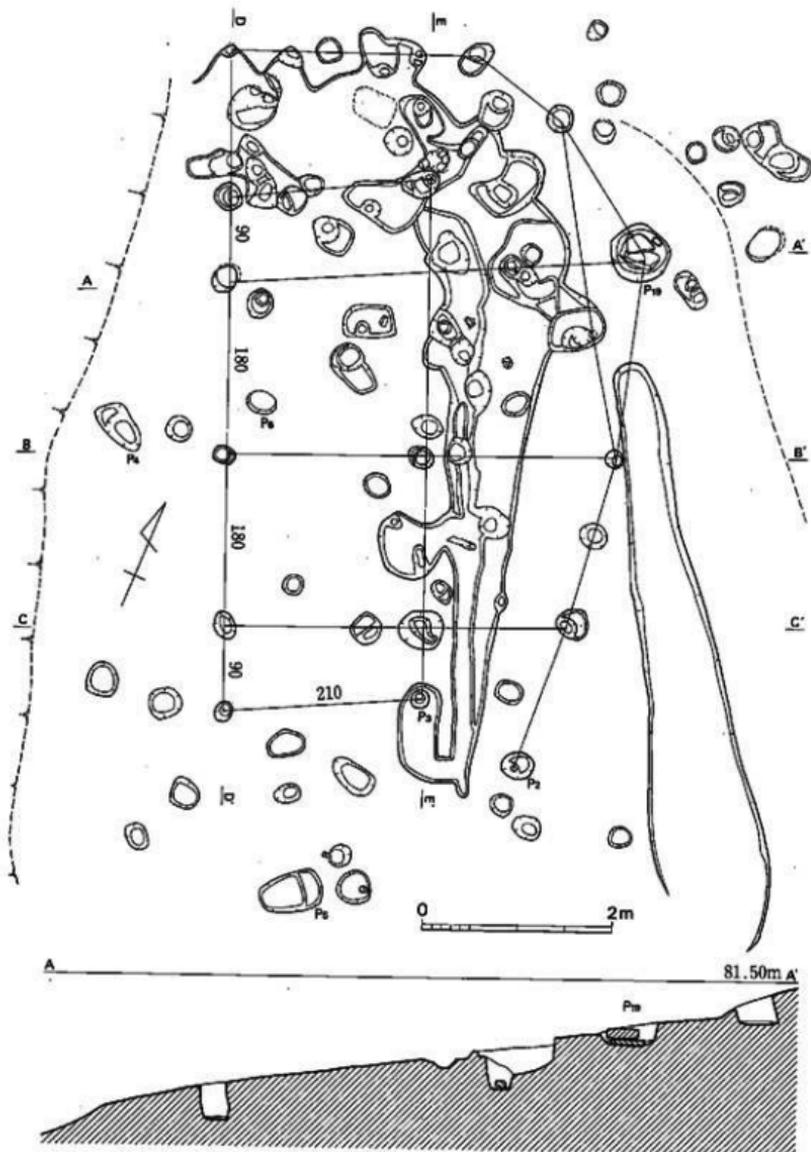
## 第2号工房跡(図版3・4、第30・31図)

第1号工房跡と同じ段の南東隅に位置する。南北に細長い建物か復原され、6尺を1間とする1×2間の主屋に、南北張り出し部と東～北外側に壁構造に関連する小柱穴が並ぶ。第1号工房跡と同じく、段落状の掘込の内側に幅20～50cmの溝を沿わせている。また、北端には掘込壁が焼けた部分があり、更にその西方にも焼土部分がみられる。掘込外側に巡る小柱穴は内側に傾斜しているものが多い。第1号工房跡が円形構造を基本としているのに対し、こちらは長方形を基本としているようであり、隣接して一部重複していることから、時期的に差があるものと考えられる。

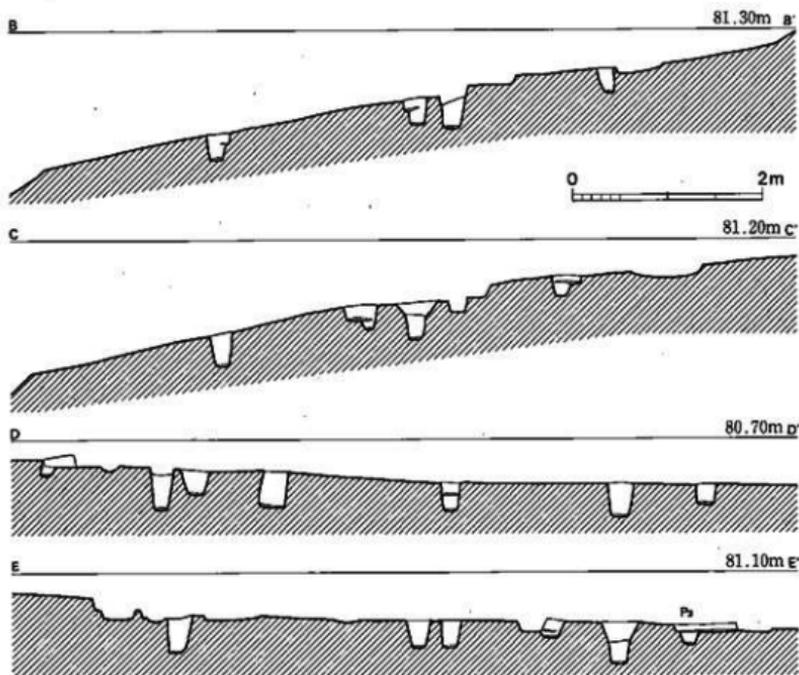
この遺構の上面はかなり削平されていたため、出土遺物は少なく、図示できるものは無いが、南端の柱穴P3から2個(計31.1g)の鉄滓が、また他に楕形滓(238.9g)や炉壁小片8個、取瓶乃至翹羽口小片1点も出土している。以上のことから、当第2号工房跡も、平安初～前半期の小鍛冶に関連する作業棟と考えられる。

## 2) 土壙

### 第1号土壙(図版4、第32図)



第30图 I区2号工房跡実測図(その1)(1/60)

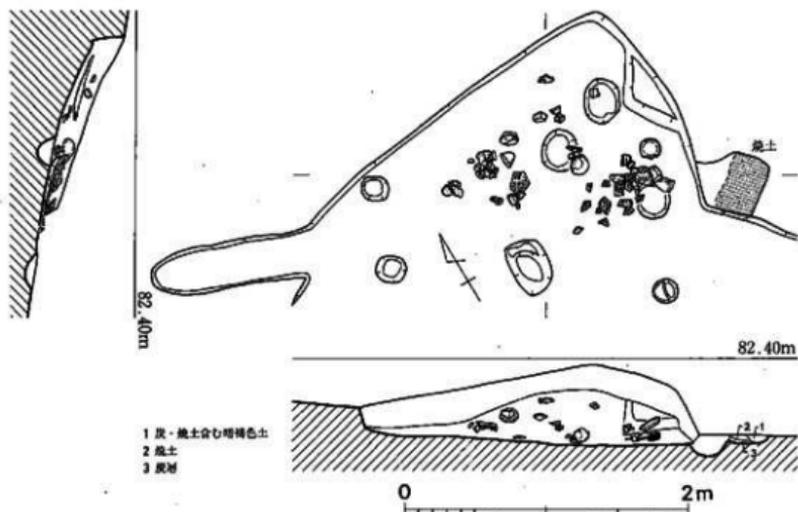


第31図 I区2号工房跡実測図(その2)(1/60)

遺跡中央の中段テラス西端の第1号工房跡に接して位置する。斜面を掘込んでテラスを作り、底面に柱穴を配したもので、一見方形竪穴住居のようであるが、底面が水平をなさない事等から、住居との確証が無く、ここでは土壇と称しておく。垣土層以下には土器が多く、その下は炭化物が多く出土した。

出土遺物(図版16・17、第33・34図)

土師器杯(第33図1~7)いずれもへら切底で、細砂多く含む特徴がある。1は口径11cm、器高3.4cm、底径7.2cmの灯火器で、半周の口縁内面に油煙がこびりつく。底外面に糞子状圧痕が僅かに残る。2は口径11.6cm、器高3.2cm、底径7.7cmで、内面3カ所に油煙がこびりつく。底外面には糞子状圧痕がみられる。3は口径12cm、器高3.4cm、底径8cmで内面に太いへら沈線による×印が施されている。底外面には糞子状圧痕が残る。4は口径12.8cm、器高3.2cm、底径7.8cm。5・6は口径13cmで深めの器形で高台椀の可能性が高い。7は底径9cmで大きめの鉢状



第32図 I区1号土坑実測図 (1/40)

品となろう。

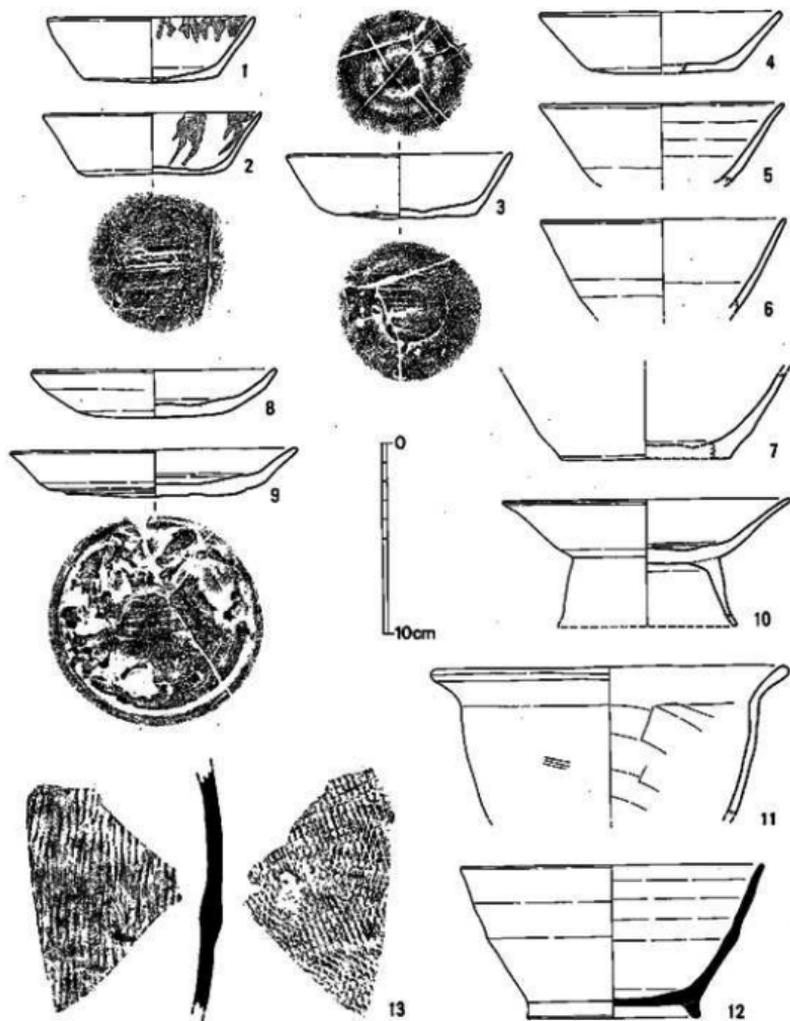
土師器皿(第33図8・9)8は口径13cm、器高2.5cmで杯との中間的器形。底外面は手持ちの雑なへら削り。蓋の可能性が強い。9は口径15.2cm、器高2.5cmで、底外面は雑なへら削りのままで、中央に板目を残す。

土師器脚台杯(第33図10)口径15.2cm、杯部高3.4cm、器高は6.5cm以上となる。細砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は淡黄茶色、外面は淡茶褐色で一部に黒斑部がみられる。

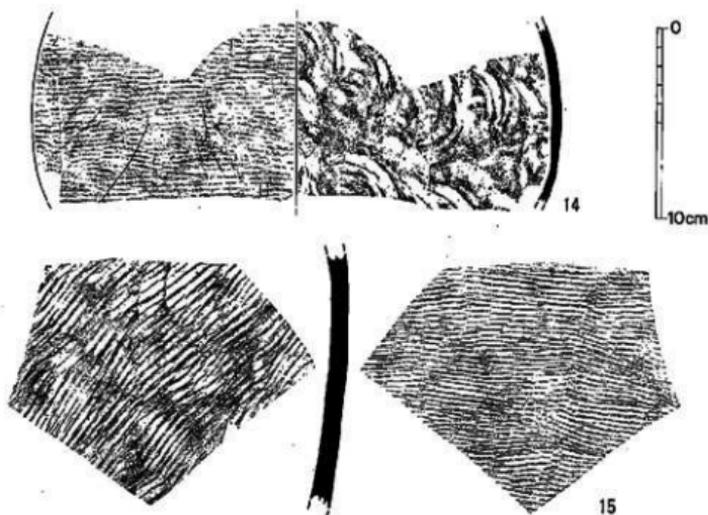
土師器壺(第33図11)復原口径19cmの小甕で薄手品。内面はへら削り、外面は磨滅しているが一部に敲きが残る。

須恵器(第33図12・13、第34図14・15)12は口径16cm、器高8.1cm、高台径9.2cmの生焼品で、粗砂僅かに含み。13・14は壺片で、13は外面に長方形格子目敲き、内面に縦位の平行条線状あて具痕がみられる。胎土精良で焼成堅緻。一部に焼ぶくらみがある。14は外面に横位平行条線状敲き、内面には雑な青海波あて具痕がみられる。粗砂幾らか含み、焼成堅緻。15は外面に細い横位平行条線状敲き、内面には斜位の平行条線状あて具痕を施す。粗砂幾らか含み、焼成やや甘い。

以上の第1号土坑出土遺物のうち、4・5・12などは8C末～9C前半代の特徴を示し、1・2・9・10などは9C後半代を中心とする時期のもので、大きく2時期に分かれる。これは隣



第33図 I区1号土坑出土土器実測図(その1) (1/3)



第34図 I区1号土壙出土土器実測図(その2)(1/3)

の第1号工房跡と全く同じ様相を示しており、両遺構が密接に関連したものであったことが推定できる。工房に付属した物置的な空間と考えられる。

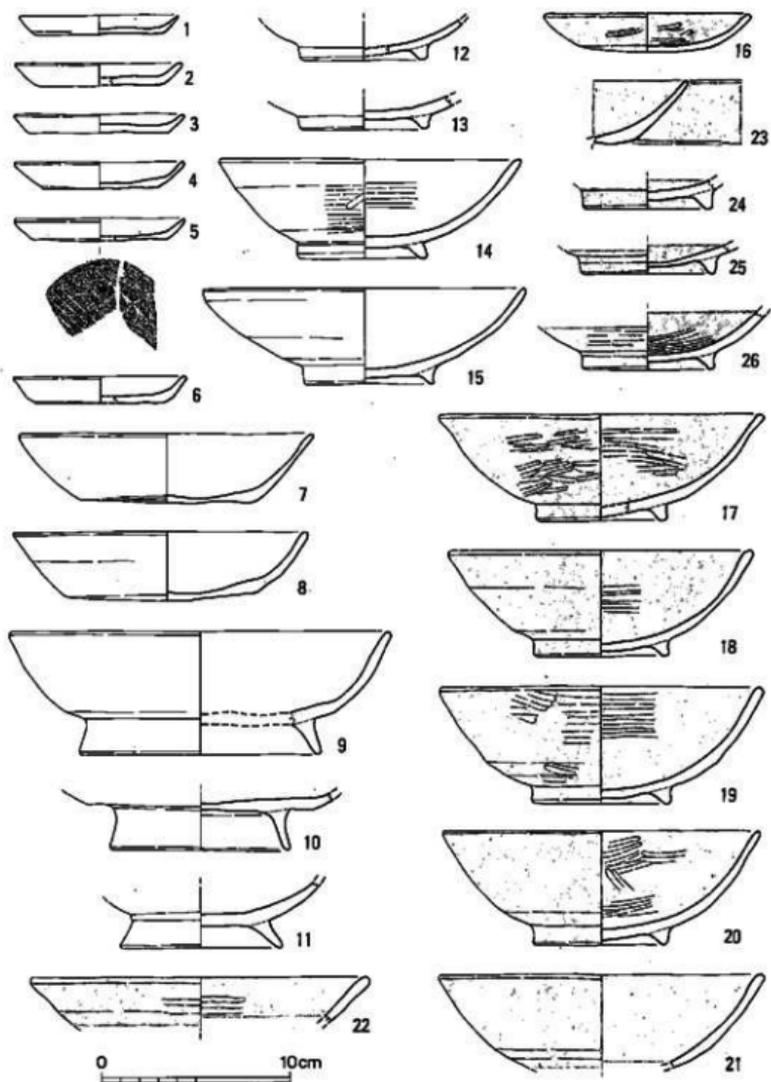
### 3) 溝状遺構

#### 第1号溝(図版2、第23図)

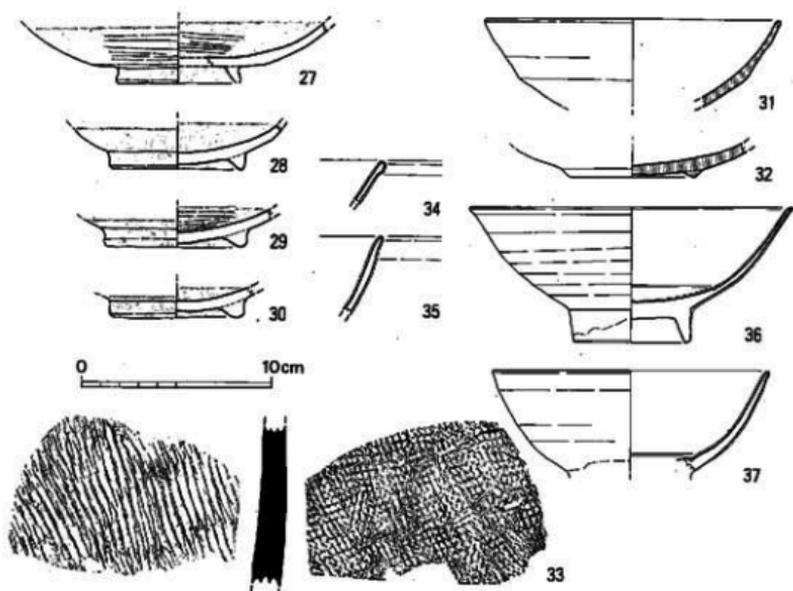
谷に面した広いテラス面(以下「下段」と呼ぶ)は、東西長が40m、南北幅が13mあり、包含層からの多量の出土遺物や多数の柱穴群などから屋敷跡と考えられる。その屋敷建物を囲むようにコの字状に巡らされたのが当溝である。北辺の斜面直下側では排水の役目をなし、東・西辺では排水とともに区画を示していると考えられる。幅0.8~2.5m、深さ15~40cm程の浅めの溝で、東辺と西辺の溝間は約25mある。溝中からは多くの土器類が出土した。溝上面からも遺物がかなりみられたため、両者を分けて報告しておく。

#### 出土遺物(図版18・19、第35・36図)

土師器(第35図1~15)1~6は口径8.5~9.1cm、器高1~1.4cmの小皿で、3はへら切、2・5・6は糸切底、1・4は磨滅しているが糸切と思われる。2~4は板目がみられ、5の底外面には曲線2本の細沈線文が施され糞子状圧痕がみられる。いずれも胎土精良で、1は焼成や不良で内面白茶褐色、外面は灰褐色をなす。他の2~6は焼成良好。7・8は口径15.5~15.



第35図 I区1号溝出土土器実測図(その1)(1/3)

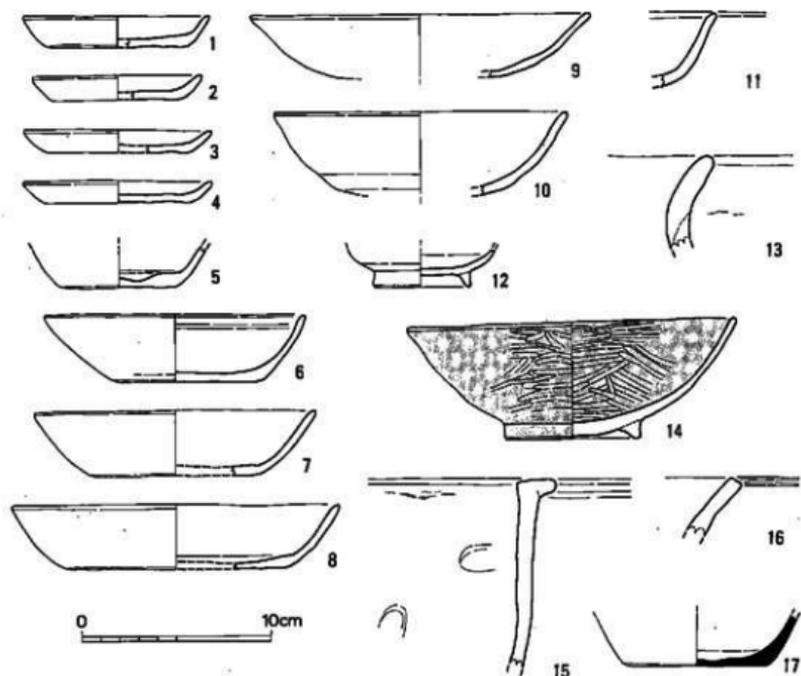


第36図 I区1号溝出土土器実測図(その2)(1/3)

6cm、器高3.7cm、底径9.1~10cmの大口径の杯で、底部はいずれも糸切。内底面はナデツケている。2個とも胎土精良。9~11は長い高台が外方へしっかり開く形で、9は口径20.2cm、器高6.5cm、高台径12.8cm、9・10は胎土精良で、11は細砂粒を幾らか含む。12~15は後述する黒色土器と共通する器形で、12の内面、14の内外面は磨いている。12の外表面と13は磨滅している。15の外表面はナデ、内表面には漆状黒色研磨部分が僅かに残る。14には細砂かなり含む、他は胎土精良。14は口径15.9cm、器高5.2cm、15は口径17.2cm、器高5cm。

黒色土器(第35・36図16~30)いずれも内外とも焼された黒色土器B類で、16は口径11cm、器高2cmの皿状器形で、胎土精良、内外面ともに磨いている。17~21は口径16.2~17.2cm、器高5.6~6.2cm、高台径7~7.4cmというほぼ同法量を示す規格品である。いずれも体部内外面ともに磨いている。胎土精良で18と20の外表面下端~高台付近は幾らか暗褐~橙赤色。22~30は高台碗片で、17~21と基本的に同じで、いずれも胎土精良。27の体部外表面下端は回転削り、大口径の浅い器種となるかもしれない。

瓦器(第36図31・32)31は口径15.6cm、32は高台径6.6cm。31は胎土精良で焼成良好、口縁内外のみが黒色、内面は白色、外面下半は淡灰色。磨滅しているが内面は磨いているようだ。



第37図 Ⅰ区1号溝上面出土土器実測図(1/3)

32も内外磨減しており、焼成不良で内面は黒色、外面は暗灰～暗黄色をなす。

須恵器(第36図33)外面は小さめの正格子目の敲き、内面は縦位の平行条線状で具痕。粗・細砂幾らか含み、焼成堅緻で内面淡青灰色、外面は青灰色をなす。

白磁(第36図34～37)34は小さい玉縁口縁類で、胎土は密で白色。釉は乳白色で表裏ともザラついている。35は口縁端を丸く収める類で、胎土は密で乳白色、釉調は乳白色をなす。36は口径17.2cm、器高7.1cm、高台径6.2cmとなる完形品。高台外面下半から内面は露胎。胎は密で灰白色、釉調は乳灰白色。37は口径14.6cmで胎は白色でややさっくりしている。釉はやや灰色がかった乳白色。

以上の第1号溝出土の遺物は、若干の古期のものの混入を除いて、よくまとまった好セットをなす。2～6の土師器小皿は大宰府SK1204の様相と同様のヘラ切底から糸切底への転換期を示しており12C中頃に置く。7・8の土師器杯は口径が最大となる時期であり小皿同様12C

中頃。9～11の高台類は9C後半～10C代のものの混入品で、上の段の第1号工房跡・第1号土塼のものの流れ込みの可能性が高い。黒色土器Bの多量の出土は大宰府SK1204併行期すると極めて貴重な資料となる。白磁も古式のものを含み、時期的矛盾はない。以上のことから、この第1号溝は12C中頃の遺構と考えられる。勿論、この内部に想定される屋敷跡の時期も示すものである。

#### 第1号溝上面出土土器（第37図）

土師器（1～13）1～4は口径8.8～10cm、器高1.2～1.7cmの小皿で、1のみへら切底で他は糸切。1は器高が高く、他に比べて古い様相を示す。粗・細砂幾らか含む焼成不良で内面は灰黒色、外面は淡茶褐色をなす。2・4は胎土精良で焼成良好。3は細砂幾らか含む焼成良好。5は底径6.4cmでへら切の小ぶりの杯で、古い様相を持つ。細砂僅かに含む。6は口径13.8cm、器高3.5cm、底径8cmでへら切底。細砂かなり含む焼成良好で白褐色をなす。体部外面下端にへら削りを残す。7・8はへら切底と思われ、口径15～17.3cmと最大になる時期のもの。7は細砂幾らか含む。8は胎土精良。9・10は丸底の杯類で、いずれも胎土精良で内外磨滅。12は高台径5.2cmの小型類で胎土精良。13は細砂多く含む變片で、外面には煤が付着する。

黒色土器（14）口径17.4cm、器高6.1cm、高台径7.1cmの内外黒色燻し。第1号溝内出土品の17～21と同規格品。胎土精良で内外へら磨きで、底外面はナアている。

土 鍋（15・16）15はかなり大口徑となる類で、粗砂多量含む、茶褐色をなす。内外面ともに雑なナアで、外面には煤が付着。16は細砂幾らか含むのみで、内外面ともに淡黄～淡茶色。

須恵器（17）底径7.6cmの杯類で、底外面は手持ちへら削り風。細砂僅かに含む、焼成やや堅緻で内外灰色をなす。

以上の第1号溝上面出土土器のうち、1と6は11C後半～12C前半代的な古い様相を持っており、9・10も丸底の杯類と同様である。また、5・17はもっと古い時期のもので第1号工房跡等からの9～10C代のものの流れ込みであろう。それ以外の2～4・7・8・14～16は第1号溝内出土のものと同じく12C中頃を中心とする時期のものである。

#### 4) 下段建物面

下段面のテラス部分には、前述の第1号溝に囲まれた建物跡が推定される。大小のピットが120個以上検出され、うちかなりの数の柱穴がみられたが、柱穴配置をきちんと確認することができず、建物の状況を示すことができなかった。ただ、中央のトレンチより西側に大きな主屋的な建物を想定でき、東側には櫛列とその内側に小さな建物があったのではないと思われる。なお、この建物面は後述する下段段落の谷状部が埋まった後に上に整地層を盛って作られており、その整地層下にもピット群がみられることから、1時期だけではなく、複数回の建物構築

が行われたと考えられる。

この建物の時期は、第1号溝出土品が示す12C中頃前後のものと推定できる。以下に個々のビット出土遺物について報告しておきたい。

#### 各ビット出土遺物 (第38・39図)

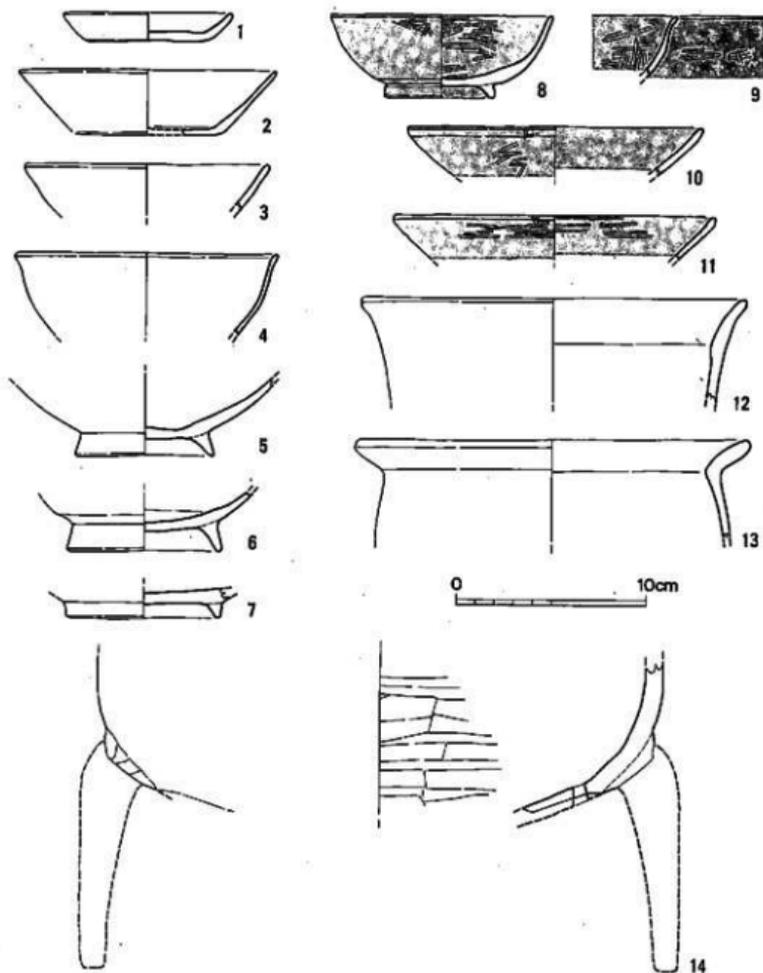
土師器(1~7・12~18) 1は下段建物面東半のP56出土品で、口径9cm、底部へら切の小皿。第1号溝と同じ12C中頃。2は第1号工房跡或は第1号土壇に伴う浅い掘込のP1出土品で、水晶玉と伴うもの。口径13.5cm、器高3.4cmのへら切底で9C前半代のもの。3は下段東半のP37出土品で口径13cm。4は下段建物面東半のP56出土品で、口径14cm。5は下段段落の底近くの斜面に貼り付いて出土したP70で、高台径7.4cm。細砂幾らか含む。6は5と同じく下段段落斜面に貼り付いて出土したP68で、9C後半~10C代のもの。7は下段建物面西半部のP25出土品で、器形は土師器だが焼成は土師器生焼けというより瓦質に近い。12C代のもの。12は口径20.4cmの小甕で、下段建物面東半のP57出土品。内外磨減しており、砂粒をやや多く含む。13は下段段落の最底面出土のP67で弥生土器。細砂多く含む外面に煤付着。14は下段建物面東半のP53出土品で内面黒色、外面淡褐色で内黒土器的。足蓋的に復原してみたが、足はあまり長くないかもしれない。外面磨減、内面は横位へらナデ的磨き。焼成後穿孔が1個ある。15・16は下段建物面東半のP60出土品で同一個体かもしれない。口径28cmの中甕で細砂多く含む。外面には粗い縦ハケ、内面は削りの上をナデている。17は下段建物面東半のP55出土品で、粗砂多く含む内外磨減。18は下段段落中段面出土のP69で、粗・細砂多く含む。焼成土師質の甕。外面下端はへら削りを残す。

黒色土器(8~11) いづれも内外黒色に焼された類で、胎土精良。8は下段段落中段出土のP66で、口径11.8cm、器高4.3cm、高台径5.9cm。体部外面下半は磨減。9と11は下段建物面東端のP45出土品で、いづれも内外へら磨き。10は下段第1号溝内のP41出土品で、内面は磨減しているが磨きであろう。以上の黒色土器Bは8が明らかに古いタイプで9C後半~10C前半のもの。10・11は第1号溝出土品と同じで12C中頃前後。

須臾器(19) 下段段落最下の斜面から出土したP71で、粗砂僅かに含む、内面淡灰褐色、外面は淡灰色の生焼け類。外面は上半が斜位、下半が横位の細めの平行条線状敲き、内面は上半が縦位、下半が横位の平行条線状あて具痕。9C代のものであろう。

白磁(20) 第1号工房跡西端のP1出土品で水晶玉と共伴。胎はやや粗く黄白色をなし、焼成不良で釉は淡青緑色に発色している。下半外面は露胎。高台径6.2cm。

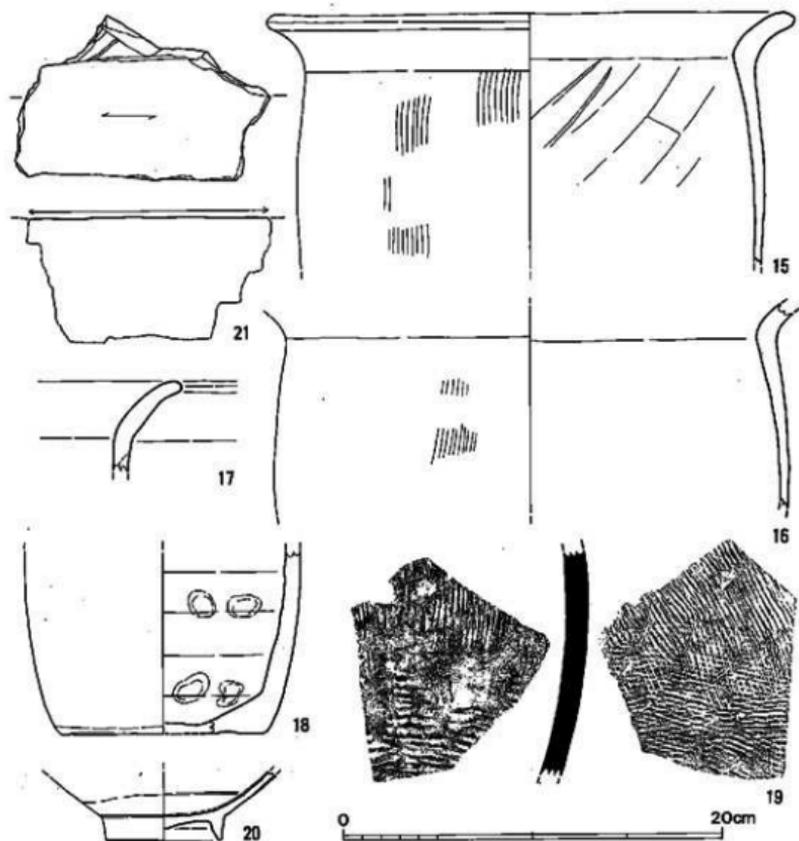
砥石(21) 下段の第1号溝東端から出土したもので、角閃石が目立つ灰紫色の凝灰岩製。現存長13.5cm、幅8.9cm、厚さ6.5cm、重量910.7g。全周と表面が欠損しており、砥石というより台石或は磨石の大大型品。



第38図 I区各Pit出土遺物実測図(その1)(1/3)

5) 下段段落部

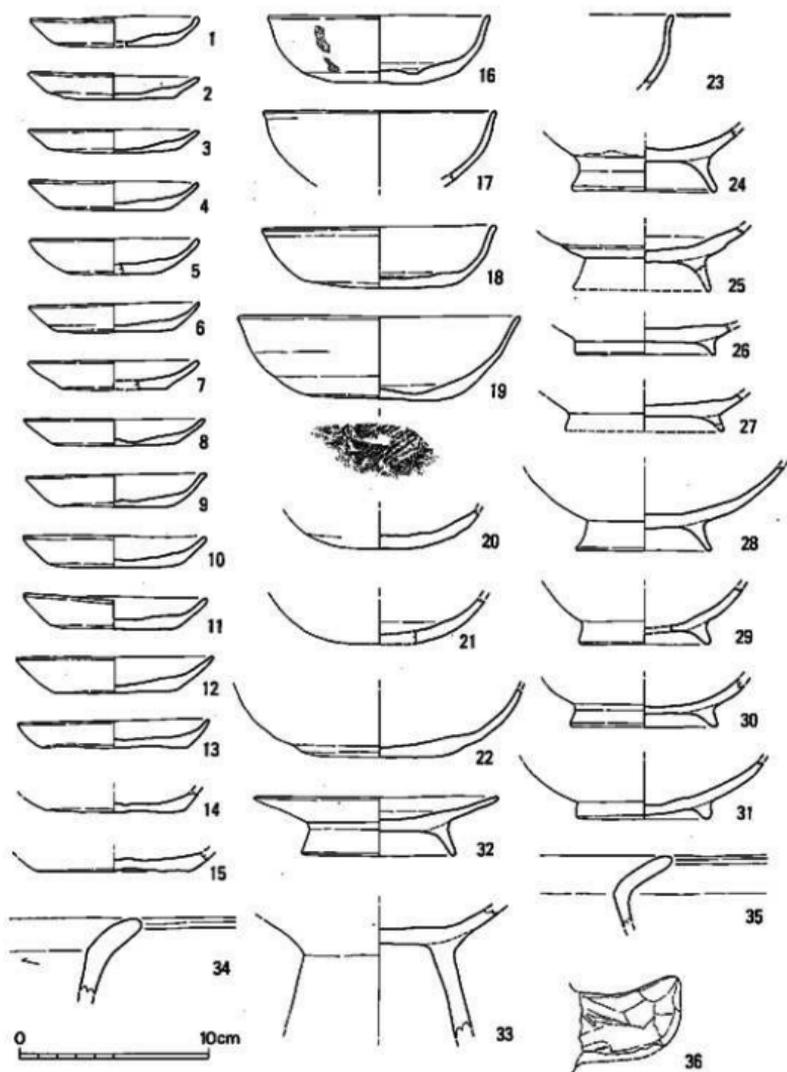
下段テラス面の中央南半部は建物面整地層の下が深く下がっており、中央トレンチで確認し



第39図 I区各Pit出土遺物実測図(その2)(1/3)

た後、最終的にはすべて地山面を出した。その結果、テラス面から3mまで下がって、全体が小さな谷状の形状をなした。ここの出土遺物や谷底筋の登って行く方向等を考えると、この段落部は第1号工房跡への登り道としてある程度人の手が加わった道跡と考えることができる。それは底面中途に自然に流れ込んだにしては不自然な集石部があったり、階段状に3カ所に段がみられること等からも言える。

第24図のトレンチ西壁土層に示すとおり、この段落部が斜めに埋まってゆき、その後に最上



第40图 I区下段段落最下層出土土器実測図(その1)(1/3)

面に茶褐色土の整地層がテラス部を南方へ拡張するようにして盛られている。ただし、この図は段落谷筋部とずれているため、谷筋部の土層とは若干異なる。谷筋部では下層に黒褐色土が厚く堆積し、その下の最下層とともに多量の遺物を含んでいた。以下、最下層とその上の黒褐色土層出土品を分けて報告しておく。

#### 下段段落最下層出土遺物 (第40・41図)

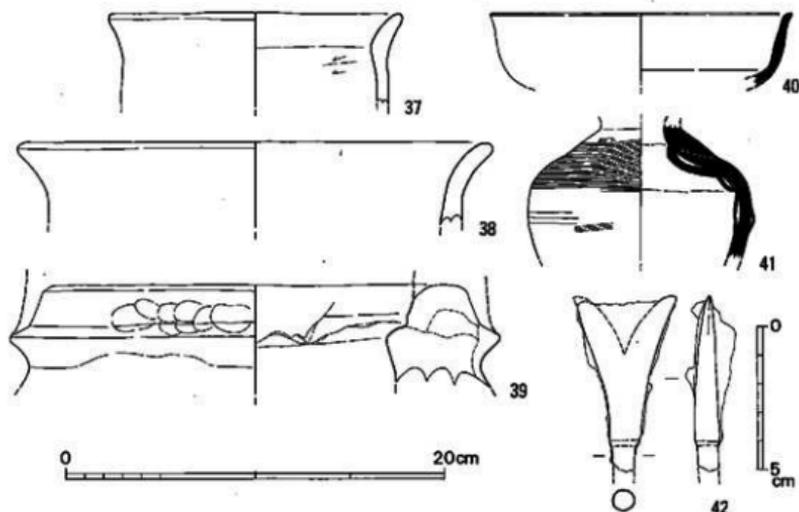
土師器 (1~38) 1~13は口径8.9~10.4cm、器高1.2~1.8cmの小皿類ですべてへら切底。1~6と10は細砂幾らか含む、他は胎土精良。1・2・9・12に板目圧痕が残る。12のみ法量が大きく古い様相を示す。15~23のうちの大半は丸底の杯か、それに近くなっている類で、19・22は砂粒を僅かに含む。16~18は口径11.8~12.4cm、器高3.2~3.5cmで底部がまだ明瞭で古い時期を示す。16の外面には油煙が残る。19は口径15cm、器高4.3cmで、底外面中央に糞子状圧痕が残る。24~31は高台碗で、長く外方へ張る高台のものが目立つ。24・25・27・31は細砂幾らか含む。31は黒色土器B類と共通する器形。32は口径12.9cm、器高3.1cm、高台径8.2cmの托で、粗砂幾らか含む。33は長脚状になる筑後地域特有の器形で、外底面にはへら切が残る。胎土精良で焼成良好。34は肥厚する口縁の鉢で、内面はへら削り。粗砂多く含む。35は薄手で弥生後期初葉の可能性が高い。粗砂多く含む。36は把手片で先端が尖る特徴を持つ。37は復原口径15.6cmの小甕。細砂かなり含む、胴部内面はへら削り、外面は煤付着。38は口径25.2cmの甕の張らない中甕で、内外面横ナデ。

須恵器 (40・41) 40は復原口径16cmの生焼品で、粗砂幾らか、細砂かなり含む。口唇部が面をなし、逆蓋の可能性が高い。内面白灰色、外面は淡灰~白色をなす。41は外面上半にカキ目を施す。細砂幾らか含む、焼成堅緻。内面は焼ぶくれが著しい。

筒状土製品 (39) 復原最大径26cmとなる部厚い土製品で、太い粘土紐を次々に積み上げており、用途は見当がつかないが、鑄型等の外巻き部分とも思われる。粗砂多く含む、上端は擬口縁風となる。内外面ともナデしており指頭圧痕も多い。

鉄 鏝 (42) 現存長6.2cm、鋒先幅3.5cmとなる刺股形類で、上半全体が厚いが錆ぶくらみによると思われる。被蓋部側は直径7mmの断面円形となる。珍しい形態で注目される。

以上の段落最下層出土品のうち、1~7の土師器小皿は口径9cm、器高1.5cm前後で、大宰府の編年に合わせて11C中~12C前半の時期が考えられるが、8~13は口径9.6~10.4cmと大きく、中でも12は10C後半~11C前半の範囲に含まれる類である。以上のことから、土師器小皿全体については、他器種との関係からも10C後半~11C中頃の幅の中で扱えられよう。16~18の土師器杯は、丸底の杯になる以前のもので、10C後半代が考えられる。19~22のようなほぼ丸底の杯と考えるとよいものもあり、杯全体としては10C後半~11C中頃の幅を考えておこう。長めの高台を持つ24~28は10C代として良く、32・33も同様である。31は12C代に降るかもし

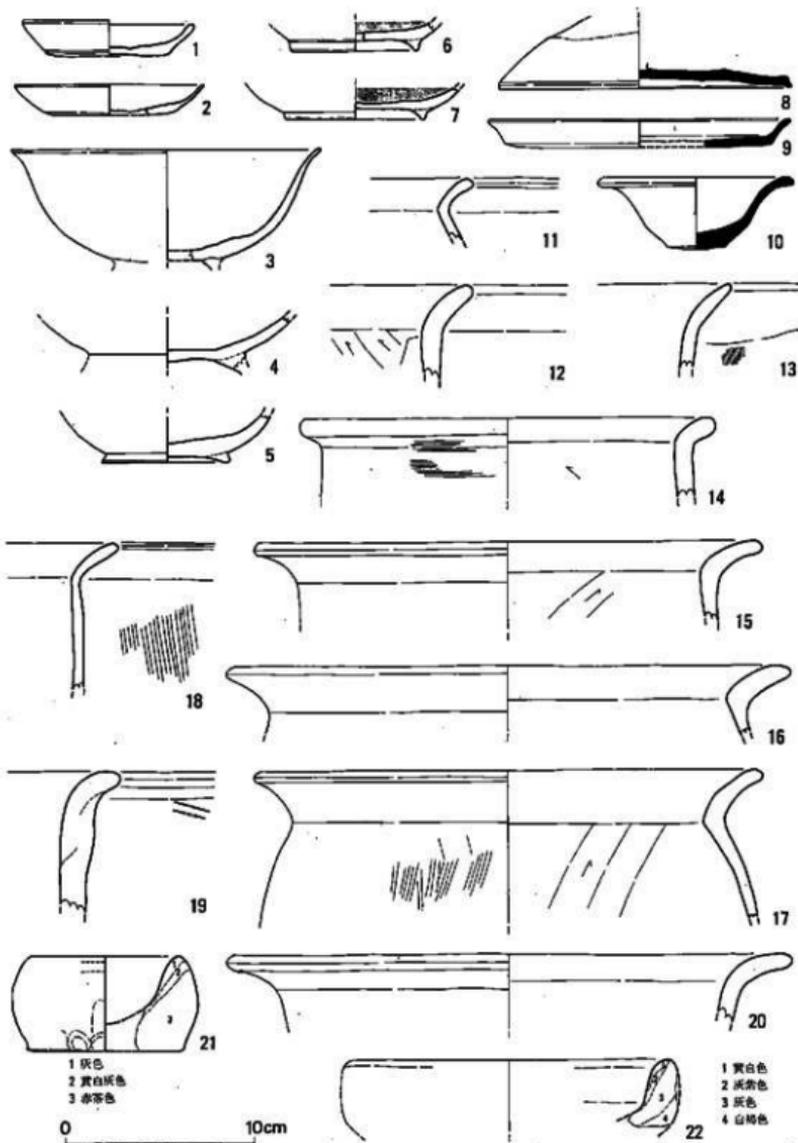


第41図 I区下段段落最下層出土土器実測図(その2)(1/3,42のみ1/2)

れない。34・36・37は9C代のもの。以上のように各々時期差がみられるが、まず、第1号工  
 房跡等に起因する9C代のものが少量混入し、主体は10C後半～11C中頃の幅の中でおさえら  
 れる。このことは、下段建物面を囲む第1号溝が12C中頃を主体としたことから、下段建物面  
 が整地される以前の同じテラス面に10C後半～11C中頃の遺構が存在していたことを裏付ける。  
 そして、この下段段落の登り遺状遺構はそれらの遺構への登り道としても機能していたことが  
 推測されるわけである。残念ながらこの時期の遺構は12C中頃の切土・盛土の整地によって痕  
 跡を失ってしまっており、性格を推定することはできない。

#### 下段段落下層黒褐色包含層出土遺物(第42図)

土師器(1～5・11～20)1は口径9cm、器高1.6cmのヘラ切底小皿で胎土精良。11C中頃前  
 後。2は口径10cm、器高1.6cmのヘラ切底小皿で胎土精良。11C中頃前後。3～5は高台碗で、  
 3は口径16.4cmで内外磨減。4は細砂焼らか含む。5の内面は磨いているようで、内黒土器と  
 共通する器形。胎土精良で高台径6.8cm。11は内面磨減、外面はナデ。弥生後期土器だろう。12  
 の外面はナデ、内面はヘラ削り。13の外面は縦ハケ、内面はナデ。14は粗砂多く含む、復原口  
 径22cm。外面は横ハケ、内面は磨減するがヘラ削りか。15は口径27cmで細砂多く含む。内面は  
 ヘラ削り。16は口径30cmで内外磨減。細砂多く含む。17は口径27cmで胴部が張る。外面はハケ、



第42图 I区下段段落下層黑褐色包含層出土土器実測图 (1/3)

内面はヘラ削り。細砂多く含む。18は薄手品で胴部外面は粗い縦ハケ、内面はナデ。19は厚手の異類で、内面全体は丁寧なナデ、外面もナデている。粗砂幾らか含む、焼成やや良好。16・17は9C代のもの。20は口径30cmの鉢で、内面はヘラ削り。細砂多く含む。

内黒土器(6・7)6は高台径6.5cm、7は7.2cm。いずれも内面ヘラ磨きで胎土精良、焼成良好で外面は淡褐色～肌色をなす。9C後半～10C前半代。

須恵器(8～10)8は口径15.5cmに復元できる蓋だが、極めて焼き歪みがひどい。天井外面は回転ヘラ削りの後ナデ。内面はナデツケ。胎土精良で焼成堅緻。9は口径16cmの皿で、底外面は回転ヘラ削り、内底面はナデツケ。細砂幾らか含む、焼成やや不良で内面は暗灰色、外面は灰～暗紫灰色をなす。10は口径10.4cm、器高3.8cm、底径3.1cmの異形品。内外面ナデで細黒色粒を多く含む。焼成堅緻で外面は灰色、内面は自然釉で淡緑灰色をなし、灰釉的。8・9は9C初葉以前、10も10C以降にはならないだろう。

取 瓶(21・22)いずれも小片のため径は不正確であるが、21は口径8cm、器高5cmとなる小型品。細砂幾らか含む、高温のために器壁が変色している。22は口径17cm前後で、粗砂幾らか、細砂かなり含む。内面は高熱によりザラザラになっている。

以上の下段段落下層黒褐色包含層の出土遺物は、10～11C中頃のもの、9C代を中心とするものに大別され、上方の第1号工房跡からの流れ込みが後者で、前者は下段テラス面にかつて存在した生活遺構のものと考えられる。

#### 8) 包含層出土遺物

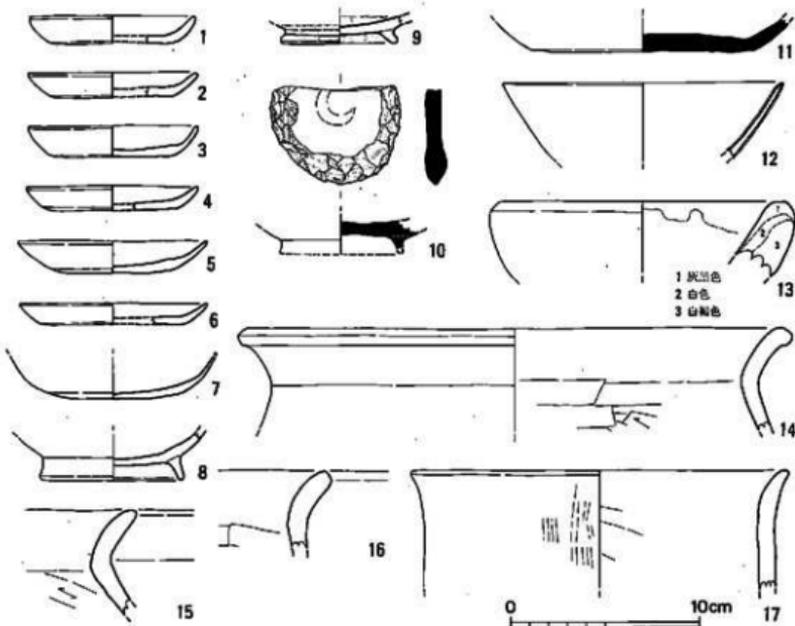
ここでは、下段テラス面の整地層である暗褐色包含層出土遺物と、正確な層位はおさえきれなかったが、遺構検出時等に出土した下段包含層出土遺物、さらに各遺構・包含層から出土した石器・石製品・鉄器・土製品等をまとめて報告しておきたい。

#### 下段暗褐色包含層出土土器(第43図)

土師器(1～8・14～17)1～6は底部ヘラ切の小皿で、1～4が口径8.7～9cm、器高1.3～1.6cmで11C後半～12C中頃。5・6は口径10cm、器高1.1～1.7cmで、5は11C中頃前後の古い様相をみせる。7は底部ヘラ切で細砂幾らか含む。8は胎土精良で高台径7.7cm。14は復原口径29.4cmで細砂多く含む。内面はヘラ削りで他は磨減。15は細砂多く含む胴内面はヘラ削り。16・17は胴部が張らない器形で、17の外面は縦ハケ、内面は削りの上を丁寧にナデ滑している。粗砂僅かに含む。

黒色土器(9)径6.2cmの端部が丸く外方へ踏んばる高台を付け、内面は磨いている。胎土精良で全面黒色。12C中頃とした第1号溝出土の黒色土器Bよりも古い形態である。

須恵器(10・11)10は高台付小型壺の底部片を利用した播器状品と考えられる。上面(内面)



第43図 I区下段暗褐色包含層出土土器実測図 (1/3)

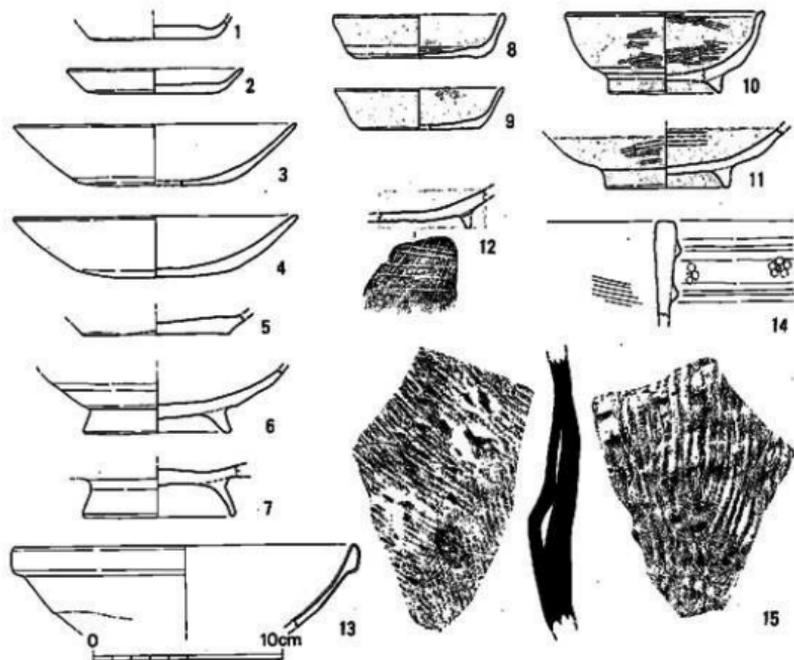
縁辺を刃部調整し、外面側は高台を打ち欠くのみで調整は無い。細砂僅かに含み、焼成堅緻で内面は淡青灰色、外面は濃青灰色をなす。何らかの工具として用いられたものであろう。11は底部回転へら削りで、細砂幾らか含む。焼成堅緻で、体部内外面は回転ナデ。

白磁 (12) 口径14.8cmの椀で、胎土は密で白色をなす。釉は光沢があり乳白色をなす。

取瓶 (13) 口縁外径で16cmとなる厚手品で、胎土に細砂多く含む。内面は火熱による黒変がみられ、外面は白褐色をなす。

#### 下段包含層出土遺物 (第44・45図)

土師器 (1~7・16~18) 1は底部糸切かと思われる。2は口径9.2cm、器高1.3cmで底部はへら切後ナデ。3・4は底部へら切で、いずれも口径15cm、器高3.2cm。3の外面下端はへら削り。4の内面はかなり平滑で磨きがかかっているようだ。5は底径7.8cmの糸切底杯。6・7は長い高台が付くが、7は托となろう。16は口径41.8cmの大きめの甕で、内面は丁寧なナデ、外

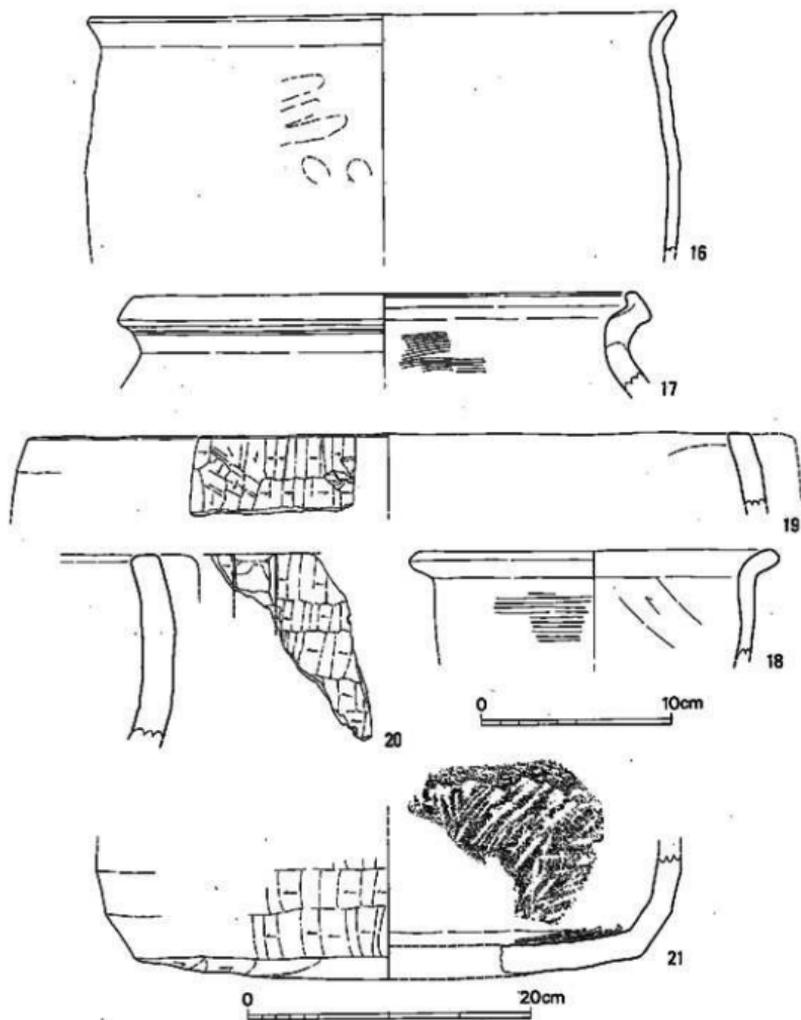


第44図 I区下段包含層出土遺物実測図(その1)(1/3)

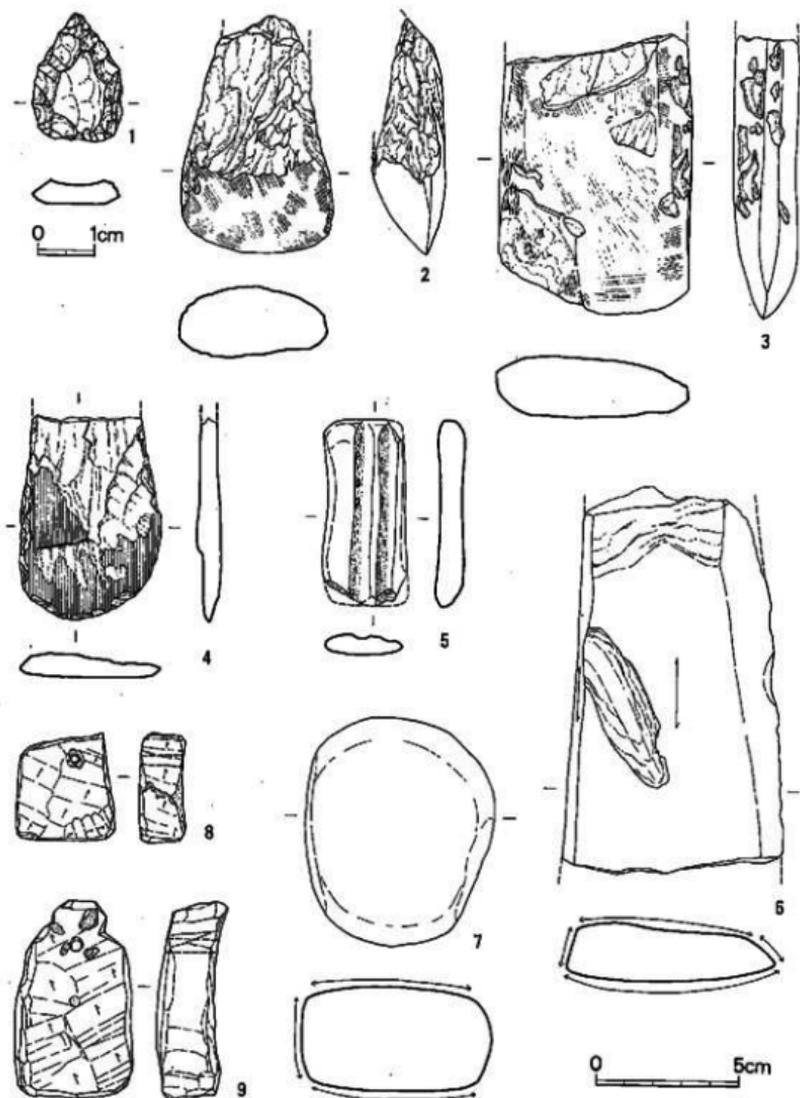
面は縦ナデで凹凸多し。粗砂多く含む。17は明るい肌色をなす焼成土師質土器。復原口径37.8cmで胎土精良。口縁内外面横ナデ、頸部内面横ハケ、外面はナデ。口縁内面には赤い化粧土がわずかに残る。中世陶器の生焼け品でもある。18は口径19.6cmの小甕で、外面は粗い横ハケ、内面はへら削り。

黒色土器(8-12) 8は口径9.2cm、器高2.3cmのへら切底で、胎土精良。体部内外面横ナデ、外面下端はへら削り、内底面はナデツケ。9は口径9cm、器高2.2cmの糸切底で、内外黒色であるが焼成瓦質であり、瓦器の一種であろう。胎土精良で体部内外面横ナデ、内底面はナデツケ。油煙がこびりつき、灯火器として用いられている。10は口径10.6cm、器高4.3cm、高台径5.8cmの小型甕。内外へら磨きで胎土精良。11は高台径6.6cmで内外へら磨きで胎土精良。12は底外面に格子状の沈線文を施している。内面は磨きであろう。

白磁(13)口径18.4cmの玉縁甕で、外面下半は露胎となる。胎土は密で白灰色をなし、釉



第45図 I区下段包含層出土遺物実測図(その2)(1/4,18のみ1/3)



第46図 I区出土石器・石製品実測図 (1/2, 1のみ実大)

は僅かにオリーブがかった灰白色をなす。

火 舎 (14) 口縁外面に2条の凸帯を付け、その間に梅鉢文の印文を施す。内面には横ハケを施している。細砂粒を多く含み、焼成瓦質。

須恵器 (15) 焼きぶくらみのひどい變調部片で、外面は縦位の粗い平行条線状敲き、内面は斜位の細身の平行条線状敲きを施す。細砂幾らか含み、焼成堅緻。

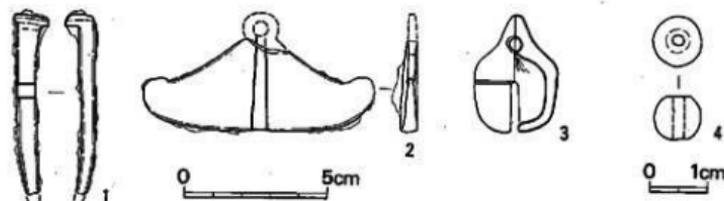
石 鍋 (19-21) 19は口径51.2cmに復原できる滑石製石鍋片の、両側面を縦方向に削った再加工品。下辺面は割れ面のままで、図のドット部分は縦位把手部分を削り取っている。内面は石鍋のままで、雑な研磨で縦位の雑な擦痕が多くみられる。外面は煤がこびりつく。20は口縁付近破片であるが、割れ部の2カ所に穿孔痕がみられる。破損した石鍋を割って再利用しようとしたものであろう。21は底部片で、内底面には楕形的な線刻が施され、底外面は回転方向への削りを残す。体部外面には煤が付着する。

打製石鏃 (第46図1) I区下段表採品で、長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.5g。安山岩製で極めて風化しており、横長不定形削片を使用。裏面の中央に大きく主要剥離面を残し、縁辺のみの調整を施す。

石 斧 (第46図2-4) 2は第1号工房跡前面のP2出土品で、明らかに磨製石斧であるが、基部側欠損後、両側面を主に敲打調整して細くし、研磨も雑にやり直し、裏面基部まで施している。それがさらに欠損したもの。明灰色の硬質の変成岩の石材で、明らかに片刃になっている。現存長8.3cm、刃部幅5.3cm、重量127g。3は濃灰色の頁岩質石材で、短冊形に近い。刃部の半分が欠損した後も再加工・研磨して使用している。研磨は全体に丁寧で、基部寄りに僅かに敲打痕が残る。刃がやや片寄っており、現存長9.9cm、幅6.7cm、重さ232g。右側面は面取り状に平坦面をなす。I区下段表採品。4は下段段落下層黒褐色包含層出土品で、硬質の緑色片岩製偏平粗製打製石斧。表裏ともに刃部側寄りがかなり研磨されている。現存長7.2cm、幅5cm、厚さ0.8cm、重さ40g。これら石斧類はいずれも縄文後・晩期のもので、この谷奥の地がキャンブ地になったことがある事を物語っている。

砥石・磨石 (第46図5-7) 5はI区下段暗褐色包含層出土品で、凹線部が2本ある条線状砥石。灰白色の片麻岩製で、表裏とも中央がへこんでおり通常の砥石を転用したもの。長さ6.6cm、最大幅3cm、厚さ1cm、重さ24g。6は下段段落下層黒褐色包含層出土品で、灰白色の片麻岩製の板状砥石。裏面は全体が凸面をなし、磨石的使用が考えられる。表面は縦方向に凹状をなす。現存長13.7cm、最大幅7.7cm、厚さ2cm、重さ310g。7は下段包含層出土品で、角閃石の目立つ凝灰岩質の河原石の表裏を良く使っている。側面のうち左側面だけは平坦面をなす程、良く使用されている。長さ8.1cm、幅6.7cm、厚さ3.6cm、重さ303.3g。

滑石製品 (第46図8・9) 8は下段包含層出土品で、内外面ともに石鍋時の面のままで、側面を丁寧に加工し、穿孔を施したもの。長さ3.8cm、幅3.4cm、厚さ1.6cm、重さ37.2g。9は石



第47図 I区出土鉄器・土鈴・玉実測図 (1/2, 4のみ実大)

鍋胴部上半片を使用したもので、I区下段出土品。全体に削りは軸であるが、内面もかなり削っている。頭部を意図的に削り出しており、その直下に直径4mmの円孔を穿つ。長さ6.9cm、幅4.2cm、厚さ1.8cm、重さ101.1g。これらはいずれも小型で丁寧な穿孔などから、9の頭部削り出しの典型的形状と併せて、権としての性格を充分有していると考えられる。

鉄器(第47図1・2) 1はI区下段建物面中央付近のP27出土品で、長さ6.5cm、頭部幅1.3cmの角釘。2は下段包含層出土品で、左右対称に雲形になっており、中央上端が欠損しているが、そこに円孔部があったと思われる。全体に上方へと薄くなっており、風招ではないかと思われる。現存長3.2cm、幅8.1cm、厚さ6mmとなる。風招であるとなると、この建物は寺院関連の性格も考えてよさそうである。

土鈴(第47図3) 下段包含層出土品で、半欠品。高さ4.1cm、直径2.9cmで、外面中位に1条の沈線を巡らす。内面上端にはシボリ痕があり、他内外面はナデている。胎土精良で焼成不良、濃灰色をなす。

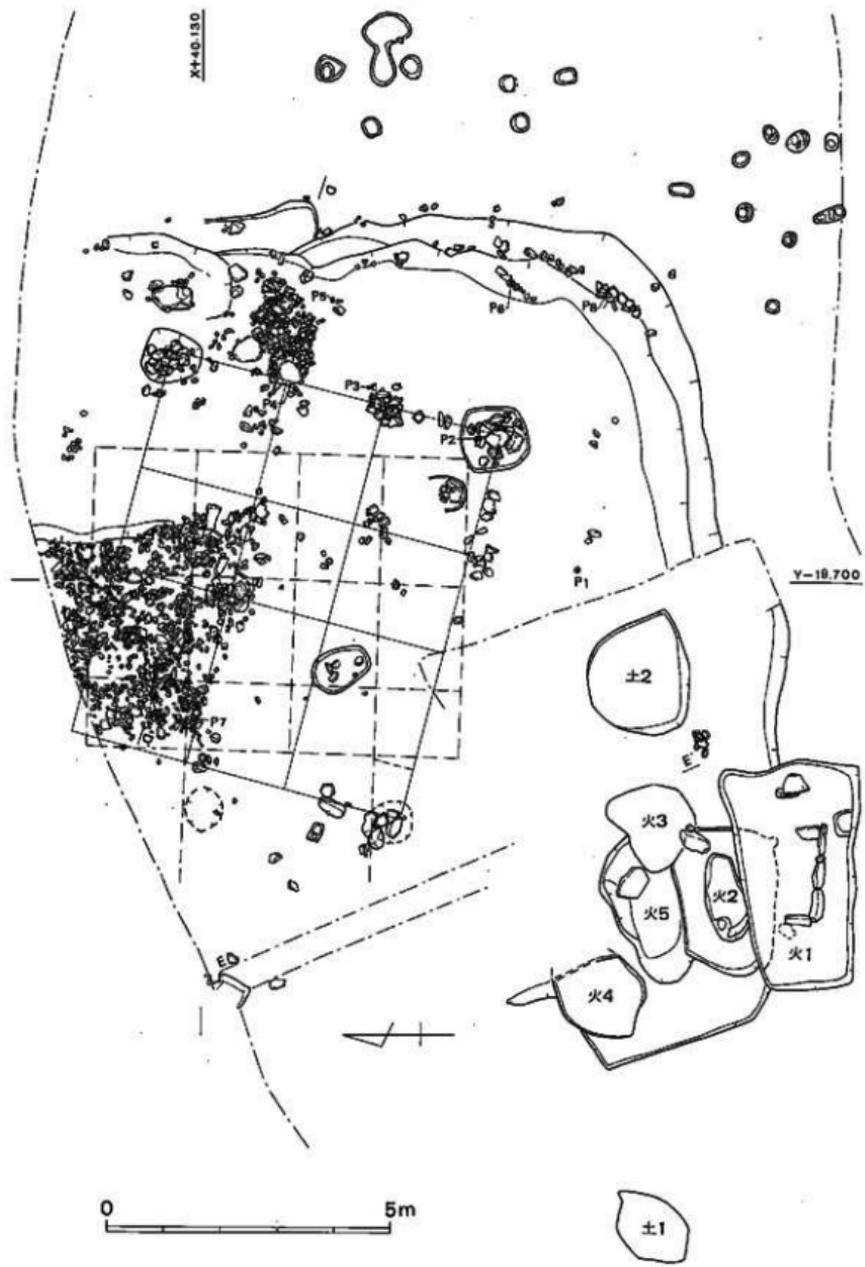
水晶玉(第47図4) 中段の第1号工房跡の西端付近のP1出土品で、直径8mm、高さ7mmで重さ0.8g。透明な水晶製で、上下の孔周辺を水平に擦っている。

### 3. 江栗II区の調査

II区はI区と谷を挟んだ南側の北斜面に位置し、狭いテラス面2カ所を調査した。うち、目ばしい遺構を確認できなかった西側の調査区が84.1㎡、東側のII区調査の主体となった建物部分の調査区が404.5㎡となる。以下、西側部分調査区については時期の判るような遺構・遺物がみられなかったので記述を省略する。

II区では、礎石建物1棟、その下から獨立柱建物1棟、これらの建物の南西側に集中して火葬墓5基、土葬2基を検出した。時期的には、北側のI区が平安時代の中で取まる各遺構であったのに対し、このII区ではすべてそれ以降の鎌倉～戦国期にかけてのもので、全く両者は時





第49图 II区礎石建物面(上层)周边实测图 (1/100)

期を異にしている。

### 1) 礎石建物跡

当初重機で表土剥ぎを行い、遺構検出をした際に、このⅡ区の東端と南辺、西半部は地山面が露出していたが、中央部付近が、土器は見えるけれども、遺構の存在が判然としなかった。そこで、この斜面を包含層と考え、テラス状地山整形がなされていると予想して、この部分を掘り下げた。その結果、大小の石組みが現れ、その周囲はカギ形に斜面をカットしている事が判明した。

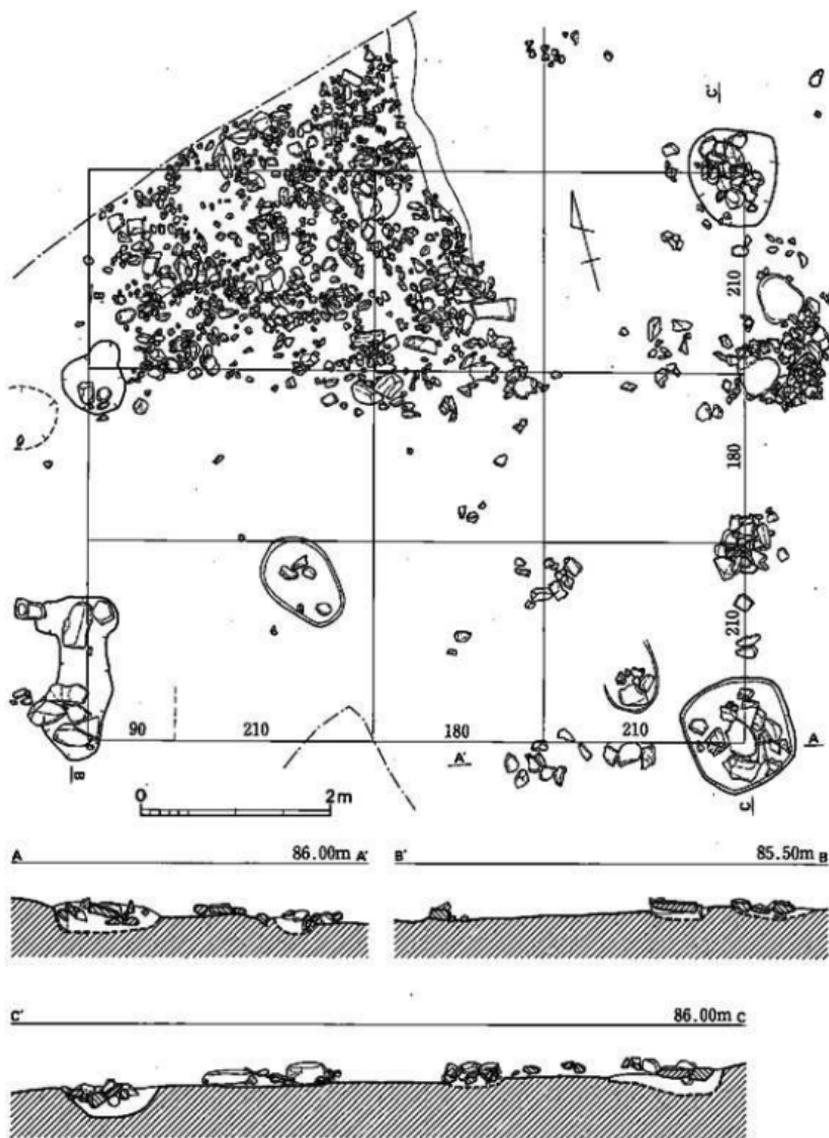
礎石建物は、原位置を保っている礎石は2カ所しか検出できなかったが、根石の集中部分の位置関係も併せて、3×3間総柱の建物を復原できた。主軸をN77Wにとる東西にやや長い建物であるが、西辺を半間分東に引っ込めると正方形建物となり、西を正面とした片流れ屋根の建物と考えることもできる。柱間は東西・南北筋ともに中央柱間のみが6尺で、両端が7尺となる。まだ北側へ延びる可能性も捨てきれないが、現農道によって削平された部分もあり、確認できなかった。礎石は東辺列に径40cm程の平石が2カ所原位置を保っていたが、他は根石の集石のみで、それすら残存していない部位もあった。また、東北側に礎石となりそうな大きめの石が2個発見されたが、動かされたものか、或は踏石等この建物に関連する配石かと思われる。なお、北西側に広く石の集中する部分が見られるが、目的を持った数石的な状況ではなく、この建物整地作業における斜面下位側の整地の一環と考えられる。

### 出土遺物 (第52・53図)

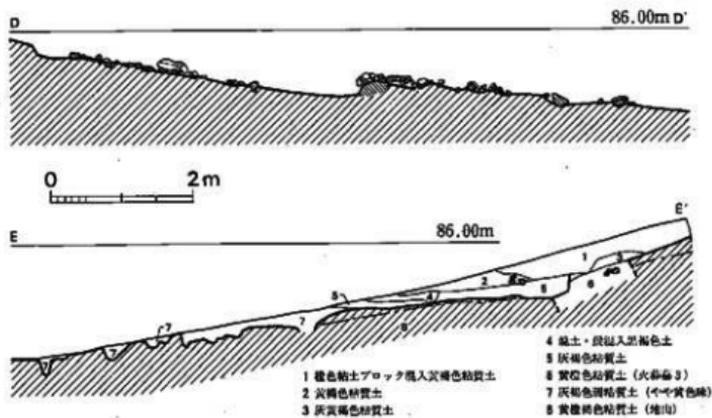
土師器 (第52図1～6) 1は礎石建物遺構面より5cm浮いて出土したもので、口径7.8cm、器高2.1cm、底径5cmの糸切底特小皿。細砂多く含む、体部上半内外面全面に油煙がこびりつく。2は整地層中出土品で、口径8.8cm、器高1.2cm。胎土精良で底部糸切であろう。3は根石レベル出土品で、口径8.3cm、器高1.1cm。糸切底で胎土精良。4は南東隅礎石の根石間出土のP2で、口径12.8cm、器高3.5cm、底径10.1cm。糸切底で粗砂僅かに含む。5・6も4と同じ根石間出土のP2で、細砂多く含む。5は口径13.6cm、6は口径14cm、器高3cm、底径10cmで糸切底。6の内底面は一部が上から押えられている。

瓦器 (第52図7・8) 7は整地層出土品で、口径16.8cm。胎土精良で内面は暗灰色、外面は灰白～灰黒色をなす。内外磨滅。8は南東隅礎石周辺出土品で、焼成瓦質の筒状品で、胎土精良。内面は灰白色、外面は灰白～灰黒色をなす。外面は平滑で丁寧にナデており、内面はやや雑な横ナデ、下端はハケが残る。花瓶状器形の脚部になるものか。

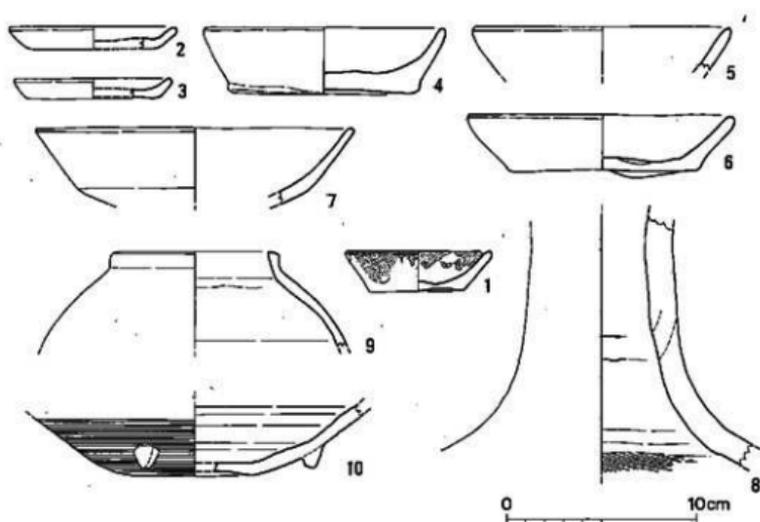
陶器 (第52図9・10) 建物東辺の北から2番目の礎石付近から出土したもの (10は図中のP4)で、同一個体。口径9cmで短い直口をなす茶釜状器種となるか。9の外面と内面頸部直下は光沢のあるやや緑がかった鉛釉がかり、口唇上面から直口部内面は掻き取っている。胴部内面は褐色釉がかかるが薄く光沢は無く黄白褐色をなす。10の外面は無釉で茶褐色をなし、カ



第50图 II区礎石建物実測图 (1/60)

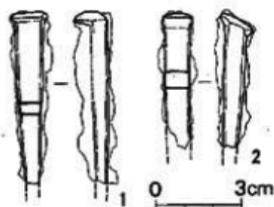


第51図 II区礎石建物面及び南北トレンチ断面実測図 (1/80)



第52図 II区礎石建物整地層出土遺物実測図 (1/3)

キ目を施す。僅かに上げ底状となる底外面はナデ。短い脚状の突起が付けられているが底まで届かない。10の内面は回転ナデで、内底面はナデツケ状。胎土はさっくりとしており、赤茶色

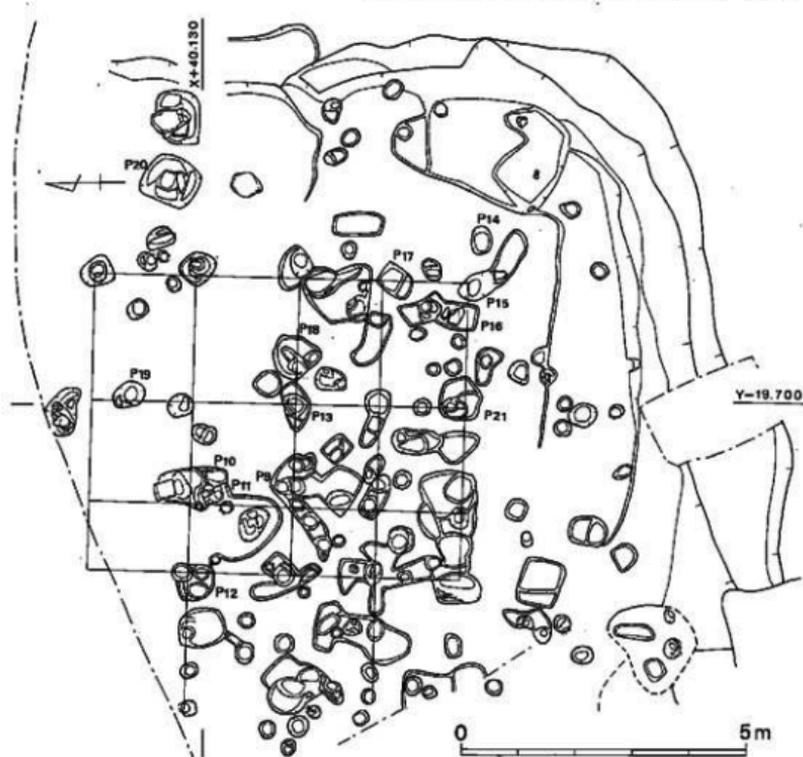


第53図 II区出土鉄釘実測図 (1/2)

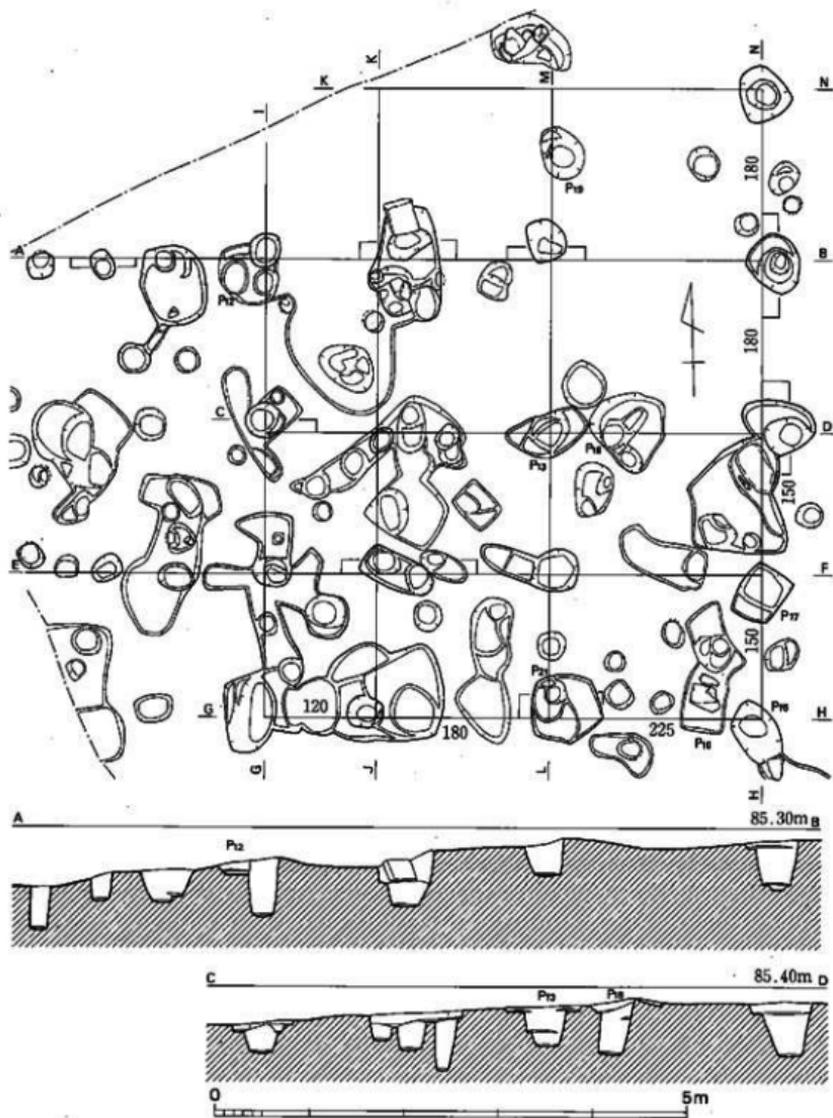
をなす。10の胴部外面には煤がこびりつく。瀬戸系軟質陶器か。

鉄釘(第53図1)礎石建物遺構面より5cm浮いた南西隅礎石付近出土品で、頭部を打ち曲げた角釘で、錆ふくらみがひどい。現存長6cm、頭部幅1.3cm。

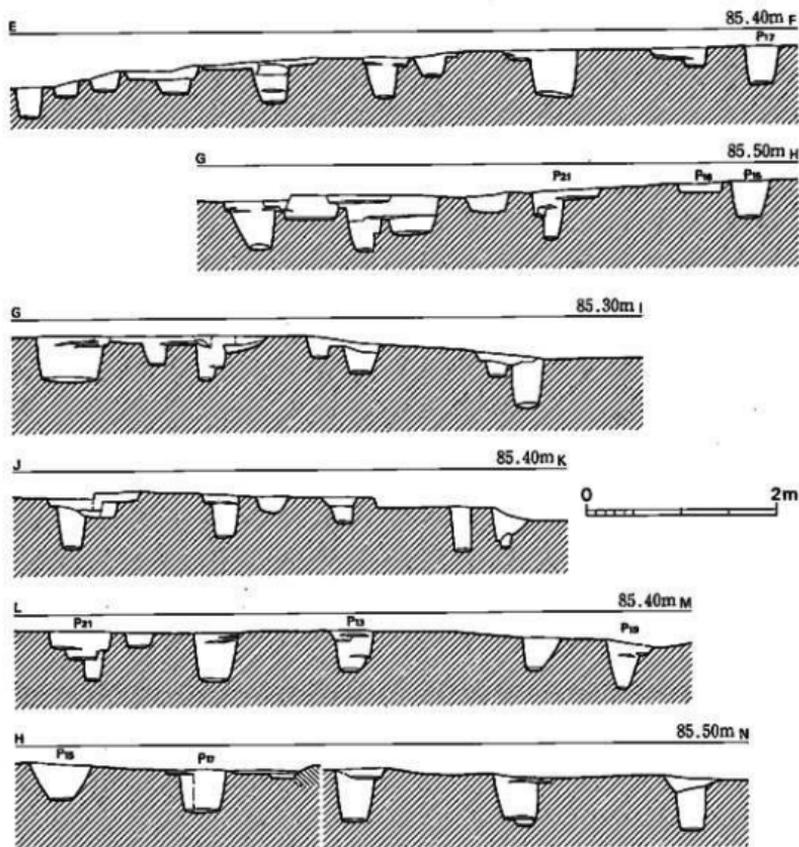
銅銭(図版23)整地層中から洪武通寶1点が出土した。ボロボロで図示できないが、直径約2.3cm、孔径約0.7cm。他にP20から寛永通寶2点が出土した。後世の上からの掘り込みが重複したものであろう。1点は



第54図 II区掘立柱建物面(下層)周辺実測図 (1/100)



第55図 II区掘立柱建物実測図(その1) (1/60)

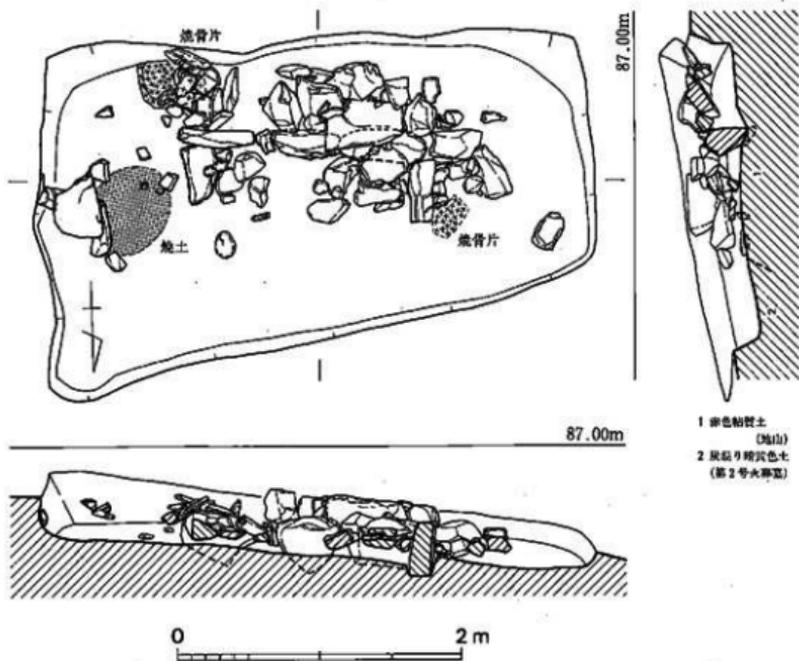


第56図 II区掘立柱建物実測図 (その2) (1/60)

「貝字」類で直径2.42cm、孔径0.55cm、2.9g。他1点は「ス字」類で径2.2cm、孔径0.65cm、1.8g。

以上の礎石建物に関する出土遺物は、土師器小皿が13C中～14C中頃の幅に収まる類で、4・6の土師杯も14C中頃までの類。これらに対して、1は法量から大宰府SD1805 (1501年) 出土品に類似し、9・10もこれに近い時期のものであろう。よって、この礎石建物の下限は16C初頭前後と考えられ、13C代の遺物はこの下の掘立柱建物に伴うものと考えられる。





第58図 II区1号火葬墓実測図 (1/40)

全体としては顕著ではないが、石の上端が焼けた部分がかかなりみられる。石は片岩系の塊石で、棺台として配されたものであろう。少なくとも160cm以上の木棺が置かれて焼かれた火葬所の性格が強い。

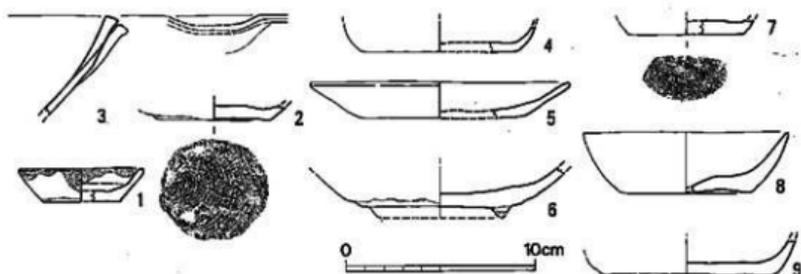
#### 出土遺物 (第59図1-3)

土師器 (1・2) 1は口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.1cmの糸切底特小皿。体部上半内外面に油煙がこびりつく。胎土精良で茶褐色をなす。2は底径6cmの糸切底杯で胎土精良。

埴 鉢 (3) 焼成瓦質であるが生焼け的で外面は土師質。内外面ともに丁寧なナデで、胎土精良。全体に薄手品。

以上の出土遺物のうち1は、口径が前出の礎石建物面出土品より更に小さくなっており、後出的である。前原市奈良尾遺跡の成果等も合わせると16C中頃前後と考えられる。

なお、ここの炭片をC14年代測定に出したが、詳細は後章に報告書を掲載するが、 $340 \pm 70$ yB.



第59図 II区1(1~3)・4(4~6)・5(7~9)号火葬墓出土土器実測図(1/3)

P. (Libbyの半減期の値で $330 \pm 70$ yB. P.)の測定結果が出た。これは西暦では $1620 \pm 70$ 年(1610 $\pm$ 70年)となり、若干の考古学的私見との隔たりはあるものの、一応評価できる値と言えよう。

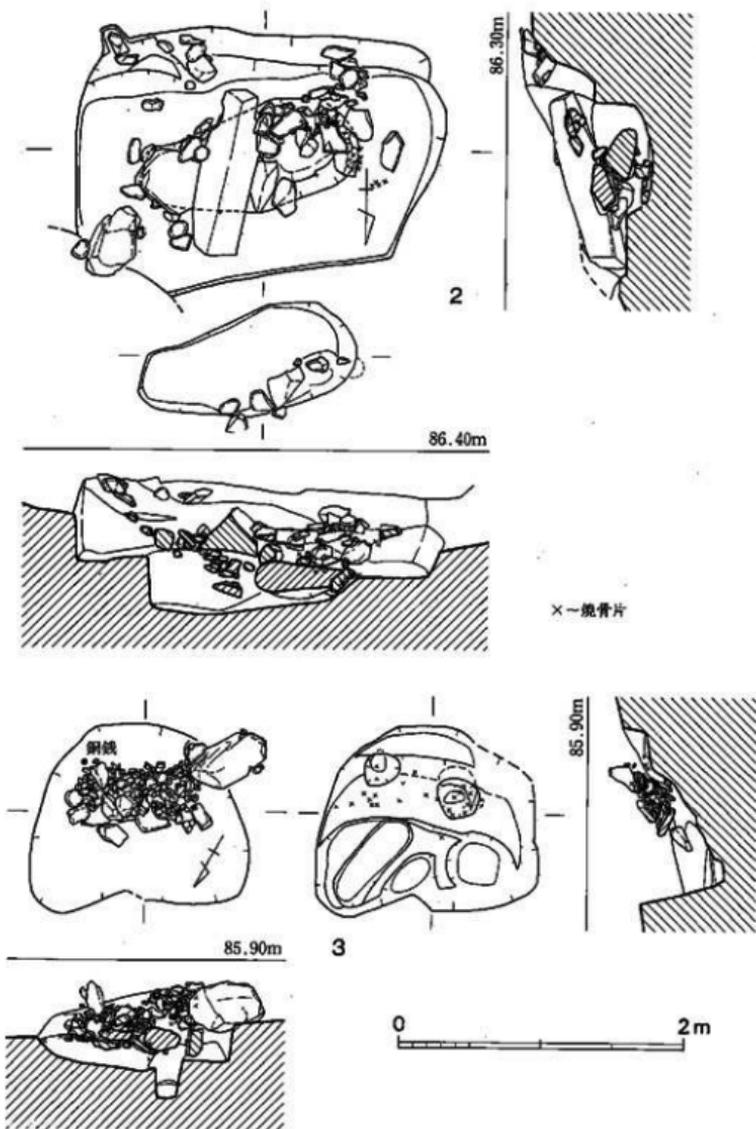
#### 第2号火葬墓(図版10、第60図)

南側を第1号火葬墓、北東隅を第3号火葬墓に切られ、北側で第5号火葬墓を切る。東西に長軸をとる $2.6 \times 1.8$ mの略長方形土壇を掘り、その中央に楕円形の $1.56 \times 0.72$ mの穴を掘った2段掘りの形状をなす。中央壇の中やその上面に大小の石をかぶせているが、その外観はあたかも石蓋土壇墓のそれと酷似する。焼骨片は中央壇内の西端部分とその外方の北西側とに集中してみられ、必ずしも中央壇内にきちんと納められた状況ではない。外方のかなり埋土上方にもみられるという事は、火葬所と考えることもできるが、第1号火葬墓のような焼土や炭、石が焼けている状況がここでは全く見られない事から、やはり火葬骨を持ってきてこの壇の中に入れて大小の石でかぶせたものと考えられる。また、大きな骨がみられない事から、火葬所で取り上げた焼骨の残りを集めてこの壇に埋めたと考えるのも可能であろう。副葬品は出土しなかった。

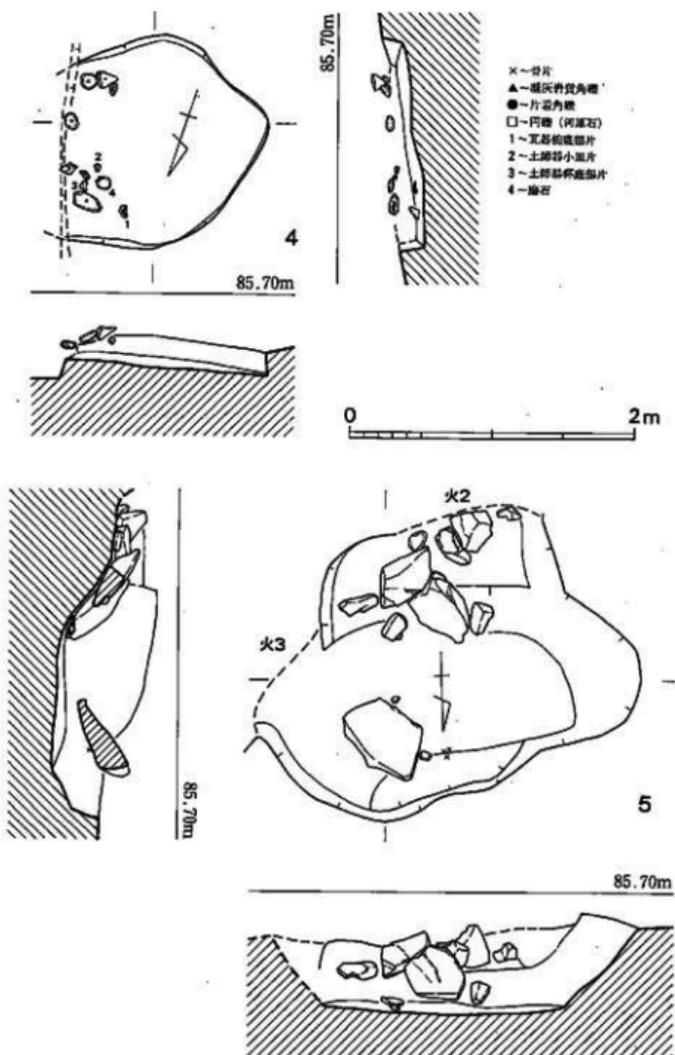
#### 第3号火葬墓(図版11、第60図)

西半で第2・5号火葬墓を切る。 $1.54 \times 1.34$ mの不整形壇を掘り、その中に片岩や石英質の小さな角礫及び大きい塊石、河原石の4~5cm大の扁平なもの、その大きめの石等の各種の石を厚く投入している。焼骨小片はそれらの石の下や間に挟まって発見された。石や壁が焼けた痕跡は無い。銅銭1枚が東隅で出土した。これらをまとめて考えると、拾い集めてきた小石とともに焼骨片を儀礼を行いながら埋めていったと考える他はないようである。

#### 出土遺物(図版23)



第60图 II区2·3号火葬墓尖测图 (1/40)



第61图 II区4·5号火葬墓平面图 (1/40)

銅鏡 残存状況が良くない為、図示できないが、直径3.4cm、孔径0.85cmの大きな「崇寧通寶」である。縁は線状をなす。宋の徽宗1102年初鑄。

#### 第4号火葬墓（図版12、第61図）

火葬墓群の最も北端に位置する。東側を段落によって削られている。1.5×1.4(以上)mの不整楕円形墳内に少量の小焼骨片とともに、小角礫・河原石・瓦器類・土師器・磨石等が出土したものである。具体的な葬法については明確でない。

#### 出土遺物（第59図4～6）

土師器（4・5）4は底径8.2cmの糸切底杯で、11cm弱の口径となりそうだ。胎土精良で淡褐色をなす。5は口径13.8cm、器高1.9cmの浅い皿状の器形で、内外磨滅して底面調整は不明。胎土精良で内外面肌色。

瓦器（6）胎土精良で内面は淡橙褐色、外面は灰褐色、断面は黒色をなす。高台径6.7cm程となりそうで、内面は磨いているかと思われる。

以上の出土土器のうち、5は平安前半期のものの混入品、6も4と時的に符合するものではないため、小径化した4がこの遺構の時期を示すと考えられる。よって第1号火葬墓と近似した16C中頃前後のものとしておきたい。

#### 第5号火葬墓（図版12・13、第61図）

東端を第3号火葬墓に切られ、南辺側を第2号火葬墓に切られる。東西に長い2.7×2mの不整楕円形墳を掘り、片岩系の大石が南北両側から沈み込んでいる状況である。焼骨片は全体に僅かに散在するのみ。壁や石は焼けていない。第2・3号火葬墓と似た状況である。埋土中から若干の土師器片が出土した。

#### 出土遺物（第59図7～9）

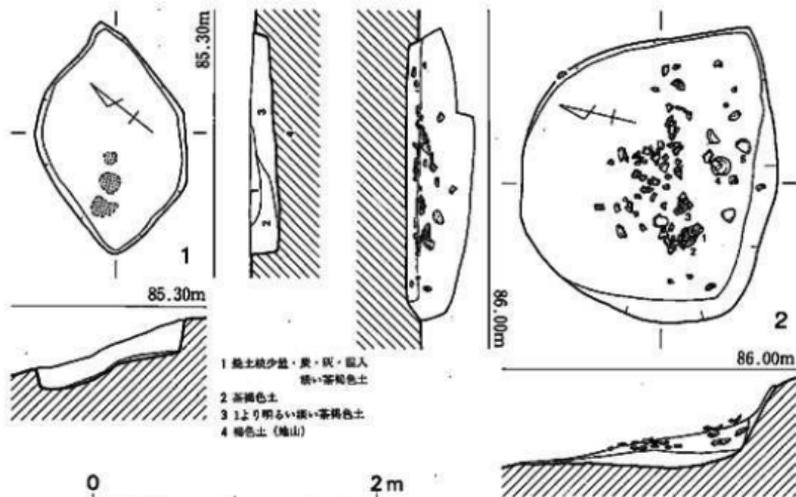
土師器（7～9）7は底径6.2cmで胎土精良。糸切底。8は口径10.9cm、器高3.2cm、底径7cmの糸切底類。粗・細砂僅かに含む。9は底径8.6cmで胎土精良。糸切底の杯で口径12cm弱となろう。焼成不良で内外ともに灰黒褐色をなす。

これらの土器のうち、9は古い様相を持ち、7・8がこの遺構の時期を示すと思われ、15C後半～16C初に属するものであろう。

また、以上の火葬墓群は15C後半～16C初頃のものとして分けられたが、これらは下限を16C中頃前後と考える礎石建物に密接に関連する遺構であろう。

## 4) II区土塚

### 第1号土塚（図版13、第62図）



第62図 II区1・2号土坑実測図 (1/40)

火葬墓群の西側の、II区の主要遺構群から離れた位置に存在する。斜面に1.63×1.05mの不整形円形坑を掘り、焼土・炭・灰等が認められたものである。西半分の上層に焼土粒少量と炭・灰を混入した淡い茶褐色土がかぶっており、その性格・時期は不明。

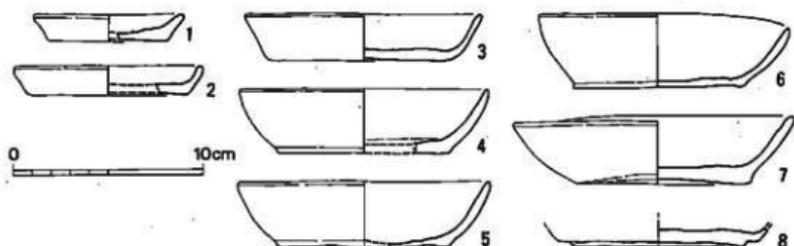
#### 第2号土坑 (図版14、第62図)

火葬墓群の東側にて検出された不整形土坑で、段落斜面際に掘り込まれている。埋土に焼土・炭を幾らか含む。2.1×1.8m。土師器片が多量出土し、廃棄坑的である。

#### 出土遺物 (第63図)

土師器 (1～8) 1は口径8cm、器高1.4cm、底径6.4cmの厚手品で、胎土精良。糸切底で箕子状圧痕がみられ、内外面の一部に煤が付いており灯明皿と考えられる。2は口径10cm、器高1.5cm、底径8.2cmの大ぶり品。底部糸切で胎土精良。3は口径12.6cm、器高2.4cm、底径9.5cmで胎土精良。糸切底の完形品。4は口径13.2cm、器高3.4cm、底径9.2cmの糸切底。胎土精良で黄褐色をなす。5は口径13.4cm、器高3.5cm、底径9cmの糸切底。6は口縁が焼き歪んでいるが、平均口径13.6cm、器高3.8cm、底径9cmの糸切底で箕子状圧痕がある。7は口径14.8cm、器高3.4cm、底径9cmの糸切底。8は底径9cmの糸切底で箕子状圧痕がある。

以上の土師器は、杯類の4～7が口径13.2～14.8cm、器高3.4～3.8cmと揃っており、13C前



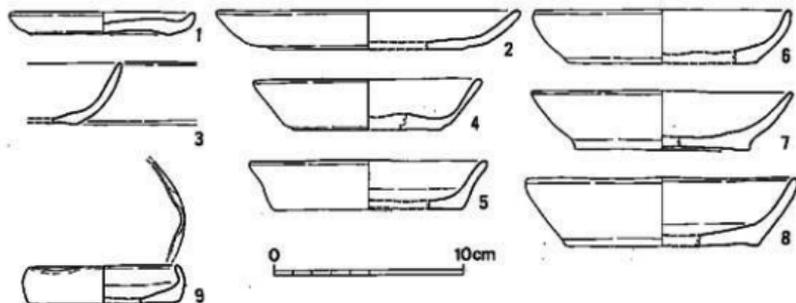
第63図 II区2号土壌出土土器実測図 (1/3)

半代を中心とするものと思われる。下層の独立柱建物の時期とほぼ符合するものであり、関連ある遺構と考えてよい。

#### 5) II区包含層出土遺物

斜面をカットして造成されたII区の礎石建物跡遺構面まで掘り下げる間に出土した段落包含層の遺物について報告しておく。

土師器(第64図) 1は口径9.8cm、器高1.2cmの大きいもので、糸切底で胎土精良。2は復原口径16.2cm、器高2.1cmで径10.1cmの糸切底。大口徑で浅い異類。3は器高3.3cmの杯。底部は糸切であろう。4は口径12.2cm、器高2.7cm、底径7.9cm。胎土精良で底部は糸切であろう。5は口径12.6cm、器高2.6cm、底径10cmの糸切底類杯。6は口径13.6cm、器高2.8cm、底径10cmで細砂幾らか含む。焼成良好で糸切底。7は口径13.8cm、器高3.1cm、底径9.2cmの糸切底類で板目圧痕がみられる。胎土精良。8は口径14.4cm、器高3.6cm、底径10cmの糸切底類。やや部厚く胎土精良。9は口径7.7cm、器高2cmで底部糸切の異類。内湾する口縁の一部が片口状に変形さ

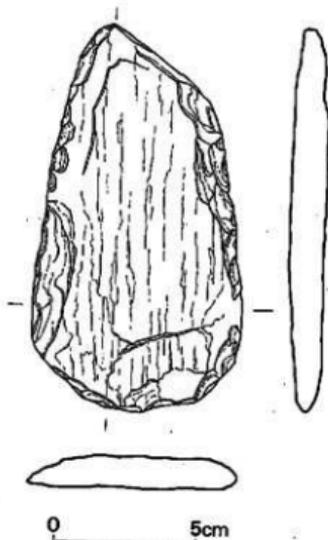


第64図 II区段落包含層出土土器実測図 (1/3)

せられている。胎土精良で質子状圧痕がみられる。

石 斧 (第65図) 硬質の緑色片岩製偏平打製石斧である。下縁刃部辺に使用によると思われる磨耗痕はみられるが、研磨面や顕著な使用擦痕はみられない。長さ13.6cm、最大幅7.4cm、厚さ1.3cm、重さ198g。

以上の出土遺物は、土師器杯が口径13cm前後のものが多く、大旨13C中頃を中心とする時期のものと思われる。これは下層の獨立柱建物の時期と略符合するものであり、掘立柱建物が存在した時期にこの上の段にも生活遺構があり、その遺物が流れ込んだものと推定できる。



#### 4. おわりに

##### 1) C14年代測定について

当教育委員会では、横断面関係発掘調査が一段落した頃に、横断面調査各地点で出土した炭化物等を取りまとめて、社団法人日本アイソトープ協会に年代測定の依頼をした。その結果を以下に掲載しておきたい。原文そのままであるが、当遺跡以外の不必要な部分については省略している。

第65図 II区出土打製石斧実測図 (1/2)

#### 年代測定結果報告書

昭和63年3月30日に受取りましたC-14試料26個の測定結果ができましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-5381	KOF 9 No18	340±70yB.P. (330±70yB.P.)

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとずいて計算され、

西暦1950年よりさかのぼる年数 (years B.P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は、約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は、約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は、必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

以上の報告は、本文中に既述したように、江栗遺跡Ⅱ区第1号火葬墓出土炭を資料としたものであり、その結果は、筆者の考えていた考古学年代と略近いものである。(本文72頁参照)

## 2) 江栗遺跡の変遷

本遺跡は谷のつきあたりに位置し、その谷を挟んで南北両斜面にあるが、各々時代が全く異なっている。北側のⅠ区が9C前半～12C中頃の間に工房跡、屋敷地が営まれたのに対し、南側のⅡ区では、13C～16C中頃の間に小規模特殊建物と火葬墓群が形成されている。これらの事情について各遺構毎に若干の検討を加えてみたい。便宜上、年代的に追ってみよう。

9C前半代 (Ⅰ区第1号工房跡・Ⅰ区第1号土壇) 第1号工房跡は円形の掘り込みによる当時期のものとしては異類の形状をなす特殊遺構である。この種の遺構は福岡県二丈町広田遺跡Ⅲ区2・6・7号住居跡とされたものが同類と考えられる。「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」福岡県教育委員会 1982) 時期的には広田遺跡例が若干古く8C後半～9C初頭の間とみられるが、江栗遺跡例同様に鍛冶関連とみられ、砂鉄貯蔵穴や鍛冶炉が発見されており、極めて近い性格の遺構である。更に、広田遺跡では方形竪穴ではあるが、第1・3・4号住居跡のように壁内側に幅広い溝状遺構を掘り込んだものが多くあり、構造上江栗遺跡の第1・2号工房跡と極めて密接な関係があると考えられる。この竪穴住居跡の周壁溝より幅のやや広い溝を巡らす工房的遺構は、弥生時代の青銅器工房跡として著名な春日市須玖坂本遺跡を始めとし、糟屋郡志免町松ヶ上遺跡の5C代滑石工房跡、糟屋郡須恵町牛ガ熊遺跡の6C代滑石工房跡など各時代にわたっての伝統が生きていたのかもしれない。ともあれ、この江栗Ⅰ区第1号工房跡の存在価値は極めて重要と言えよう。同じ9C前半代を中心とする遺構として、隣接する第1号土壇がある。これは、第1号工房跡と密接に関連した一連の施設であり、時期的に9C後半～10C前半代の遺物も含むという点でも全く両者は共通している。この他に、出土遺物が少なく時期を確定できないが、カギ形の溝を持つ第2号工房跡もほぼ近似する時

期のものと考えられる。

10C代 この時期には、前述のように第1号工房跡・第1号土壌が10C前半代まで継続していた可能性がある。そして、10C後半代になると、下段のテラス面に何らかの生活遺構が営まれたものと思われる。これは、下段段落の最下層から10C後半～11C前半代の土器類が出土していることから推測できる。ただし、下段段落最下層出土遺物の主体は11C前半～中頃の時期のもので、10C代に大規模な遺構が在ったものとは考えられない。

11C代 I区の下段段落最下層の主体が前述の如く11C前半～中頃である。この段落自体が本文中で検討したように、テラス面に登るための道そのものであり、人の手が加わった段階状の形態をなしており、明らかに、その上方に何らかの生活遺構があったことを示している。ただし、そこにはこの時期の遺構はみられず、この後の12C中頃に下段テラスが造成された際に削平されてしまったものと考えられる。

12C中頃 I区最後の時期であるが、下段テラスの建物面にコの字状に溝を巡らした屋敷が営まれた盛期である。この建物の規模・性格については確定的な事は言えないが、谷奥の人里離れた地である事や、斜面を大きく削り出してしっかりしたテラス面を造成している事などからみると、単なる民家ではないと考えられる。出土遺物も白磁類や石鍋、櫛など並以上のものがあり、中でも鉄製風摺は、ひょっとしたら寺院的な性格を示すものかもしれない。とすると、平安前半期に工房跡を中心とする鍛冶生産の地であったものが、平安末期には静謐な宗教の場になっていたのかもしれない。そして、この時期を最後に人跡が途絶え、のち煙や柿畑となって今日に至ったわけである。

13C代 この時期になってはじめて谷を挟んで南側の斜面にⅡ区掘立柱建物が削られる。この建物は正方形に近い特異なもので、斜面を削り込んで平坦地を作るなど、丁寧な造作がみられ、やはり、山間の小寺院的な性格が考えられる。この建物の脇に検出されたⅡ区第2号土壌は13C前半のもので、この建物に伴うものであろう。なお、この斜面の礎石建物面より上の包含層中から、この時期の土器器類が出土しており、この発掘区より更に上位の斜面にも同時期の遺構が広がっていたことも推定される。

15～16C代 前記掘立柱建物が廃絶した後、同じ場所に礎石建物が建築される。正確な年代は良くわからないが、整地層中などから16C初頭前後を下段とする遺物がみられる事や、南西側に集中する火葬墓が15C後半～16C中頃の間に営まれている事などから考えて、15C後半代

には既に建てられていたものと推定できる。この礎石建物も、前の据立柱建物同様、平面形が一般的ではなく、やはり山間の小寺院跡と考えた方がよさそうである。また、火葬墓群は同一場所に集中して営まれる事から、この小寺院に関する人々の敷地内墓地であった事は明らかであろう。ただ、本文中でも、検討した如く、なかなか具体的な葬法等はつかみにくい。第1号火葬墓だけは、棺台を設置した火葬所である事がわかるが、他は焼骨の量も少なく、通常の火葬墓とは異なる。焼骨を拾った後の残りを掻き集めてこれらのおさめたような感じである。寺院と火葬所の関係では、大宰府の推定金光寺跡のすぐ裏に15C頃の火葬所が営まれている例があり、当遺跡と共通するところである。

(中間研志)

# 圖 版



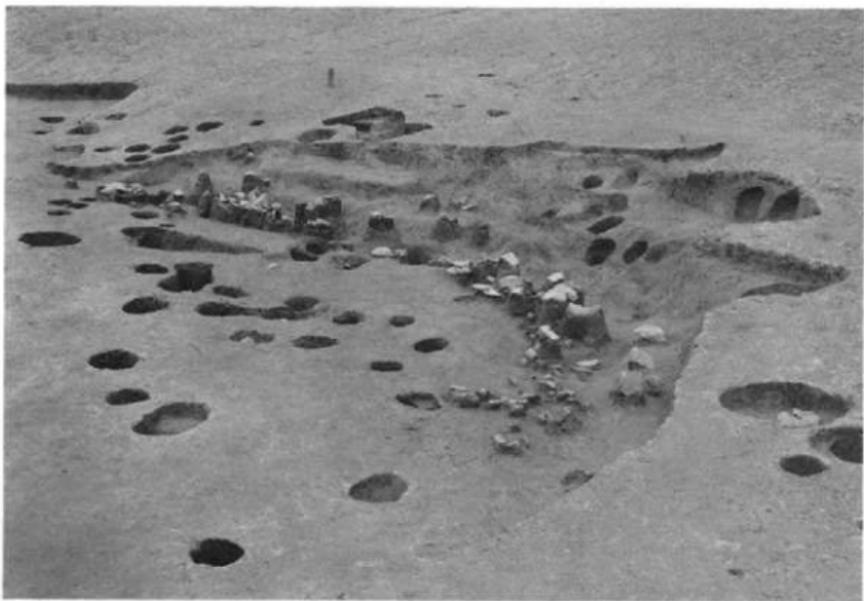
1 江栗遺跡全景（Ⅱ区礎石建物撤出時）（西上空から）



2 江栗遺跡全景（完掘後）（西上空から）



1 江柴遺跡1区全景(上空から)



2 1区1号工房跡(東から)



1 1区1号工房跡 (北から)



2 1区2号工房跡 (向こうは1号工房跡)



1 1区2号工房跡（北東から）



2 1区1号土城（北から）



1 発掘調査風景（1区1号工房跡付近）



2 発掘調査風景（1区1号工房跡内）



1 江栗遺跡Ⅱ区全景（礎石建物検出時）（上空から）



2 Ⅱ区礎石建物（上空から）



1 江梁遺跡II区全景 (掘立柱建物検出時) (上空から)



2 II区礎石建物 (東から)



1 II区礎石建物（北から）



2 II区掘立柱建物（東から）



1 II区1号火葬墓（南から）



2 II区1号火葬墓（集石除去後）（東から）



1 II区2号火葬墓 (左手前は3号火葬墓) (北から)



2 II区2号火葬墓 (集石除去後) (西から)



1 II区3号火葬墓（北東から）



2 II区3号火葬墓（集石除去後）（北東から）



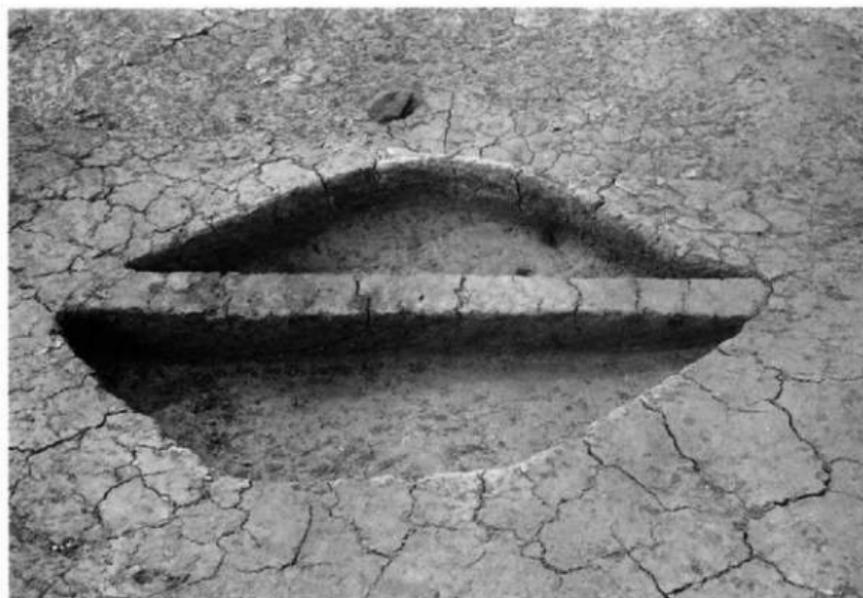
1 II区4号火葬墓 (南から)



2 II区5号火葬墓 (北から)



1 II区5号火葬墓 (南から)



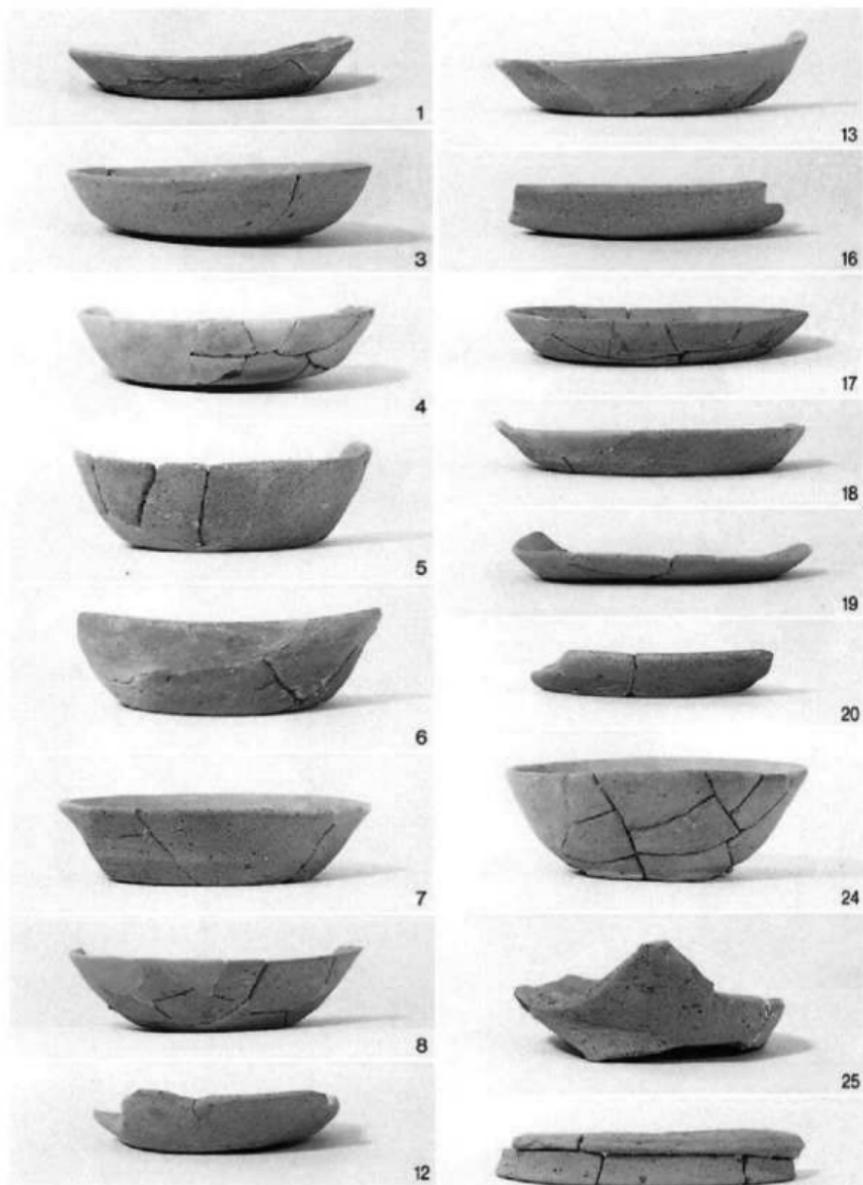
2 II区1号土塼 (南から)



1 II区2号土坑(東から)



2 II区発掘調査風景(掘立柱建物周辺)



I区1号工房跨出土器



27



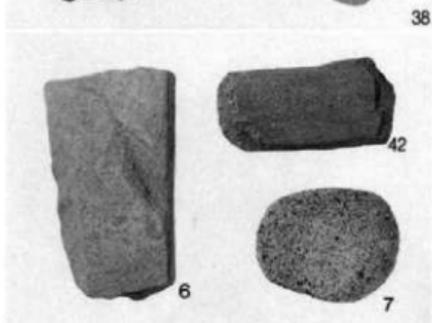
31



32



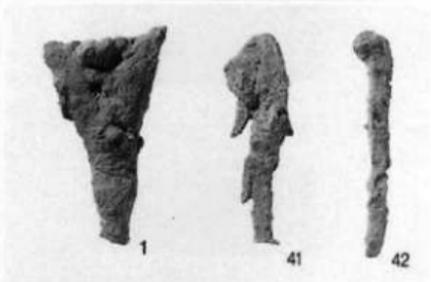
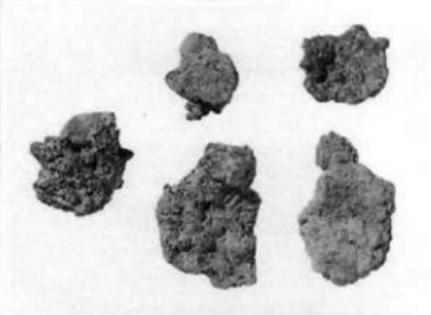
38



42

6

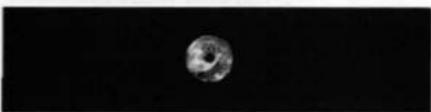
7



1

41

42



1 1区1号工房跡及びその周辺出土遺物

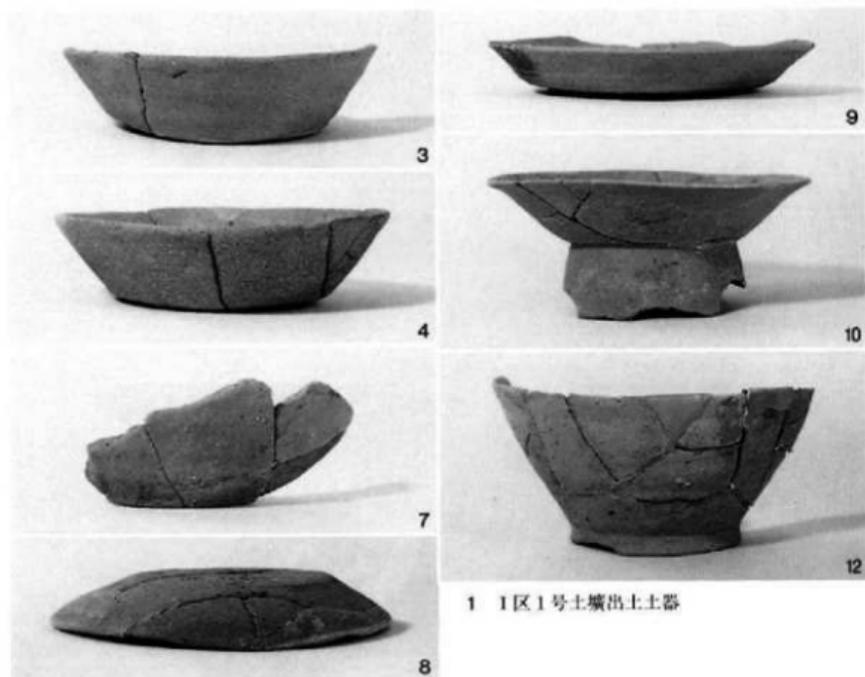


1

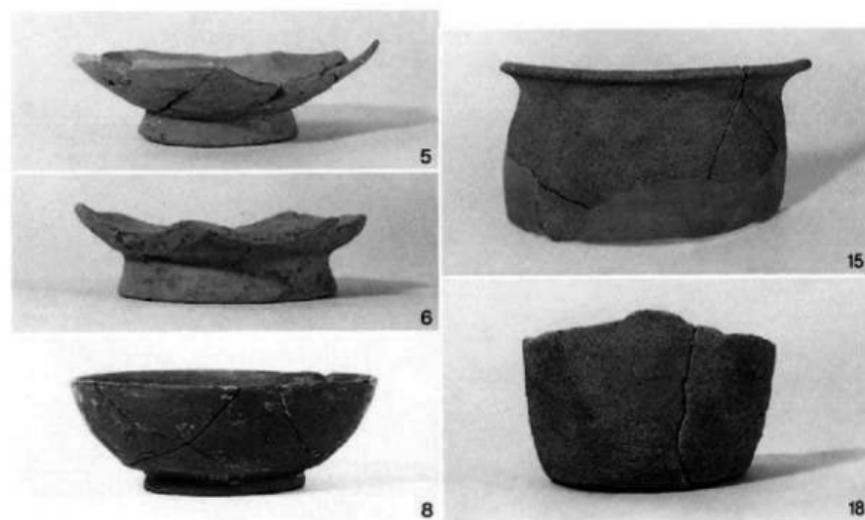


2

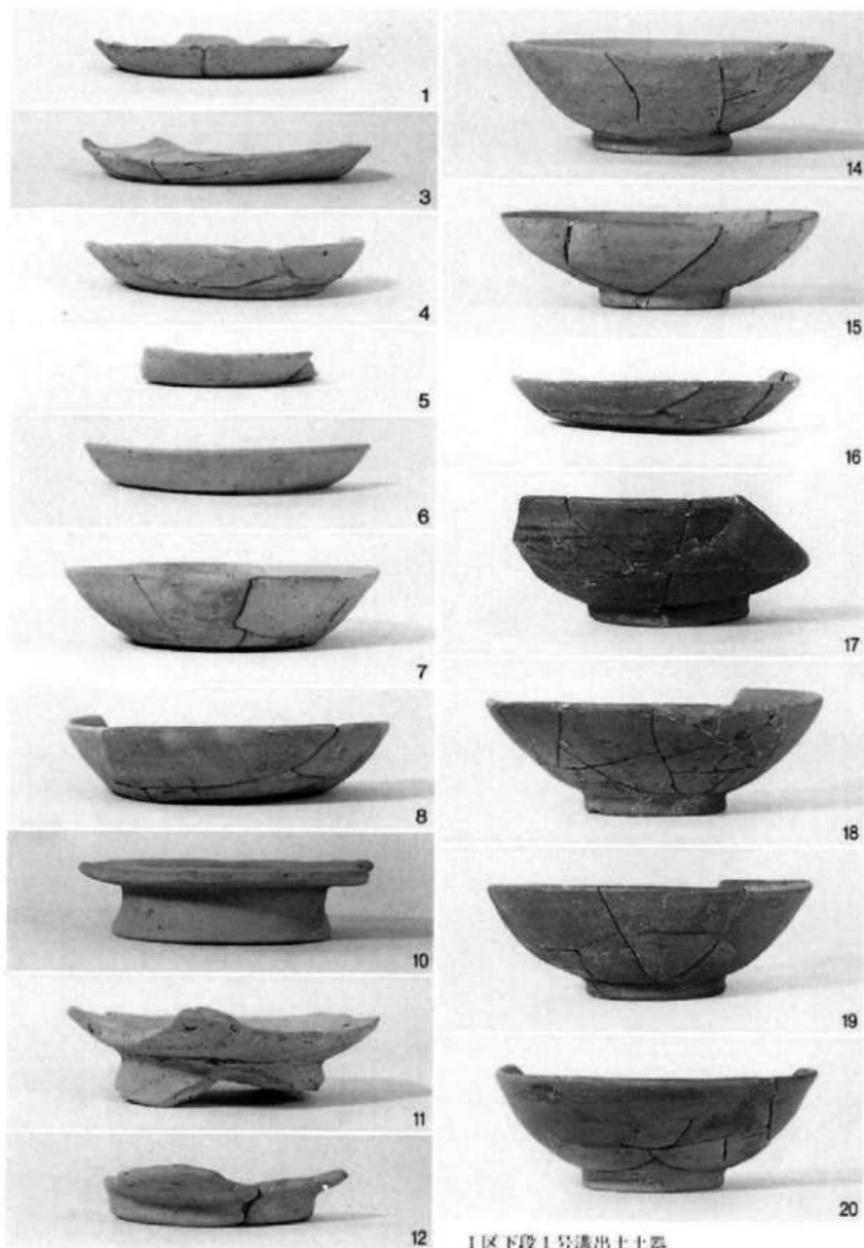
2 1区1号土壙出土土器



1 1区1号土城出土土器



2 1区各ピット出土土器



1区下段1号溝出土土器



26



8



28



10



36



12



1



14



6



17

1 1区下段1号溝及び6号溝上面出土土器



1



9



2



4



10

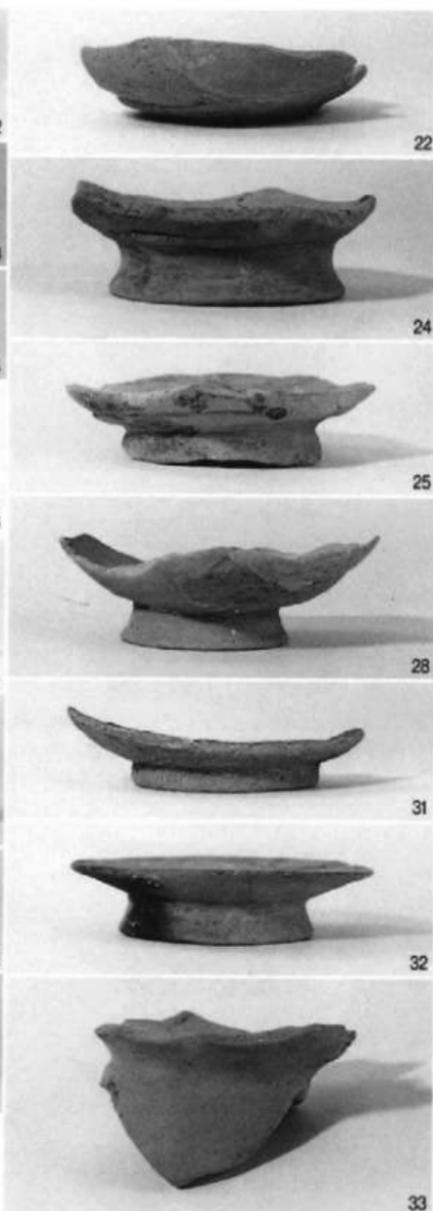
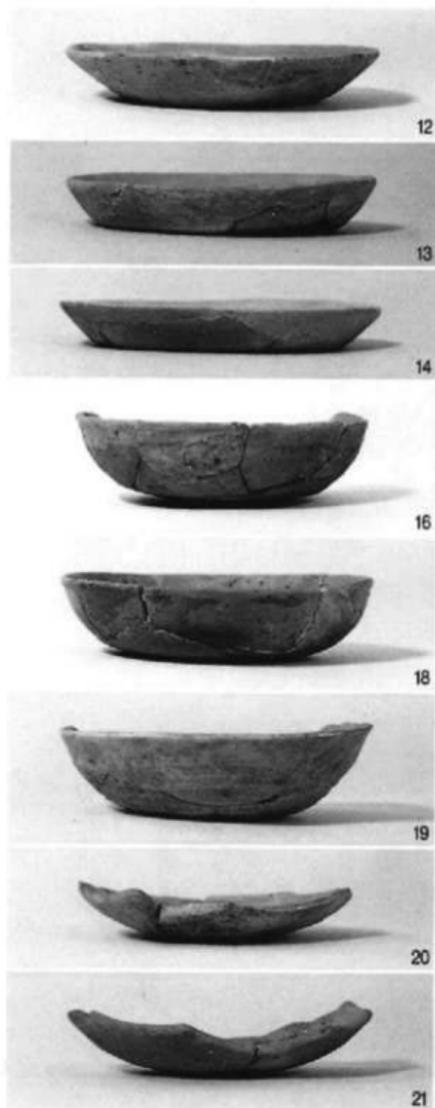


6



11

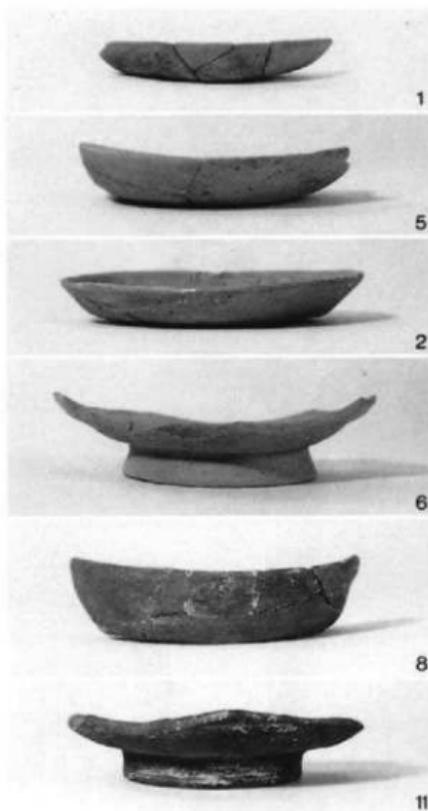
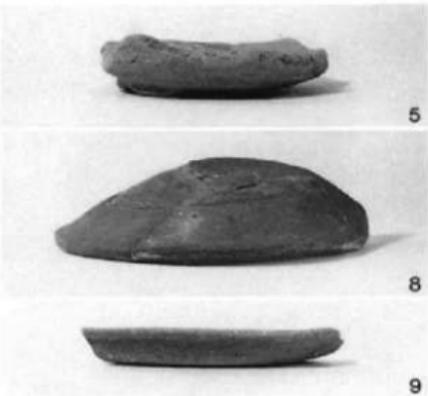
2 1区下段段落最下層出土土器



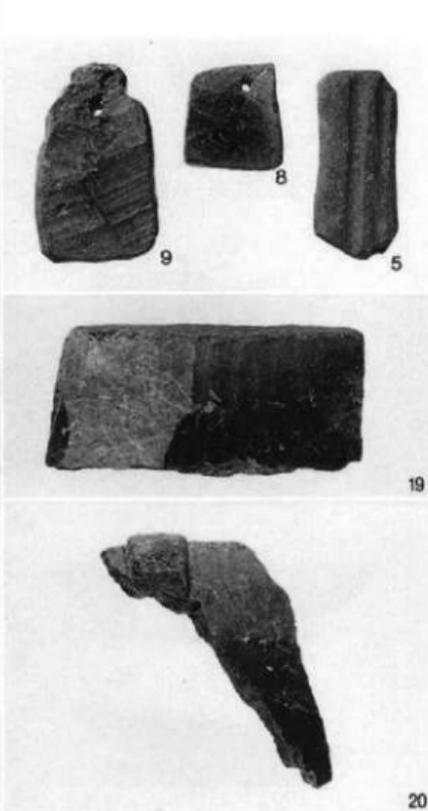
I区下段段落最下层出土器



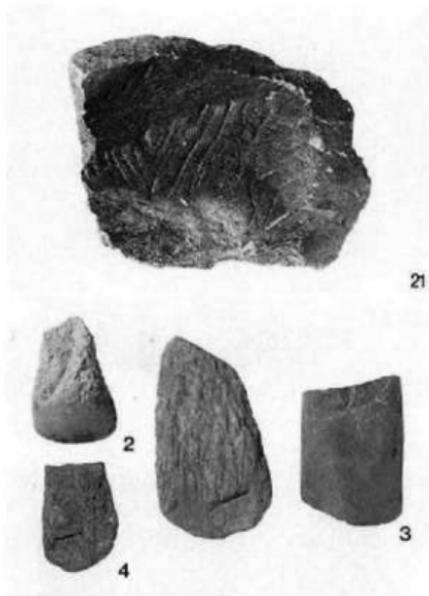
1 I区下段黑褐色包含层出土土器



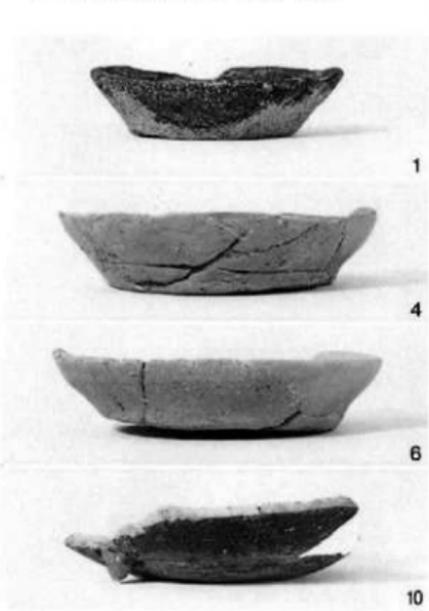
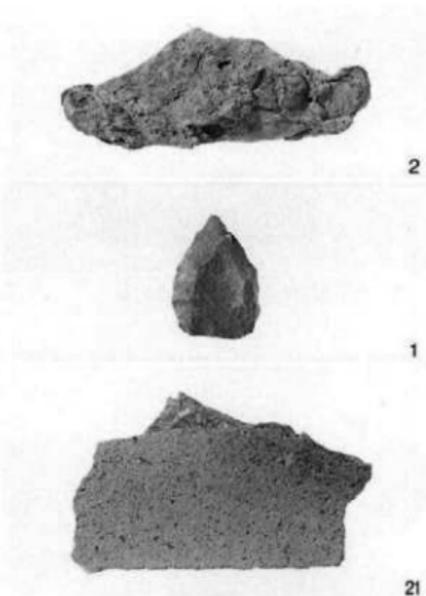
2 I区下段包含层等出土土器



3 I区出土锥·砾石·滑石製石鍋



1 I区出土滑石製石鏟・鉄器・石器



2 II区礎石建物関連出土遺物

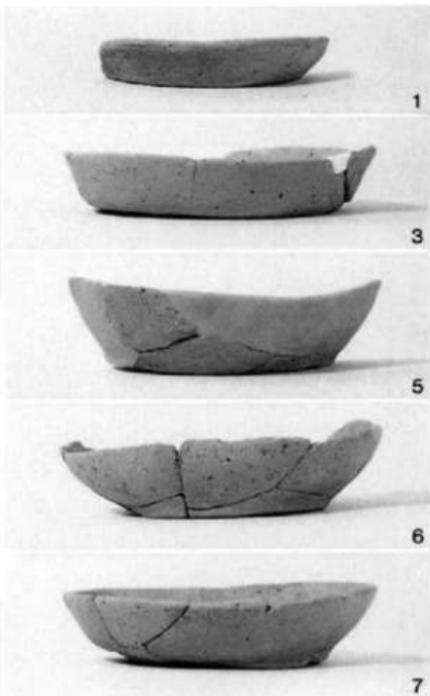




P9

P18

1 Ⅱ区福立柱建物出土土器



1

3

5

6

7

3 Ⅱ区2号土壙出土土器



火3

6

2 Ⅱ区火葬墓出土「崇寧通寶」土器



9

7

4 Ⅱ区包含層等出土土器・銅錢



5 Ⅱ区段落斜面出土須恵器

# 報告書抄録

ふりがな		しわ おかもといせき えぐりいせき							
書名		志波岡本遺跡 江栗遺跡							
副書名		朝倉郡杷木町大字志波所在遺跡の調査							
巻次		下巻							
シリーズ名		九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号		-45-							
編著者名		小池史智、中間研志							
編集機関		福岡県教育委員会							
所在地		〒812-77 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日		西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
志波岡本	福岡県朝倉郡 杷木町大字志 波字岡本  764・765  768・814 字梅道  699～705	404411	580154	33°21'40"	130°47'02"	19860422	9400	九州横断 自動車道 建設	
									19860620
									19870309
江栗	福岡県朝倉郡 杷木町大字志 波字江栗  913・918～ 920・942 967・970・972	404411	580112	33°21'43"	130°47'20"	19860522	3650		
						580155			
									19860812
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
志波岡本		古代	掘立柱建物跡	3	動物遺体 旧石器	大型建物			
		近世	土墳						
江栗		近代	溝状遺構	2	縄文土器、弥生土器、 須恵器、土師器、石器				
		縄文	遺物包含層						
		弥生～近世	工房跡						
		古代	礎石建物跡	5	土師器、須恵器 磁器、石鍋、権 鉄製品、鉄滓				
		中世	掘立柱建物跡						
			火葬墓 遺物包含層						

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H8	登録番号 8

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—45—

下 巻 志波岡本遺跡・江菜遺跡

平成9年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚8丁目2番15号

